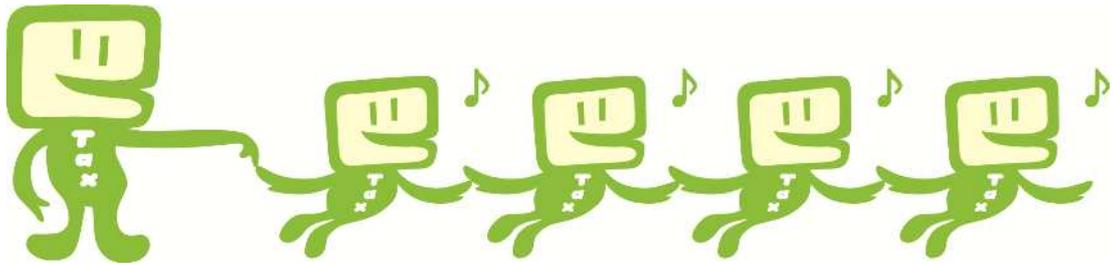


令和4年版

連結確定申告書 地方法人税確定申告書 個別帰属額等の届出書 等の記載の手引



令和4年10月
国 税 庁

法人番号 7000012050002

電子帳簿等保存制度を利用することで、
次のような方法で経理のデジタル化が可能です

- 会計ソフトで作った帳簿や書類をデータのまま保存
- 領収書やレシートなどをスマホで撮影して経理処理・保存

詳しくはこちら→

国税庁 電子帳簿保存法

検索



目 次

I	連結確定申告書及び地方法人税確定申告書の提出について	1
1	連結確定申告書及び地方法人税確定申告書の提出先及び提出期限	1
2	時価評価法人等の申告書等用紙について	1
3	消費税及び地方消費税について	2
4	連結確定申告書及び地方法人税確定申告書の添付書類	2
5	連結法人税の個別帰属額、連結地方法人税の個別帰属額及びこれらの計算の基礎を記載した書類	2
6	連結確定申告書及び地方法人税確定申告書の添付書類の編てつ順について	4
7	申告に当たっての留意事項	4
II	個別帰属額等の届出書の提出について	5
1	個別帰属額等の届出書の提出先及び提出期限	5
2	個別帰属額等の届出書の添付書類	5
3	連結法人税の個別帰属額及び連結地方法人税の個別帰属額の計算の基礎を記載した書類	5
4	個別帰属額等の届出書の編てつ順について	6
III	各表の記載の仕方	7
	・ 別表一の二「各連結事業年度の連結所得に係る申告書」	7
	・ 別表三の二「連結特定同族会社の連結留保金額に対する税額の計算に関する明細書」	19
	・ 別表三の二付表一「連結特定同族会社の連結留保金額から控除する連結留保控除額の計算に関する明細書」	21
	・ 別表三の二付表二「連結特定同族会社の連結留保金額に対する税額の個別帰属額の計算に関する明細書」	22
	・ 別表三の二付表三「連結特定同族会社の留保金個別帰属額から控除する留保控除個別帰属額の計算に関する明細書」	25
	・ 別表四の二「連結所得の金額の計算に関する明細書」	27
	・ 別表四の二付表「個別所得の金額の計算に関する明細書」	28
	・ 別表五の二(一)「連結利益積立金額の計算に関する明細書」	35
	・ 別表五の二(一)付表一「連結個別利益積立金額及び連結個別資本金等の額の計算に関する明細書」	36
	・ 別表五の二(一)付表二「連結子法人の株主等における帳簿価額修正額のうちその連結子法人に係る部分の金額の計算に関する明細書」	44
	・ 別表五の二(二)「連結法人の租税公課の納付状況等に関する明細書」	46
	・ 別表五の二(二)付表「各連結法人の租税公課の納付状況等に関する明細書」	47
	・ 別表六の二(一)「連結事業年度における所得税額の控除に関する明細書」	52
	・ 別表七の二「連結欠損金等の損金算入に関する明細書」	57

・	別表七の二付表一「連結欠損金当期控除額及び連結欠損金個別帰属額の計算に関する明細書」	61
・	別表七の二付表二「連結欠損金当期控除前の連結欠損金個別帰属額の調整計算に関する明細書」	64
・	別表八の二「連結事業年度における受取配当等の益金不算入に関する明細書」	66
・	別表八の二付表「連結事業年度における受取配当等の益金不算入の個別帰属額の計算に関する明細書」	71
・	別表十四の二「連結事業年度における寄附金の損金算入に関する明細書」	73
・	別表十五の二「交際費等の損金算入に関する明細書」	76
・	別表十九の二「旧法人税法第八十一条の十九第一項の規定による連結予定申告書・旧地方法人税法第十六条第一項の規定による予定申告書」	78
IV	「法人税申告書・地方法人税申告書の記載の手引」に準じて記載するもの	79
・	別表二「同族会社等の判定に関する明細書」	79
・	別表五(一)付表「種類資本金額の計算に関する明細書」	79
・	別表十一(一)「個別評価金銭債権に係る貸倒引当金の損金算入に関する明細書」	79
・	別表十一(一の二)「一括評価金銭債権に係る貸倒引当金の損金算入に関する明細書」	80
・	別表十六(一)「旧定額法又は定額法による減価償却資産の償却額の計算に関する明細書」	80
・	別表十六(二)「旧定率法又は定率法による減価償却資産の償却額の計算に関する明細書」	81
・	別表十六(六)「繰延資産の償却額の計算に関する明細書」	81
・	別表十六(八)「一括償却資産の損金算入に関する明細書」	82
・	別表十六(九)「特別償却準備金の損金算入に関する明細書」	82
V	個別帰属額の届出書等の記載の仕方	84
・	個別帰属額等の一覧表	84
・	各連結事業年度の連結法人税の個別帰属額の届出書	86
・	各連結事業年度の連結地方法人税の個別帰属額の計算に関する明細書	90
VI	参 考	92
VII	中小連結法人の判定等	102

略 語

法	法人税法（昭40法律第34号）
令	法人税法施行令（昭40政令第97号）
規則	法人税法施行規則（昭40大蔵省令第12号）
地方法	地方法人税法（平26法律第11号）
地方規則	地方法人税法施行規則（平26財務省令第22号）
措置法	租税特別措置法（昭32法律第26号）
措置法令	租税特別措置法施行令（昭32政令第43号）
措置法規則	租税特別措置法施行規則（昭32大蔵省令第15号）
震災特例法	東日本大震災の被災者等に係る国税関係法律の臨時特例に関する法律（平23法律第29号）
復興財源確保法	東日本大震災からの復興のための施策を実施するために必要な財源の確保に関する特別措置法（平23法律第117号）
復興特別所得税令	復興特別所得税に関する政令（平24政令第16号）
令和2年旧法	令和2年改正前の法
令和2年旧地方法	令和2年改正前の地方法
令和2年旧措置法	令和2年改正法第16条の規定による改正前の措置法
令和2年旧令	令和2年6月改正前の令
令和2年旧措置法令	令和2年6月改正前の措置法令
令和2年旧規則	令和2年6月改正前の規則
令和2年旧措置法規則	令和2年6月改正前の措置法規則
令和2年旧震災特例法	令和2年改正法第23条の規定による改正前の震災特例法
新信託法	信託法（平18法律第108号）

(注) 1 この手引は、令和4年4月1日以後に終了する連結事業年度等分の法人税及び地方法人税の申告書別表等に対応しています。

2 中小企業者等である連結法人の法人税率の特例（令和2年旧措置法68の8）をはじめとする法人税関係の租税特別措置の適用を受けようとする場合には「適用額明細書」を作成し、法人税申告書に添付する必要があります。

適用額明細書の記載方法については、国税庁ホームページ（https://www.nta.go.jp/publication/pamph/hojin/tekiyougaku/renketsu_r04.htm）に「租特透明化法に基づく『適用額明細書の記載の手引（連結法人用）』」を掲載していますので御参照ください。

I 連結確定申告書及び地方法人税確定申告書の提出について

1 連結確定申告書及び地方法人税確定申告書の提出先及び提出期限

連結親法人は、各連結事業年度等終了の日の翌日から2月以内に、納税地の所轄税務署長に対し連結確定申告書及び地方法人税確定申告書を提出しなければならないこととされています（令和2年旧法81の22、令和2年旧地方法19①）。ただし、連結親法人が定款、寄附行為、規則、規約その他これらに準ずるもの（以下「定款等」といいます。）の定めにより、若しくは連結法人に特別の事情があることにより、その連結事業年度等以後の各連結事業年度等終了の日の翌日から2月以内に決算についての定時総会が招集されない常況にあると認められる場合又は連結子法人が多数に上ることその他これに類する理由により各連結事業年度等の連結所得の金額若しくは連結欠損金額及び法人税の額の計算を了することができないためにその連結事業年度等以後の各連結事業年度等の連結確定申告書及び地方法人税確定申告書をそれぞれの提出期限までに提出することができない常況にあると認められる場合には、その連結親法人の提出期限の延長の特例の申請に基づき、連結確定申告書及び地方法人税確定申告書の提出期限を2月間（次の①及び②に該当する場合にはそれぞれに掲げる期間）延長することができます（令和2年旧法81の24、令和2年旧地方法19⑤）。

① 会計監査人を置いている場合で、かつ、その定款等の定めにより各連結事業年度終了の日の翌日から4月以内に決算についての定時総会が招集されない常況にあると認められる場合（②に該当する場合を除きます。）（令和2年旧法81の24①一）

その定めの内容を勘案して4月を超えない範囲内において税務署長が指定する月数の期間

② その特別の事情があることにより各連結事業年度終了の日の翌日から4月以内に決算についての定時総会が招集されない常況にあること、連結法人に特別の事情があることにより各連結事業年度終了の日の翌日から4月以内にその各連結事業年度の連結所得の金額又は連結欠損金額及び法人税の額の計算を了することができない常況にあることその他やむを得ない事情があると認められる場合（令和2年旧法81の24①二）

税務署長が指定する月数の期間

②1 提出期限の延長の特例を受けるためには、最初に適用を受けようとする連結事業年度終了の日の翌日から45日以内に納税地の所轄税務署長へ申請書を提出する必要があります（令和2年旧法81の24②）。

2 上記1の申請書は、法第75条の2（「確定申告書の提出期限の延長の特例」）の規定による確定申告書の提出期限の延長が認められていた法人であっても、改めて提出する必要があることに御注意ください。

2 時価評価法人等の申告書等用紙について

設立事業年度等の承認申請特例（令和2年旧法4の3⑥）による申請に基づく場合における連結親法人の最初連結事業年度において、連結子法人が時価評価法人等に該当することにより、その連結子法人の承認を受けた日を含む事業年度を連結申告ではなく単体申告を行うこととなるときは、国税庁ホームページ（<https://www.nta.go.jp/taxes/tetsuzuki/shinsei/annai/hojin/shinkoku/01.htm>）に掲載している単体申告用の申告書等用紙を御使用ください。

3 消費税及び地方消費税について

消費税及び地方消費税については、連結納税制度は適用されませんが、課税期間は法人税法上の事業年度とされているため（消費税法19①二、地方税法72の78③）、連結事業年度に合わせて課税期間が変わる可能性があります。特に、連結納税を適用する前において親法人と課税期間が異なる期間となっていた子法人についてはその課税期間が変更され、その変更後の課税期間に係る消費税及び地方消費税の確定申告が必要となりますので御注意ください。

④ 法人税について上記1の連結確定申告書の提出期限の延長の特例の適用を受ける連結親法人又はその連結子法人が、「消費税申告期限延長届出書」をそれぞれの納税地の所轄税務署長に提出した場合には、その提出をした日が含まれる連結事業年度（その提出をした日が連結事業年度終了の日の翌日から45日以内である場合のその連結事業年度を含みます。）以後の各連結事業年度終了の日が含まれる課税期間に係る消費税及び地方消費税の確定申告書の提出期限が1月延長されます（令和2年改正法第7条の規定による改正前の消費税法45の2②）。

4 連結確定申告書及び地方法人税確定申告書の添付書類

連結確定申告書及び地方法人税確定申告書には、連結親法人及び連結子法人の次に掲げる書類を添付します（令和2年旧規則37の12）。

- ① 貸借対照表及び損益計算書
 - ② 株主（社員）資本等変動計算書又は損益金の処分表
 - ③ 勘定科目内訳明細書
 - ④ 連結法人税の個別帰属額、連結地方法人税の個別帰属額及びこれらの計算の基礎を記載した書類
 - ⑤ 連結親法人の事業概況書（連結親法人との間に完全支配関係がある法人との関係を系統的に示した図を含みます。）
 - ⑥ 組織再編成に係る契約書等の写し
 - ⑦ 組織再編成に係る主要な事項の明細書
- ⑧ 組織再編成を行っていない場合には、⑥及び⑦の添付は不要です。
- ⑧ 特別償却の適用を受ける場合の明細書（特別償却等の償却限度額の計算に関する付表）及び圧縮記帳の適用を受ける場合の取用証明書など連結確定申告書に添付することが適用の要件とされている書類（以下「明細書・証明書等」といいます。）
 - ⑨ 適用額明細書（税額又は所得の金額を減少させる租税特別措置法の規定その他一定の規定の適用を受けない法人は提出の必要はありません。）

5 連結法人税の個別帰属額、連結地方法人税の個別帰属額及びこれらの計算の基礎を記載した書類

連結法人税の個別帰属額、連結地方法人税の個別帰属額及びこれらの計算の基礎を記載した書類は、連結法人ごとに作成し、連結確定申告書及び地方法人税確定申告書に添付することとなります。この連結確定申告書及び地方法人税確定申告書への添付に際しては、連結法人ごとに作成した連結法人税の個別帰属額、連結地方法人税の個別帰属額及びこれらの計算の基礎を記載した書類を取りまとめ、その表紙として個別帰属額等の一覧表を付してください（「6 連結確定申告書及び地方法人税確定申告書の添付書類の編てつ順について」を参照してください。）。

- (1) 連結法人税の個別帰属額及び連結地方法人税の個別帰属額を記載した書類は、個別帰属額の届出書を使用して作成し、連結確定申告書及び地方法人税確定申告書に添付します。

なお、連結子法人分の作成は、連結子法人が本店又は主たる事務所の所在地の所轄税務署長に届け出る個別帰属額の届出書の写しを使用することとして差し支えありません。

- (2) 連結法人税の個別帰属額及び連結地方法人税の個別帰属額の計算の基礎を記載した書類の作成は、連結確定申告書及び地方法人税確定申告書の別表の写しを使用することとして差し支えありません。

なお、連結子法人分については、添付を省略することができます（添付書類としてではなく、個別帰属額の届出書として提出する場合は省略できません。）。

また、連結親法人分の作成及び添付は、次の点に御注意ください。

- ① 個別帰属額に係る明細書（各別表の付表）だけでなく、その個別帰属額を算出するために必要な別表も添付する必要があります。

例えば、外国税額控除を適用する連結親法人にあつては、「別表六の二(二)付表 各連結法人の外国税額の控除に関する明細書」の「連結控除限度個別帰属額13」の金額の計算において「別表六の二(二) 連結事業年度における外国税額の控除に関する明細書」の「連結控除限度額15」の金額が必要となるため、「別表六の二(二)付表」だけでなく「別表六の二(二)」も併せて添付することとなります。

- ② 別表の一部に個別帰属額に係る記載欄が設けられている別表については、その個別帰属額に係る記載欄だけでなく、それ以外の欄についても記載します。

例えば、「別表十四の二 連結事業年度における寄附金の損金算入に関する明細書」にあつては、連結グループ全体の損金不算入額等が個別帰属額の計算に必要なため、「個別帰属額の計算」以外の各記載欄につき、その連結所得の金額の計算において記載した金額を転記します。

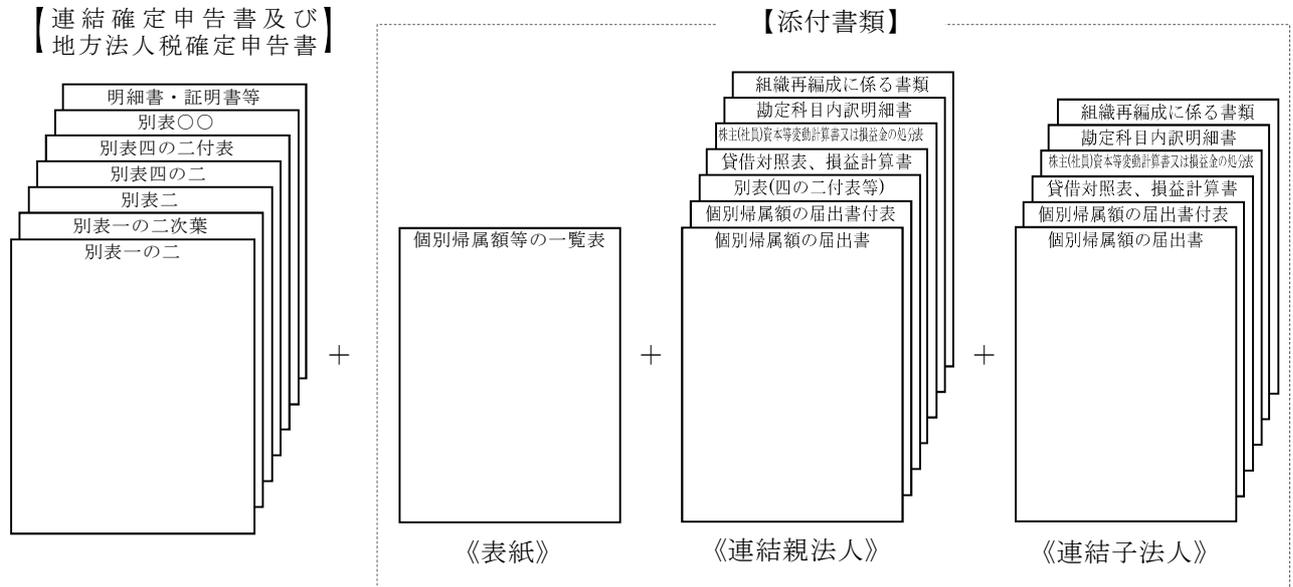
このことは、「別表六の二(一) 連結事業年度における所得税額の控除に関する明細書」などについても同様です。

- ③ 連結親法人と連結子法人の全てが記載される別表については、連結親法人以外の記載欄を消さずに添付してください。

例えば、連結グループで損金算入限度額が設けられている「別表十五の二 交際費等の損金算入に関する明細書」にあつては、「個別帰属損金不算入額」の「同上以外の場合23」の計算の基礎となる「損金不算入額5」の算出に各連結法人の支出交際費等の額の合計額及び支出交際費等の額のうち接待飲食費の額の合計額が必要であるため、連結法人の全てにつき「交際費6」から「同上のうち接待飲食費の額21」までの各欄を記載します。

6 連結確定申告書及び地方法人税確定申告書の添付書類の編てつ順について

連結確定申告書及び地方法人税確定申告書の添付書類については、「個別帰属額等の一覧表」を表紙として、連結親法人及び連結子法人ごとに次の区分に応じた順に並べた上で、連結確定申告書及び地方法人税確定申告書に添付して提出してください。



- (注) 1 添付書類の連結子法人分については、連結子法人ごとに、以降同じ順で並べてください。
 2 上図では、連結子法人分の連結法人税の個別帰属額及び連結地方法人税の個別帰属額の計算の基礎を記載した書類（申告書別表）の添付を省略しています（5(2)を参照してください。）。

7 申告に当たっての留意事項

(1) 法人課税信託の名称の併記

法第2条第29号の2イからハマまでに規定する法人課税信託の受託者がその法人課税信託について、国税に関する法律に基づき税務署長等に申告書等を提出する場合には、申告書等には、受託者の法人名又は氏名のほか、その法人課税信託の名称を併せて記載してください。

(注) 平成19年度税制改正における新信託法の制定に伴う法の改正後の規定は、原則として、新信託法の施行の日（平成19年9月30日）以後に効力が生ずる信託（遺言によってされた信託にあつては同日以後に遺言がされたもの）に限り、新法信託を含みます。）について適用し、同日前に効力が生じた信託（遺言によってされた信託にあつては同日前に遺言がされたものを含み、新法信託を除きます。）については、従前どおりとされています（平成19年改正法附則34①、平成19年改正令附則8）。

（新法信託とは、信託法の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律（平成18年法律第109号）第3条第1項、第6条第1項、第11条第2項、第15条第2項、第26条第1項、第30条第2項又は第56条第2項（新法の適用等）の規定により同法第3条第1項に規定する新法信託とされた信託をいいます。）

(2) e-Taxによる連結確定申告書及び地方法人税確定申告書の提出について

連結確定申告書及び地方法人税確定申告書は、電子申告（e-Tax）も可能です。

連結確定申告書及び地方法人税確定申告書の提出を電子申告（e-Tax）で行う場合には、e-Taxホームページ（<https://www.e-tax.nta.go.jp>）を参照してください。

Ⅱ 個別帰属額等の届出書の提出について

1 個別帰属額等の届出書の提出先及び提出期限

連結子法人は、各連結事業年度の連結確定申告書の提出期限までに、その連結子法人の本店又は主たる事務所の所在地の所轄税務署長に個別帰属額等の届出書（①個別帰属額の届出書、②連結法人税の個別帰属額及び連結地方法人税の個別帰属額の計算の基礎を記載した書類）及び添付書類（下記2参照）を提出しなければならないこととされています（令和2年旧法81の25、令和2年旧規則37の17）。

（注）連結法人に係る個別帰属額等の届出書の提出先の一元化について

連結親法人が連結確定申告書又は地方法人税確定申告書をe-Taxを使用する方法により提出した場合において、その連結親法人が連結子法人の個別帰属額等の届出書（個別帰属額の計算の基礎を記載した書類（申告書別表）並びに貸借対照表、損益計算書及び事業概況書などの添付書類を含みます。）を、e-Taxを使用する方法又は光ディスク等を提出する方法によりその連結親法人の納税地の所轄税務署長に提出したときは、その連結子法人がその個別帰属額等の届出書をその連結子法人の本店又は主たる事務所の所在地の所轄税務署長に提出したものとみなされます（令和2年旧法81の25②）。

2 個別帰属額等の届出書の添付書類

個別帰属額等の届出書には、次に掲げる書類を添付します（令和2年旧規則37の17）。

- ① 貸借対照表及び損益計算書
- ② 株主（社員）資本等変動計算書又は損益金の処分表
- ③ 勘定科目内訳明細書
- ④ 事業概況書
- ⑤ 組織再編成に係る契約書等の写し
- ⑥ 組織再編成に係る主要な事項の明細書

（注）組織再編成を行っていない場合には、⑤及び⑥の添付は不要です。

14に掲げる連結確定申告書及び地方法人税確定申告書の添付書類のうち⑧の明細書・証明書等については、その明細書・証明書等が連結子法人に係るものである場合には、個別帰属額等の届出書にその写しを添付してください。

なお、令和2年旧規則37条の6第1項第8号（外国税額控除を受けるための書類等）の書類のうち連結子法人に係るものは、連結確定申告書及び地方法人税確定申告書に添付することに代えて、その連結子法人の個別帰属額等の届出書に添付することもできます。その際には、連結確定申告書及び地方法人税確定申告書の別表六の二(ロ)の下部余白にその旨を記載してください。

3 連結法人税の個別帰属額及び連結地方法人税の個別帰属額の計算の基礎を記載した書類

連結法人税の個別帰属額及び連結地方法人税の個別帰属額の計算の基礎を記載した書類の作成は、連結確定申告書及び地方法人税確定申告書の別表の写しを使用することとして差し支えありませんが、添付を省略することはできません。この点、15(2)と異なりますので御注意ください。

また、作成及び添付は、次の点に御注意ください。

- ① 個別帰属額に係る明細書（各別表の付表）だけでなく、その個別帰属額を算出するために必要

Ⅲ 各表の記載の仕方

別表一之二

「各連結事業年度の連結所得に係る申告書」

1 この表の用途

この表は、連結親法人が連結確定申告（令和2年旧法第81条の22第1項（連結確定申告）の規定による申告書（その申告書に係る期限後申告書を含みます。）の提出をいいます。以下同じです。）若しくは仮決算による連結中間申告（令和2年旧法第81条の20第1項（仮決算をした場合の連結中間申告書の記載事項等））に規定する申告書の提出をいいます。以下同じです。）又はこれらの申告に係る修正申告（修正申告書の提出をいいます。以下同じです。）をする場合及び令和2年旧地方法第6条第3号に掲げる法人が確定申告（令和2年旧地方法第19条第1項（確定申告）の規定による申告書（その申告書に係る期限後申告書を含みます。）の提出をいいます。以下同じです。）若しくは仮決算による中間申告（令和2年旧地方法第17条第1項（仮決算をした場合の中間申告書を提出する場合の記載事項等））の規定による申告書の提出をいいます。以下同じです。）又はこれらの申告に係る修正申告をする場合に使用します。

2 各欄の記載要領

(1) 連結確定申告又は仮決算による連結中間申告及び地方法人税についての確定申告又は仮決算による中間申告の場合

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
「連結親法人名」及び「代表者」	法人名及び代表者名を記載してください。	必ずフリガナを付けてください。
「法人番号」	国税庁から通知を受けた13桁の連結親法人の法人番号を記載します。	法人番号は国税庁法人番号公表サイト (https://www.houjin-bangou.nta.go.jp) から検索することができます。
「法人区分」		18ページの「(参考) 税率区分」の親法人区分欄を参照してください。
「同上が1億円以下の普通法人のうち中小法人に該当しないもの」	当期末における資本金の額若しくは出資金の額が1億円以下である又は資本若しくは出資を有しない連結親法人が、次のいずれかの法人に該当する場合には、「非中小法人」を○で囲んで表示します。 (1) 相互会社 (2) 次のいずれかの法人（以下「大法人」といいます。）との間にその大法人による完全支配関係がある法人 ① 資本金の額又は出資金の額が5億円以上である法人 ② 相互会社（外国相互会社を含みます。） ③ 令和2年旧法第4条の7（受託法人等に	非中小法人の判定については、102ページを参照してください。

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
	<p>関するこの法律の適用))に規定する受託法人(以下「受託法人」といいます。)</p> <p>(3) その連結親法人との間に完全支配関係がある全ての大法人が有する株式及び出資の全部をいずれか一の大法人が有するものとみなしたときにそのいずれか一の大法人による完全支配関係があることとなる法人(2)に掲げる法人を除きます。)</p> <p>(4) 受託法人</p>	
「同非区分」	別表二の「判定結果18」で判定した区分を○で囲んで表示します。	
「旧納税地及び旧法人名等」	<p>当期中に連結親法人の納税地若しくは法人名に変更があった場合又は合併法人が被合併法人(連結親法人であった法人)の最後連結事業年度の申告をする場合には旧納税地又は旧法人名(被合併法人名)を、本店又は主たる事務所の所在地と納税地とが異なる場合には本店又は主たる事務所の所在地を記載するなど参考となる事項を記載します。</p>	
「※税務署処理欄」	<p>原則として記載する必要はありませんが、「売上金額」については、個別帰属額等の一覧表の「連結親法人及び連結子法人の個別帰属額等の合計額」における「売上金額」の金額を移記してください。</p>	<p>税務署における事務の効率化につながることから、売上金額の記載をお願いします。</p>
<p>適用額明細書提出の有無</p> <p><input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無</p>	<p>租税特別措置の適用状況の透明化等に関する法律第3条第1項((適用額明細書の提出義務))に規定する適用額明細書を申告書に添付する場合には、「有」を○で囲んで表示します。</p> <p>また、当期において、税額又は所得の金額を減少させる法人税関係の租税特別措置の適用を受けないため、適用額明細書を提出しない場合には、「無」を○で囲んで表示します。</p>	<p>適用額明細書の添付がなかった場合又は添付があっても虚偽の記載があった場合には、法人税関係の租税特別措置の適用が受けられないこととされています。これらの場合においても、その後誤りのない適用額明細書の提出があったときは、故意に、添付がなかった場合又は虚偽の記載があった場合を除いて、法人税関係の租税特別措置の適用を受けることができますので、できるだけ速やかに、誤りのない適用額明細書の提出をお願いします。</p>
<p>税理士法第30条の書面提出有</p> <p><input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無</p> <p>税理士法第33条の2の書面提出有</p> <p><input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無</p>	<p>税理士法第30条((税務代理の権限の明示))又は第33条の2((計算事項、審査事項等を記載した書面の添付))に規定する書面を申告書に添付する場合には、該当する欄を○で囲んで表示します。</p>	

欄		記 載 要 領	注 意 事 項
「連結事業年度分の法人税申告書」		<p>空欄には、連結確定申告書と連結中間申告書との区分に応じてそれぞれ「連結確定」又は「連結中間」と記載します。</p> <p>なお、期限後申告書である場合には、「期限後連結確定」と記載します。</p>	<p>この申告が連結中間申告である場合には、更に、</p> <p>〔連結中間申告の 令和 年 月 日〕 〔場合の計算期間 令和 年 月 日〕</p> <p>にその計算期間を記載します。</p>
「課税事業年度分の地方法人税申告書」		<p>空欄には、確定申告書と中間申告書との区分に応じてそれぞれ「確定」又は「中間」と記載します。</p> <p>なお、期限後申告書である場合には、「期限後確定」と記載します。</p>	
法人税額の計算	「連結納税の承認を取り消された場合等における既に控除された法人税額の特別控除額の加算額5」	<p>次に掲げる場合の区分に応じそれぞれ次により記載します（(1)及び(2)のいずれにも該当する場合には、これらの金額の合計額を記載します。）。</p> <p>(1) 別表六(注)「31」に金額の記載がある場合、その金額を記載します。</p> <p>(2) 令和2年旧法第4条の5第1項（連結納税の承認の取消し等）の規定により令和2年旧法第4条の2（連結納税義務者）の承認を取り消された日の前日の属する連結事業年度で、次に掲げる規定の適用がある場合、これらの規定により当期の法人税額に加算される金額を記載します。</p> <p>① 令和3年改正前の措置法第68条の15の4第5項（特定中小連結法人が経営改善設備を取得した場合の特別償却又は法人税額の特別控除）</p> <p>② 令和2年旧措置法第68条の11第5項（中小連結法人が機械等を取得した場合の特別償却又は法人税額の特別控除）</p> <p>③ 令和2年旧措置法第68条の13第4項（沖縄の特定地域において工業用機械等を取得した場合の法人税額の特別控除）</p> <p>④ 令和2年旧措置法第68条の15の5第5項（中小連結法人が特定経営力向上設備等を取得した場合の特別償却又は法人税額の特別控除）</p> <p>⑤ 平成30年改正前の措置法第68条の10第5項（エネルギー環境負荷低減推進設備等を取得した場合の特別償却又は法人税額の特別控除）</p>	<p>この場合、その金額の計算に関する明細を別紙に記載して添付します。</p>
	「法人税額計10」	<p>令和2年旧措置法第68条の67第1項（連結法人に用途秘匿金の支出がある場合の課税の特例）に規定する用途秘匿金の支出がある場合には、その用途秘匿金の支出の額の40%相当額をこの欄の上段に外書として記載します。</p>	<p>この場合、「控除税額13」及び「差引連結所得に対する法人税額14」には、この外書として記載した金額を「10」に含めて計算します。</p>

欄		記 載 要 領	注 意 事 項
法 人	「 仮装経理に基づく過大申告の更正に伴う控除法人税額12 」	当期が仮装経理に基づく過大申告の更正があった日の属する連結親法人事業年度（令和2年旧法第15条の2第1項（連結事業年度の意義）に規定する連結親法人事業年度をいいます。）開始の日から5年以内に開始した連結事業年度であり、かつ、その更正の通知書に記載された繰越控除される法人税額のうち前期以前の法人税額からまだ控除されていない金額がある場合に、その金額を記載します。	連結親法人の最終連結事業年度（令和4年3月31日以後に終了する連結事業年度をいいます。）の連結確定申告書の提出期限が到来した場合には、仮装経理法人税額を還付することとします。
	「 差引連結所得に対する法人税額14 」	この金額が100円未満となる場合又はマイナスとなる場合は記載しないでください。	
税 額	「 連結中間申告分の法人税額15 」	この申告が連結確定申告である場合に連結中間申告により納付すべき法人税額を記載します。	その税額の納付の有無にかかわらず記載します。
	「 差引確定法人税額(14)-(15) 」 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block; margin-left: 10px;"> 連結中間申告の場合はその税額とし、マイナスの場合は、 (26)へ記入 16」 </div>	この金額が100円未満となる場合又はマイナスとなる場合は記載しないでください。この場合のマイナスの金額は「連結中間納付額26」に記載します。	
	「 所得税の額17 」	別表六の二(一)「6の③」に内書きした金額がある場合には、その金額を別表六の二(一)「6の③」の金額から控除した金額を記載します。	
の	「 所得税額等の還付金額25 」	この申告が仮決算による連結中間申告である場合に、令和2年旧法第81条の29（所得税額等の還付）の規定による還付を受けようとするときは、「所得税の額17」の金額、「控除しきれなかった金額21」の金額又は別表七の二付表三「1」の金額のうち、いずれか少ない金額を記載します。	
	「 所得税額等の還付金額25 」から「 計28 」までの各欄	この申告が連結確定申告であり、かつ、所得税額等の還付金額、法人税の連結中間納付額の還付金額又は連結欠損金の繰戻しによる還付請求税額がある場合に、それぞれの金額を記載します。	
計 算	「 連結欠損金の繰戻しによる還付請求税額27 」	この申告が連結確定申告である場合には、連結欠損金の繰戻しによる還付請求書の「還付金額15」をこの欄の外書に移記します。	令和2年旧措置法第68条の97各号（中小連結法人の欠損金等以外の欠損金の繰戻しによる還付の不適用）に掲げる連結親法人以外の連結親法人にあっては、当期が平成14年4月1日から令和6年3月31日までの間に終了する各連結事業年度である

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
法 人 税 額 の 計 算		<p>場合には、令和2年旧法第81条の31第4項((連結欠損金の繰戻しによる還付)の規定に該当する場合の同項に規定する連結事業年度において生じた連結欠損金額、同条第5項に規定する災害損失欠損金額及び令和2年改正法第15条の規定による改正前の措置法第68条の98第1項((中小連結法人の欠損金等以外の欠損金の繰戻しによる還付の不適用))に規定する設備廃棄等欠損金額があるときを除き、令和2年旧法第81条の31の規定の適用を受けることができませんので御注意ください。</p> <p>なお、普通法人である連結親法人のうち、当期末の資本金の額若しくは出資金の額が1億円以下であるもの又は資本若しくは出資を有しないもの(相互会社を除きます。)(当期末において資本金の額又は出資金の額が5億円以上である法人等による完全支配関係がある法人など令和2年旧法第66条第6項第2号又は第3号《各事業年度の所得に対する法人税の税率》に掲げる法人など、令和2年旧措置法第68条の97各号に掲げる連結親法人の各連結事業年度において生じた連結欠損金額については、令和2年旧法第81条の31の規定の適用を受けることができます。</p>

欄		記 載 要 領	注 意 事 項
法 人 税 の 計 算	「(1)のうち中小法人等の年800万円相当額以下の金額 ((1)と800万円× $\frac{1}{12}$ のうち少ない金額) 50」	<p>「50」は、次のいずれかに該当する法人が記載します。</p> <p>(1) 普通法人である連結親法人で令和2年旧法第81条の12第2項((各連結事業年度の連結所得に対する法人税の税率))の規定の適用を受けるもの</p> <p>(2) 協同組合等である連結親法人及び令和2年旧措置法第68条の100((特定の医療法人である連結親法人の法人税率の特例))の規定の適用を受ける医療法人である連結親法人のうち、令和2年旧措置法第68条の8((中小企業者等である連結法人の法人税率の特例))の規定の適用を受けるもの</p> <p>なお、分子の空欄には、当期の月数(暦に従って計算し、1月未満の端数は切り上げます。)を記載します。</p> <p>また、この算式により計算した金額に1,000円未満の端数がある場合には、その端数を切り捨てた金額を記載しますが、その端数が「1」の連結所得金額の1,000円未満の端数より多いときは、その端数を切り上げた金額を記載します。</p>	中小法人の判定については、102ページを参照してください。
	「(1)のうち特例税率の適用がある協同組合等の年10億円相当額を超える金額51」	特定の協同組合等である連結親法人(令和2年旧措置法第68条の108((特定の協同組合等である連結親法人の法人税率の特例))の規定の適用を受ける協同組合等である連結親法人)が記載します。	
	「(50)の15%、16%又は19%相当額53」	<p>次の場合に応じ、それぞれ次により記載します。</p> <p>(1) 普通法人である連結親法人が令和2年旧措置法第68条の8の規定の適用を受ける場合 「(50)の15%、16%又は19%相当額」</p> <p>(2) 協同組合等である連結親法人及び令和2年旧措置法第68条の100の規定の適用を受ける医療法人である連結親法人が令和2年旧措置法第68条の8の規定の適用を受ける場合 「(50)の15%、16%又は19%相当額」</p> <p>(3) 普通法人である連結親法人が令和2年旧措置法第68条の8の規定の適用を受けない場合 「(50)の15%、16%又は19%相当額」</p>	<p>普通法人である連結親法人のうち適用除外事業者に該当する法人には、軽減税率の特例措置(左記(1)及び(2))は適用されませんので御注意ください。</p> <p>(注) 適用除外事業者とは、その連結事業年度開始の日前3年以内に終了した各連結事業年度の連結所得の金額の平均が15億円を超える法人などをいいます(109ページを参照してください)。</p>
	「(52)の20%又は23.2%相当額55」	<p>「55」は、次に掲げる法人の区分に応じ、それぞれ次により記載します。</p> <p>(1) 協同組合等である連結親法人及び令和2年旧措置法第68条の100の規定の適用を受ける医療法人である連結親法人 「(52)の20% 又は23.2%相当額」</p> <p>(2) (1)以外の連結親法人 「(52)の20% 又は23.2%相当額」</p>	

欄		記 載 要 領	注 意 事 項
地 方 法 人	「 仮装経理に基づく過大申告の更正に伴う控除地方法人税額41 」	当期が仮装経理に基づく過大申告の更正があった日の属する課税事業年度開始の日から5年以内に開始した課税事業年度であり、かつ、その更正の通知書に記載された繰越控除される地方法人税額のうち前期以前の地方法人税額からまだ控除されていない金額がある場合に、その金額を記載します。	連結親法人の最終課税事業年度（連結親法人事業年度が令和4年3月31日以後に終了する連結事業年度をいいます。）の連結確定申告書の提出期限が到来した場合には、仮装経理地方法人税額を還付することとします。
	「 差引地方法人税額42 」	この金額が100円未満となる場合又はマイナスとなる場合は記載しないでください。	
人	「 中間申告分の地方法人税額43 」	この申告が確定申告である場合に中間申告により納付すべき地方法人税額を記載します。	その税額の納付の有無にかかわらず記載します。
	「 差引確定地方法人税額 (42)－(43) 「 中間申告の場合はその税額とし、マイナスの場合は、(45)へ記入 」 44 」	この金額が100円未満となる場合又はマイナスとなる場合は記載しないでください。この場合のマイナスの金額は「この申告による還付金額45」に記載します。	
税 額 の 計 算	「 この申告による還付金額45 」	<p>この申告が確定申告であり、かつ、地方法人税の中間納付額の還付金額がある場合に、その金額を記載します。</p> <p>また、この欄の外書には、「27」の外書に記載した金額がある場合において、令和2年旧地方法第23条第1項((欠損金の繰戻しによる法人税の還付があった場合の還付))に規定する確定地方法人税額があるときに、次の還付所得連結事業年度に該当する課税事業年度の区分に応じ、それぞれ次の金額を記載します。</p> <p>なお、この金額が令和2年旧法第81条の31第1項に規定する還付所得連結事業年度に該当する課税事業年度の別表一の二の「40」+「41」+「42」により計算した金額を超える場合には、その計算した金額を記載します。</p> <p>(1) 令和元年10月1日に開始した課税事業年度 「27」の外書の金額に4.4%を乗じた金額</p> <p>(2) 令和元年10月1日以後に開始する課税事業年度 「27」の外書の金額に10.3%を乗じた金額</p>	<p>この計算に当たって、次に掲げる場合には、それぞれ次に掲げる金額を控除します。</p> <p>(1) 左記の「課税事業年度」に係る連結事業年度の別表一の二の「5」、「7」又は「10の外書」に金額の記載がある場合…これらの金額にそれぞれ4.4%又は10.3%を乗じた金額の合計額</p> <p>(2) 左記の「課税事業年度」に係る地方法人税のうち既に令和2年旧地方法第23条第1項の規定により還付された金額がある場合…その還付をされた金額</p>

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
<p>「連結所得の金額に対する法人税額56」及び「課税連結留保金額に対する法人税額57」</p>	<p>「連結所得の金額に対する法人税額33」及び「課税連結留保金額に対する法人税額34」の金額に1,000円未満の端数がある場合には、その端数を切り捨てた金額を記載します。</p>	
<p>「還付を受けようとする金融機関等」</p>	<p>「計28」及び「この申告による還付金額45」の還付金額の受取については、希望する振込先預貯金口座等を次の場合に応じ、それぞれ次により記載します。</p> <p>(1) 銀行等の預金口座の場合 ((2)の場合を除きます。)</p> <p>金融機関名、本支店名、預金種類及び口座番号を記載してください。</p> <p>(2) ゆうちょ銀行の貯金口座の場合</p> <p>「ゆうちょ銀行の貯金記号番号」に貯金総合通帳の記号番号のみを記載してください。</p> <p>(注) ゆうちょ銀行の各店舗又は郵便局窓口での受取を希望する場合には、「郵便局名等」に受取を希望する郵便局名等のみを記載してください。</p>	<p>(1) 連結欠損金の繰戻しによる還付請求税額があるときは、別に還付請求書の提出が必要です。</p> <p>(2) 口座名義は、申告書に記載した法人名義の口座をご利用ください。口座名義に店舗・事務所名などが含まれている場合や商号変更前の名称である場合には、振込みができませんことがあります。</p>

(2) 修正申告の場合

(1)によるほか、次により記載します。

欄		記 載 要 領	注 意 事 項
	「連結事業年度分の法人税申告書」	空欄には、連結確定申告書と連結中間申告書との区分に応じてそれぞれ「修正連結確定」又は「修正連結中間」と記載します。	法人税のみ修正申告を行う場合には、「課税事業年度分の地方法人税申告書」を二重線で消去し、地方法人税のみ修正申告を行う場合には、「連結事業年度分の法人税申告書」を二重線で消去します。
	「課税事業年度分の地方法人税申告書」	空欄には、確定申告書と中間申告書との区分に応じてそれぞれ「修正確定」又は「修正中間」と記載します。	
法人税額の計	「連結中間申告分の法人税額15」	この申告前の連結確定申告等において法人税の連結中間納付額の還付金額がある場合にも、その還付金額を控除する前の連結中間申告分の法人税額を記載します。	
	「所得税額等の還付金額25」又は「連結中間納付額26」		既に還付を受けているかどうかにかかわらず記載します。
	「連結欠損金の繰戻しによる還付請求税額27」	令和2年旧法第81条の31の規定により還付請求をした法人税の額について、既に還付を受けている場合には、この修正申告により確定した連結欠損金額を基礎として計算される還付を受けるべき金額を本書に記載します。この場合において、既に還付を受けた金額のほか、その還付に際し還付加算金の支払を受けているときは、この申告による還付金額に対応する還付加算金の額を含めて記載します。	(例) 既に還付を受けた金額 500,000円 同上の還付加算金 30,000円 修正申告による還付金額 300,000円 還付を受けるべき金額に対応する還付加算金 $30,000円 \times \frac{300,000円}{500,000円}$ =18,000円 この欄に記載する金額 300,000円+18,000円 =318,000円
	「この申告前の連結所得金額又は連結欠損金額29」及び「連結所得金額又は連結欠損金額60」から「課税連結留保金額62」までの各欄	令和4年12月31日以後に終了する連結事業年度について修正申告をする場合には、記載しません。	
算	「法人税額63」	この申告前の申告書の「16」の金額を記載します。この申告が更正又は決定後初めてのものである場合には、法人税の更正決定通知書の「更正又は決定の金額」の「差引連結所得に対する法人税額」の金額から連結中間申告分の法人税額を控除した金額を記載します。	

欄		記 載 要 領	注 意 事 項
法 人	「還付金額64」	この申告前の申告書の「25」及び「26」の金額に、既に還付された連結欠損金の繰戻しによる法人税の還付金額を加算した金額を記載します。この申告が更正又は決定後初めてのものである場合には、法人税の更正決定通知書の「更正又は決定の金額」の「還付所得税額等」の金額及び「還付金額」の金額並びに連結中間申告分の法人税額から法人税の更正決定通知書の「更正又は決定の金額」の「差引連結所得に対する法人税額」の金額を控除した金額の合計額を記載します。	連結欠損金の繰戻しによる還付金額につき還付加算金の支払を受けている場合には、その還付加算金の額を含めて記載します。
	「この申告により納付すべき法人税額又は減少する還付請求税額 (16) - (63) 若しくは (16) + (64) 又は (64) - (28) 65」	「16」、「28」、「63」及び「64」の各欄のうち記載金額のある欄に応じ、次の金額を記載します。この場合、その金額が100円未満となる場合は記載しないでください。 (1) 「16」と「63」とがある場合には、「16」の金額から「63」の金額を控除した金額 (2) 「16」と「64」の本書とがある場合には、「16」の金額と「64」の本書の金額との合計額 (3) 「28」の本書と「64」の本書とがある場合には、「64」の本書の金額から「28」の本書の金額を控除した金額	
税 額 の 計 算	「連結欠損金の繰戻しによる還付請求税額27」、「計28」、「この申告により納付すべき法人税額又は減少する還付請求税額30」、「還付金額64」及び「この申告により納付すべき法人税額又は減少する還付請求税額65」の外書	各欄の外書は、この申告が連結欠損金の繰戻しによる還付金額が過大であったことによる修正申告であり、かつ、その繰戻しによる還付が行われていない場合に限り、次により記載します。 (1) 「27」及び「28」には、この申告による減少後の還付請求税額を外書きします。 (2) 「64」には、この申告前の還付請求税額を外書きします。 (3) 「30」及び「65」には、「64」の外書の金額から「28」の外書の金額を控除した金額を外書きします。	
	「連結欠損金等の当期控除額66」及び「翌期へ繰り越す連結欠損金67」	令和4年12月31日以後に終了する連結事業年度について修正申告をする場合には、記載しません。	
地 方 法 人 税 額 の 計 算	「中間申告分の地方法人税額43」	この申告前の確定申告等において地方法人税の中間納付額の還付金額がある場合にも、その還付金額を控除する前の中間申告分の地方法人税額を記載します。	
	「この申告による還付金額45」		既に還付を受けているかどうかにかかわらず記載します。

欄		記 載 要 領	注 意 事 項
地 方 法 人 税 額 の 計 算	「この申告による還付金額45」の外書	令和2年旧法第81条の31の規定により還付請求をした法人税の額に係る令和2年旧地方法第23条第1項に規定する確定地方法人税額について、この修正申告により確定した連結欠損金額を基礎として計算される還付を受けるべき金額を記載します。この場合、既に同項の規定により還付を受けた金額に係る還付加算金の支払を受けているときは、この申告による還付金額に対応する還付加算金の額を含めて記載します。	(例) 既に還付を受けた金額 50,000円 同上の還付加算金 3,000円 修正申告による還付金額 30,000円 還付を受けるべき金額に対応する還付加算金 $3,000円 \times \frac{30,000円}{50,000円}$ =1,800円 この欄に記載する金額 30,000円+1,800円 =31,800円
	「連結所得の金額に対する法人税額46」から「課税標準法人税額48」まで及び「連結所得の金額に対する法人税額68」から「課税標準法人税額70」までの各欄	令和4年12月31日以後に終了する連結事業年度について修正申告をする場合には、記載しません。	
	「確定地方法人税額71」	この申告前の申告書の「44」の金額を記載します。この申告が更正又は決定後初めてのものである場合には、地方法人税の更正決定通知書の「更正又は決定の金額」の「差引地方法人税額」の金額から中間申告分の地方法人税額を控除した金額を記載します。	
	「中間還付額72」	この申告前の申告書の「45」の金額を記載します。この申告が更正又は決定後初めてのものである場合には、中間申告分の地方法人税額から地方法人税の更正決定通知書の「更正又は決定の金額」の「差引地方法人税額」の金額を控除した金額を記載します。	
	「欠損金の繰戻しによる還付金額73」	令和2年旧地方法第23条第1項の規定により既に還付された金額がある場合に、その金額を記載します。 なお、この申告が更正又は決定後初めてのものである場合には、地方法人税の更正決定通知書の「更正又は決定の金額」の「還付金額」の金額を記載します。	令和2年旧地方法第23条第1項の規定により還付を受けた金額につき還付加算金の支払を受けている場合には、その還付加算金の額を含めて記載します。

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
地 方 法 人 税 額 の 計 算	<p>次に掲げる場合に応じ、それぞれ次により記載します。ただし、この金額が100円未満となる場合は記載しないでください。</p> <p>(1) 「44」に記載がある場合で、次のイ又はロの場合</p> <p>① 「71」に記載がある場合 $(44) - (71)$ 若しくは $(44) + (72) + (73)$ 又は $((72) - (45)) + ((73) - (45の外書))$</p> <p>② 「72」と「73」のいずれか又は両方に記載がある場合 $(44) - (71)$ 若しくは $(44) + (72) + (73)$ 又は $((72) - (45)) + ((73) - (45の外書))$</p> <p>(2) 「45」の本書と外書のいずれか又は両方に記載がある場合で、「72」と「73」のいずれか又は両方に記載がある場合 $(44) - (71)$ 若しくは $(44) + (72) + (73)$ 又は $((72) - (45)) + ((73) - (45の外書))$</p>	<p>「73」に金額の記載がない場合は、「73」－「45の外書」の金額を0として計算した金額を記載します。</p>

(参考) 税 率 区 分

連 結 親 法 人 区 分	税 率	適 用 額 明 細 書 の 提 出 有 り	
		軽 減 税 率 の 特 例	適 用 除 外 事 業 者
(1) 普通法人(2(4)を除きます。)	23.2%	—	—
(2) 普通法人(令和2年旧法81の12②の適用を受けるものに限り、(4)を除きます。)	800万円以下:19% 800万円超:23.2%	800万円以下:15% 800万円超:23.2%	800万円以下:19% 800万円超:23.2%
(3) 協同組合等(5)を除きます。…農業協同組合、漁業協同組合など法別表第三(協同組合等の表)に掲げる法人	20%	800万円以下:16% 800万円超:20%	—
(4) 特定の医療法人…令和2年旧措置法68の100①の規定の適用を受ける医療法人	800万円以下:19% 800万円超:23.2%	800万円以下:16% 800万円超:20%	20%
(5) 特定の協同組合等…令和2年旧措置法68の108①の規定の適用を受ける協同組合等	10億円以下:20% 10億円超:22%	800万円以下:16% 800万円超:20% 10億円超:22%	—

- (注) 1 適用額明細書の提出がない場合には、軽減税率の特例の適用はありませんので御注意ください。(2)～(5)の法人の「税率」欄については、適用額明細書の提出がない場合に適用される税率を表示しています。
- 2 (2(4)の連結親法人については、適用除外事業者の判定が必要となります。
- 3 普通法人とは、協同組合等以外の法人をいいます(例:株式会社、医療法人など)。

別表三の二

「連結特定同族会社の連結留保金額に対する税額の計算に関する明細書」

1 この明細書の用途等

この明細書は、別表二の「判定結果18」において「特定同族会社」に該当する連結親法人が令和2年旧法第81条の13(連結特定同族会社の特別税率)の規定の適用を受ける場合に使用します。

(注) 当期の連結所得の金額の計算上、次に掲げるような益金不算入額又は損金算入額がある場合には、当期の連結所得の金額が0であっても、当期の連結留保金額について同条の規定による連結特定同族会社の特別税率が適用されることがありますので御注意ください。

- ① 非適格合併による移転資産等の譲渡に係る譲渡損失額(令和2年旧法81の13②)
- ② 受取配当等の益金不算入額(令和2年旧令第155条の24(連結事業年度において他の連結法人から受ける配当等の額))に規定する配当等の額に係る金額を除きます。(令和2年旧法81の13②)
- ③ 外国子会社から受ける剰余金の配当等の益金不算入額(令和2年旧法81の13②)
- ④ 受贈益の益金不算入額(令和2年旧法81の13②)
- ⑤ 法人税額の還付金等(過誤納及び中間納付額に係る還付金を除きます。)の益金不算入額及び益金不算入附帯税(利子税を除きます。)の受取額(令和2年旧法81の13②)
- ⑥ 繰越連結欠損金の損金算入額(令和2年旧法81の13②)
- ⑦ 被合併法人等の最終の事業年度の欠損金の損金算入額(令和2年旧法81の13②)
- ⑧ 会社更生等による債務免除等があった場合の欠損金の損金算入額(令和2年旧法81の13②)
- ⑨ 新鉱床探鉱費又は海外新鉱床探鉱費の特別控除額(令和2年旧措置法68の62⑤)
- ⑩ 対外船舶運航事業者の日本船舶による収入金額に係る連結所得の金額の損金算入額(令和2年旧措置法68の62の2⑥)
- ⑪ 沖縄の認定法人の連結所得の特別控除額(令和2年旧措置法68の63⑦)
- ⑫ 国家戦略特別区域における指定法人の連結所得の特別控除額(令和2年旧措置法68の63の2⑥)
- ⑬ 収用換地等の場合の連結所得の特別控除額(令和2年旧措置法68の73⑨)
- ⑭ 特定事業の用地買収等の場合の連結所得の特別控除額(令和2年旧措置法68の74⑥、68の75⑤、68の76④、68の76の2⑤)
- ⑮ 連結超過利子額の損金算入額(令和2年旧措置法令39の113の3⑫)
- ⑯ 外国関係会社又は外国関係法人から受ける剰余金の配当等の益金不算入額(令和2年旧措置法68の92⑮、⑯、68の93の4⑬、⑭)
- ⑰ 特別新事業開拓事業者に対し特定事業活動として出資をした場合の特別勘定繰入額の損金算入額(令和2年旧措置法68の98⑬)
- ⑱ 農地所有適格法人の肉用牛の売却に係る連結所得の特別控除額(令和2年旧措置法68の101⑥)
- ⑲ 租税条約に基づく合意があった場合の更正の特例により減額される連結所得の金額のうち、相手国の居住者等に支払われない金額(令和2年改正前の租税条約等の実施に伴う所得税法、法人税法及び地方税法の特例等に関する法律7③)

2 記載の手順

この明細書は、まず、「課税連結留保金額の計算」（「9」から「21」まで）、別表三の二付表一（「連結特定同族会社の連結留保金額から控除する連結留保控除額の計算に関する明細書」）、別表三の二付表二（「連結特定同族会社の連結留保金額に対する税額の個別帰属額の計算に関する明細書」）（「11」から「34」まで）及び別表三の二付表三（「連結特定同族会社の留保金個別帰属額から控除する留保控除個別帰属額の計算に関する明細書」）を記載し、次に「連結留保金額に対する税額の計算」（「1」から「8」まで）を記載します。

3 各欄の記載要領

欄	記載要領	注意事項
「課税連結留保金額」の「1」及び「2」	「 $\frac{\quad}{12}$ 」の分子には、当期の月数（暦に従って計算し、1月未満の端数は切り上げます。）を記載します。	
「年3,000万円相当額を超え年1億円相当額以下の金額（ $((21)-(1))$ 又は $(1億円 \times \frac{\quad}{12} - (1))$ のいずれか少ない金額）2」	「21」の金額が年3,000万円相当額を超える場合に、年3,000万円相当額を超え年1億円相当額以下の金額を記載します。この場合、その金額に1,000円未満の端数が生じたときは、その端数を切り捨てた金額を記載しますが、その端数が「21」で切り捨てた1,000円未満の端数より多いときは、その端数を切り上げた金額を記載します。	
「連結留保所得金額（別表四の二「55の②」）9」	次の場合に応じ、それぞれ次により記載します。 (1) 令和2年旧法第81条の3第1項（個別益金額又は個別損金額）（法第62条の5第4項（現物分配による資産の譲渡）の規定により令和2年旧法第81条の3第1項に規定する個別益金額を計算する場合に限ります。）の規定の適用がある場合 別表四の二「10」の金額をこの欄の上段に内書として記載します。 (2) 令和2年旧措置法第68条の98第8項（特別新事業開拓事業者に対し特定事業活動として出資をした場合の課税の特例）の規定の適用がある場合 別表十の二（三）「18」の金額の合計額をこの欄に含めて記載します。	この場合、「19」はその内書きした金額を「9」の金額から減算して計算します。

3 根拠条文

令和2年旧法81の13、令和2年旧令155の23～155の25の2

別表三の二付表一

「連結特定同族会社の連結留保金額から控除する連結留保控除額の計算に関する明細書」

1 この明細書の用途等

この明細書は、別表二の「判定結果18」において「特定同族会社」に該当する連結親法人が令和2年旧法第81条の13(連結特定同族会社の特別税率)の規定の適用を受ける場合に使用します。

2 各欄の記載要領

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
「適格合併等により増加した連結利益積立金額4」	適格合併若しくは適格分割型分割により被合併法人若しくは分割法人から引継ぎを受けた連結利益積立金額、連結完全支配関係がある他の連結法人の株式の譲渡等により増加した連結利益積立金額又は完全支配関係がある法人の寄附修正事由により増加した連結利益積立金額を記載します。	
「適格分割型分割等により減少した連結利益積立金額5」	適格分割型分割により分割承継法人に引き継いだ連結利益積立金額、連結完全支配関係がある他の連結法人の株式の譲渡等により減少した連結利益積立金額又は完全支配関係がある法人の寄附修正事由により減少した連結利益積立金額を記載します。	
「積立金基準額7」	この金額がマイナスとなる場合は、0と記載します。 なお、「期末連結利益積立金額6」の金額がマイナスである場合には、「同上の25%相当額2」の金額にそのマイナスの金額の正数金額を加算した金額を記載します。	例えば、「2」の金額が25,000,000円、「6」の金額が△5,000,000円である場合には、25,000,000円と5,000,000円との合計額30,000,000円を「7」に記載します。
「定額基準額2,000万円× $\frac{1}{12}$ 8」	$\frac{1}{12}$ の分子には、当期の月数(暦に従って計算し、1月未満の端数は切り上げます。)を記載します。	
「他の法人の株式又は出資の基準時の直前における帳簿価額から減算される金額18」	別表三の二付表三「21」に内書きした金額がある場合には、その金額を「別表三の二付表三「21」」の金額から控除した金額の合計額を記載します。	

3 根拠条文

令和2年旧法81の13、令和2年旧令155の23～155の25の2

別表三の二付表二

「連結特定同族会社の連結留保金額に対する税額の個別帰属額の計算に関する明細書」

1 この明細書の用途

この明細書は、別表二の「判定結果18」において「特定同族会社」に該当する連結親法人が令和2年旧法第81条の13(連結特定同族会社の特別税率)の規定の適用を受ける場合に各連結法人ごとに記載し、連結留保金額に対する税額のうち各連結法人の個別帰属額を計算するために使用します。

2 各欄の記載要領

欄	記載要領	注意事項
「法人名」	連結親法人の法人名を記載し、括弧の中には連結留保金額に対する税額の個別帰属額の計算を行う連結法人の法人名を記載します。	
「連結個別留保税額の計算」の「5」及び「6」	「 $\frac{\quad}{12}$ 」の分子には、連結親法人事業年度の月数(暦に従って計算し、1月未満の端数は切り上げます。)を記載します。	
「個別留保所得金額11」	別表十の二(三)「18」に金額の記載がある場合には、その金額を含めて記載します。	
「当期末配当等の額(連結法人間配当等の額を除く。)13」	剰余金の配当又は利益の配当(その支払に係る基準日が当期に属するものでその支払に係る決議の日が当期末の翌日から当期に係る決算の確定の日までの期間にあるものに限り、その基準日にその連結法人との間に連結完全支配関係がある他の内国法人に支払うものを除きます。)により減少する連結個別利益積立金額を記載します。	
「連結留保税額及び分配時調整外国税相当額の個別帰属額並びに(17)がないものとした場合の法人税及び地方法人税の減少額として帰せられる金額14」	次の(1)及び(2)の金額の合計額を記載します。 (1) 「各連結事業年度の連結法人税の個別帰属額の届出書」の「差引連結法人税個別帰属額4」+「連結納税の承認を取り消された場合等における既に控除された連結法人税額の特別控除額の加算額の個別帰属額5」+「同上に対する税額7」+「連結法人税個別帰属額計10」の外書-「連結欠損金の繰戻しによる還付金の個別帰属額13」-「所得税の額の個別帰属額33」-「外国税額の個別帰属額34」により計算した金額がマイナスになる場合のその金額 (2) 「各連結事業年度の連結法人税の個別帰属額の届出書付表」の「算出連結法人税個別帰属額に係る連結地方法人税個別帰属額1」+「連結納税の承認を取り消された場合等における既に控除された連結法人税額の特別控除額の加算額の個別帰属額に係る連結地方法人税個別帰属額6」+「土地譲渡税額の個別帰属額」	

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
	<p>属額に係る連結地方法人税個別帰属額7」＋「加算調整額8」の外書－「外国税額の控除額の個別帰属額9」－「連結欠損金の繰戻しによる還付金の個別帰属額に係る連結地方法人税個別帰属額12」－「連結法人税額の特別控除額の個別帰属額に係る連結地方法人税個別帰属額13」により計算した金額がマイナスになる場合のその金額</p>	
<p>「連結留保税額及び分配時調整外国税相当額の個別帰属額並びに(17)がないものとした場合の法人税及び地方法人税の負担額として帰せられる金額から分配時調整外国税相当額の個別帰属額を控除した金額15」</p>	<p>次の(1)及び(2)の金額の合計額から次の(3)の金額を控除した金額を記載します。</p> <p>(1) 「各連結事業年度の連結法人税の個別帰属額の届出書」の「差引連結法人税個別帰属額4」＋「連結納税の承認を取り消された場合等における既に控除された連結法人税額の特別控除額の加算額の個別帰属額5」＋「同上に対する税額7」＋「連結法人税個別帰属額計10」の外書－「連結欠損金の繰戻しによる還付金の個別帰属額13」－「所得税の額の個別帰属額33」－「外国税額の個別帰属額34」により計算した金額がプラスになる場合のその金額</p> <p>(2) 「各連結事業年度の連結法人税の個別帰属額の届出書付表」の「算出連結法人税個別帰属額に係る連結地方法人税個別帰属額1」＋「連結納税の承認を取り消された場合等における既に控除された連結法人税額の特別控除額の加算額の個別帰属額に係る連結地方法人税個別帰属額6」＋「土地譲渡税額の個別帰属額に係る連結地方法人税個別帰属額7」＋「加算調整額8」の外書－「外国税額の控除額の個別帰属額9」－「連結欠損金の繰戻しによる還付金の個別帰属額に係る連結地方法人税個別帰属額12」－「連結法人税額の特別控除額の個別帰属額に係る連結地方法人税個別帰属額13」により計算した金額がプラスになる場合のその金額</p> <p>(3) 別表六の二（二の二）の「計5の③」×「個別分配時調整外国税相当額25」／「各連結法人の個別分配時調整外国税相当額の合計額26」により計算した金額</p>	
<p>「連結法人間配当等の当期支払額19」</p>	<p>配当等の支払に係る基準日（その定めがない場合には、その支払に係る効力が生ずる日。以下同じです。）にその連結法人との間に連結完全支配関係がある他の内国法人に当期に支払う令和2年旧令第155条の23第1項（連結留保金額から控除する金額等）に規定する配当等の額（適格現物分配に係るものを含みます。）を記載します。</p>	

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
「連結法人間配当等の当期受取額 ²⁰ 」	配当等の支払に係る基準日にその連結法人との間に連結完全支配関係がある他の内国法人から当期に受け取る令和2年旧令第155条の23第1項に規定する配当等の額を記載します。	
「個別所得金額に係る連結法人税個別帰属額 ²⁶ 」	「各連結事業年度の連結法人税の個別帰属額の届出書」の「個別所得金額又は個別欠損金額1」の金額がプラスである場合の「算出連結法人税個別帰属額2」の金額を記載します。	「個別所得金額又は個別欠損金額1」の金額がない場合又はマイナスである場合は、この欄への記載は要しません。
「連結親法人が中小連結親法人以外の場合 ²⁷ 」、「連結親法人が中小連結親法人の場合 ²⁸ 」	令和2年旧令第155条の25第1号(連結留保金額の計算上控除する道府県民税及び市町村民税の額)に規定する個別所得金額がない場合には、記載は要しません。	
「住民税額((25)又は(27)又は(28))のいずれか多い金額)×10.4% ²⁹ 」	<p>次の場合に応じ、それぞれ次により記載します。</p> <p>(1) 令和2年旧令第155条の25第1号に規定する個別所得金額がない場合 (25)又は(27)又は(28))のいずれか多い金額 ×10.4%</p> <p>(2) (1)以外の場合 次に掲げる区分に応じ、それぞれ次により計算した金額を記載します。</p> <p>① 連結親法人が令和2年旧措置法第68条の9第4項(試験研究を行った場合の法人税額の特別控除)に規定する中小連結親法人に該当する場合 (25)又は(27)又は(28))のいずれか多い金額)×10.4%</p> <p>② 連結親法人が中小連結親法人に該当しない場合 (25)又は(27)又は(28))のいずれか多い金額)×10.4%</p>	
「調整個別帰属地方税額に係る控除額 $\left[\begin{array}{l} (25) \text{ 又は } (31) \text{ の ใ} \\ \text{れ か 多 い 金 額} \end{array} \right] \times 10.4\% \times 20\%$ ³² 」	<p>次の場合に応じ、それぞれ次により記載します。</p> <p>(1) 令和2年旧令第155条の25第1号に規定する個別所得金額がない場合 $\left[\begin{array}{l} (25) \text{ 又は } (31) \text{ の ใ} \\ \text{れ か 多 い 金 額} \end{array} \right] \times 10.4\% \times 20\%$</p> <p>(2) (1)以外の場合 $\left[\begin{array}{l} (25) \text{ 又は } (31) \text{ の ใ} \\ \text{れ か 多 い 金 額} \end{array} \right] \times 10.4\% \times 20\%$</p>	

3 根拠条文

令和2年旧法81の18①一、令和2年旧令155の23、155の25、155の43

別表三の二付表三

「連結特定同族会社の留保金個別帰属額から控除する留保控除個別帰属額の計算に関する明細書」

1 この明細書の用途

この明細書は、別表二の「判定結果18」において「特定同族会社」に該当する連結親法人が令和2年旧法第81条の13(連結特定同族会社の特別税率)の規定の適用を受ける場合(同条第4項各号に掲げる金額のうち同項第2号に掲げる金額が最も多い金額である場合を除きます。)に各連結法人ごとに記載し、連結留保金額に対する税額のうち各連結法人の個別帰属額を計算するために使用します。

2 各欄の記載要領

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
「法人名」	連結親法人の法人名を記載し、括弧の中には連結留保金額に対する税額の個別帰属額の計算を行う連結法人の法人名を記載します。	
「適格合併等により増加した連結個別利益積立金額4」	適格合併若しくは適格分割型分割により被合併法人若しくは分割法人から引継ぎを受けた連結個別利益積立金額、連結完全支配関係がある他の連結法人の株式の譲渡等により増加した連結個別利益積立金額又は完全支配関係がある法人の寄附修正事由により増加した連結個別利益積立金額を記載します。	
「適格分割型分割等により減少した連結個別利益積立金額5」	適格分割型分割により分割承継法人に引き継いだ連結個別利益積立金額、連結完全支配関係がある他の連結法人の株式の譲渡等により減少した連結個別利益積立金額又は完全支配関係がある法人の寄附修正事由により減少した連結個別利益積立金額を記載します。	
「個別帰属利益積立金差額7」	この金額がマイナスとなる場合には、0と記載します。 なお、「期末連結個別利益積立金額6」の金額がマイナスである場合には、「同上の25%相当額2」の金額にそのマイナスの金額の正数金額を加算した金額を記載します。	例えば、「2」の金額が25,000,000円、「6」の金額が△5,000,000円である場合には、25,000,000円と5,000,000円との合計額30,000,000円を「7」に記載します。
「他の法人の株式又は出資の基準時の直前における帳簿価額から減算される金額21」	別表八(三)「13」の金額のうちに令和2年旧法第81条の3第1項(個別益金額又は個別損金額)(法第62条の5第4項(現物分配による資産の譲渡)の規定により令和2年旧法第81条の3第1項に規定する個別益金額を計算する場合に限ります。)の規定により益金の額に算入されない金額に対応する部分の金額がある場合には、その対応する部分の金額の合計額を上段に内書として記載します。	

3 根拠条文

令和2年旧法81の18①一、令和2年旧令155の25、155の43

別表四の二

「連結所得の金額の計算に関する明細書」

1 この明細書の用途

この明細書は、各連結法人の損益計算書の当期利益の額又は当期欠損の額を基として、いわゆる申告調整により税務計算上の連結所得金額若しくは連結欠損金額又は連結留保金額を計算するために使用します。

2 各欄の記載要領

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
「当期利益又は当期欠損の額の合計額1」	各連結法人の別表四の二付表の「1」の「総額①」から「社外流出③」までの各欄の金額をこの明細書の「1」の「総額①」から「社外流出③」までの各欄にそれぞれ合計して記載します。	
「加算」の「減価償却の償却超過額2」から「減算」の「所得税額等及び連結欠損金の繰戻しによる還付金額等25」までの各欄	原則として、「当期利益又は当期欠損の額の合計額1」の「総額①」から「社外流出③」までの各欄の記載に準じます。	「加算」の「4」、「5」及び「減算」の「11」の空欄に記載すべき事項が多い場合には、連結法人ごとに集計した金額を記載することとしても差し支えありません。
「仮計42」	次の場合に応じ、それぞれ次により計算します。 (1) 別表四の二付表の「41」に別表十四の「20」の記載がある場合 $(33) + (34) + (35) + (36) + (37) + (38) + (39) + (40) - (41)$ (2) 別表四の二付表の「41」に別表十四の「21」又は「23」の記載がある場合 $(33) + (34) + (35) + (36) + (37) + (38) + (39) + (40) + (41)$	
「連結所得金額又は連結欠損金額55」		(1) 「55」の「総額①」から「社外流出③」までの各欄の金額は、各連結法人の別表四の二付表の「55」の「総額①」から「社外流出③」までの各欄の金額をそれぞれ合計した金額と符合することになります。 (2) 「総額①」の金額は、「留保②」の金額に「社外流出③」の本書の金額を加算し、これから「※」の金額を加減算した額と符合することになります。

別表四の二付表

「個別所得の金額の計算に関する明細書」

1 この明細書の用途

この明細書は、各連結法人の損益計算書の当期利益の額又は当期欠損の額を基として、いわゆる申告調整により税務計算上の各連結法人の個別所得金額若しくは個別欠損金額又は個別留保金額を計算するために使用します。

なお、各欄の記載に当たり、その各欄の算定を示す他の別表がある場合には、まず、当該他の別表を記載して、その結果を移記してください。

2 各欄の記載要領

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
「法人名」	連結親法人の法人名を記載するとともに、括弧の中に個別所得金額若しくは個別欠損金額又は個別留保所得金額の計算を行う連結法人の法人名を記載します。	
「当期利益又は当期欠損の額1」の「総額①」	各連結法人の損益計算書の当期利益の額又は当期欠損の額を記載します。この場合、当期利益の額又は当期欠損の額のうち前期から繰り越された利益又は欠損の額を含むときは、前期から繰り越された利益又は欠損の額を控除した金額を記載します。	
「当期利益又は当期欠損の額1」の「留保②」及び「社外流出③」の「配当」	(1) 「留保②」には、「総額①」に記載した金額から「社外流出③」に記載した金額の合計額を減算した金額を記載します。 (2) 「配当」には、当期にその支払に係る効力が生ずる令和2年旧令第9条の2第1項第6号(連結利益積立金額)に規定する合計額並びに当期の同項第7号の規定により令和2年旧令第9条第1項第12号及び第14号(利益積立金額)の規定に準じて計算される金額の合計額を記載します。	「社外流出③」に記載した金額が「総額①」に定義した金額を超えるときは、その超える金額を「留保②」に△印を付して記載します。
「役員給与の損金不算入額3」	役員に対して支給する給与のうち、令和2年旧法第81条の3第1項(個別益金額又は個別損金額)(法第34条の規定により令和2年旧法第81条の3第1項に規定する個別損金額を計算する場合に限ります。)の規定により損金の額に算入されない金額を記載します。	
「加算」の「4」及び「5」	(1) 各連結法人が費用又は損失として経理した金額で当期の連結所得の金額の計算上損金の額に算入されないもの及び各連結法人が収益として経理しなかった金額で当期の連結所得の金額の計算上益金の額に算入されるもの等についてその名称及び金額を記載します。この場合において、留保されている金額は「留	(1) 税効果会計を採用している場合において、損益計算書上、税引前当期純利益から減算した「法人税等調整額」があるときは、「加算」の空欄に「法人税等調整額損金

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
	<p>保②」に、社外に流出している金額は「社外流出③」にそれぞれ記載します。</p> <p>(2) 次に掲げる場合には、それぞれ次により記載します。</p> <p>① 令和2年旧措置法第68条の57第1項(関西国際空港用地整備準備金)の規定の適用を受ける場合には、損金経理(令和2年旧法第81条の20第1項第1号(仮決算をした場合の連結中間申告書の記載事項等))に掲げる金額を計算する場合にあっては、同項に規定する期間に係る各連結法人の決算において費用又は損失として経理することをいいます。以下同じです。)の方法により関西国際空港用地整備準備金として積み立てた金額を「総額①」及び「留保②」に記載します。</p> <p>② 令和2年旧措置法第68条の57の2第1項(中部国際空港整備準備金)の規定の適用を受ける場合には、損金経理の方法により中部国際空港整備準備金として積み立てた金額を「総額①」及び「留保②」に記載します。</p> <p>③ 令和2年旧措置法第68条の64第1項(農業経営基盤強化準備金)の規定の適用を受ける場合には、損金経理の方法により農業経営基盤強化準備金として積み立てた金額を「総額①」及び「留保②」に記載します。</p> <p>④ 令和2年旧措置法第68条の65第1項(農用地等を取得した場合の課税の特例)の規定の適用を受ける場合には、同項に規定する農用地等の帳簿価額を損金経理の方法により減額した金額を「総額①」及び「留保②」に記載します。</p> <p>⑤ 令和2年旧措置法第68条の98第1項(特別新事業開拓事業者に対し特定事業活動として出資をした場合の課税の特例)の規定の適用を受ける場合には、損金経理の方法により同項の特別勘定として経理した金額を「総額①」及び「留保②」に記載します。</p> <p>⑥ 令和2年旧震災特例法第26条の3第1項(連結法人の再投資等準備金)の規定の適用を受ける場合には、損金経理の方法により再投資等準備金として積み立てた金額を「総額①」及び「留保②」に記載します。</p> <p>(注) 「令和4年版法人税申告書・地方法人税申告書の記載の手引」の23ページに、「農業経営基盤強化準備金の適用を受ける場合の申告書の記載例」として、単体法人の場合の記載例を掲載していますので、参考としてください。</p> <p>(3) 令和2年旧措置法第68条の90(連結法人に係</p>	<p>不算入」等と記載の上、当該金額を「総額①」及び「留保②」に記載します。</p> <p>(2) 「社外流出③」に※印の金額の記載がある場合の「小計6」の「社外流出③」の記載については、この「社外流出③」の上段に※印を付して外書きします。</p>

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
	<p>る特定外国関係会社等の個別課税対象金額等の益金算入)又は第68条の93の2(特殊関係株主等である連結法人に係る特定外国関係法人等の個別課税対象金額等の益金算入)の規定による益金算入額(別表十七(三)の二「28」、別表十七(三)の三「9」又は別表十七(三)の四「11」)は、令和2年旧措置法令第39条の120第4項(外国関係会社の判定等)等の規定により連結利益積立金額に含まれないものとされますので、「加算」の空欄に「特定外国関係会社等に係る課税対象金額」等と記載の上、その額を「総額①」及び「社外流出③」(※印を付けます。)に記載します。</p>	
<p>「受贈益の益金不算入額9」</p>	<p>法人による完全支配関係がある他の内国法人から受けた受贈益の額で、令和2年旧法第81条の3第1項(令和2年旧法第25条の2第1項(受贈益)に係る部分に限ります。)の規定により益金の額に算入されない金額を記載します。</p>	
<p>「適格現物分配に係る益金不算入額10」</p>	<p>適格現物分配により資産の移転を受けたことによつて生ずる収益の額で、令和2年旧法第81条の3第1項(法第62条の5第4項に係る部分に限ります。)の規定により益金の額に算入されない金額を記載します。</p>	
<p>「減算」の「11」</p>	<p>(1) 各連結法人が費用又は損失として経理しなかった金額で当期の連結所得の金額の計算上損金の額に算入されるもの及び収益として経理した金額で当期の連結所得の金額の計算上益金の額に算入されないもの等についてその名称及び金額を記載します(2)から(4)までに該当する場合を除きます。)。この場合、法人計算外で経費とするもの(経費の認定損)のように税務計算上留保した金額を減少させるものは、「留保②」に記載します。</p> <p>(2) 令和2年旧措置法第68条の73(収用換地等の場合の連結所得の特別控除)、令和2年旧措置法第68条の74から第68条の76まで(特定事業の用地買収等の場合の連結所得の特別控除)、令和2年旧措置法第68条の76の2(特定の長期所有土地等の連結所得の特別控除)又は令和2年旧措置法第68条の101(農地所有適格法人の肉用牛の売却に係る連結所得の課税の特例)の規定による損金算入額(別表十の二(二)「22」、「35」、「38」、「41」若しくは「44」又は別表十七「22」)は、令和2年旧措置法令第39条の101第6項(収用換地等の場合の連結所得の特別控除)等の規定により連結利益積立金額に含まれるものとされますので、「減算」</p>	<p>税効果会計を採用している場合において、損益計算書上、税引前当期純利益に加算した「法人税等調整額」があるときは、「減算」の空欄に「法人税等調整額益金不算入」等と記載の上、その金額を「総額①」及び「留保②」に記載します。</p>

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
	<p>の空欄に「収用等による特別控除額の個別帰属損金額」等と記載の上、その額を「総額①」及び「社外流出③」（※印を付けます。）に記載します。</p> <p>(3) 令和2年旧措置法第68条の98第6項から第9項までの規定の適用を受ける場合には、これらの規定に規定する特別勘定の金額を取り崩した金額で各連結法人が収益として経理したものを「総額①」及び「留保②」に記載します。</p> <p>(4) 当期の決算の確定の日までに剰余金の処分により積み立てた準備金等の金額で損金の額に算入されるものは、「減算」の空欄に「剰余金処分による準備金積立額認容」等と記載の上、その積立額の全額（税効果会計を採用している場合には、その積立額の全額とこれに対応する税効果相当額との合計額）を「総額①」及び「留保②」に記載します。この場合、積立限度超過額があるときは、「加算」の空欄に「〇〇準備金積立超過額」等と記載の上、その積立限度超過額を「総額①」及び「留保②」に記載します。</p> <p>なお、準備金等に積立限度超過額がある場合には、このような加算及び減算をしないで、その積立額のうち積立限度相当額を「減算」欄に記載しても差し支えありません。</p>	<p>農業経営基盤強化準備金（令和2年旧措置法68の64①）、農用地等を取得した場合の課税の特例の適用による積立金（令和2年旧措置法68の65①）、関西国際空港用地整備準備金（令和2年旧措置法68の57①）、中部国際空港整備準備金（令和2年旧措置法68の57の2①）及び再投資等準備金（令和2年旧震災特例法26の3①）として積み立てたものについては、「50」から「52」までの各欄に記載することとなりますので、左記(4)による記載はしないでください。</p>
<p>「損金経理をした法人税及び地方法人税（附帯税を除く。）14」</p>	<p>次の場合には、それぞれ次の金額を記載します。</p> <p>(1) 当期の連結法人税及び連結地方法人税について費用又は損失として経理した場合 ……その経理した金額</p> <p>(2) 連結法人税及び連結地方法人税又は法人税及び地方法人税について当期に納付した場合 ……別表五の二(ロ)付表の「計5」の「仮払経理による納付④」及び「損金経理による納付⑤」の金額の合計額（(1)の金額を除きます。）</p> <p>なお、(1)及び(2)のいずれの金額をも有する場合には、それらの金額の合計額を記載します。</p>	<p>(1) 記載した金額のうち別表五の二(ロ)付表の「仮払経理による納付④」の本書の金額がある場合、この明細書の「減算」の空欄に「仮払税金」等と記載の上、その合計額を「総額①」及び「留保②」に併せて記載します。</p> <p>(ロ) この仮払税金をその後の連結事業年度で消却した場合、その消却をした連結事業年度において、次の区分に応じ処理します。</p>
<p>「損金経理をした連結法人税個別帰属額及び連結地方法人税個別帰属額15」</p>	<p>各連結法人が費用又は損失として経理した連結法人税個別帰属額及び連結地方法人税個別帰属額について、その金額を記載します。</p>	<p>イ 損金経理により消却した場合 その税</p>
<p>「損金経理をした附帯税（利子税を除く。）の負担額16」</p>	<p>各連結法人が費用又は損失として経理した連結法人税及び連結地方法人税に係る附帯税（利子税を除きます。）の負担額を記載します。</p>	<p>イ 損金経理により消却した場合 その税</p>

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
「損金経理をした道府県民税及び市町村民税17」	別表五の二(二)付表の「計10」及び「計15」の「仮払経理による納付④」及び「損金経理による納付⑤」の金額の合計額を記載します。	金が損金不算入のものであると否とを問わず、この明細書の「加算」の空欄に「仮払税金消却」等と記載の上、その合計額を「総額①」と「留保②」に記載します。
「損金経理をした納税充当金18」	別表五の二(二)付表の「損金経理をした納税充当金31」の金額を記載します。	ロ 納税充当金で消却した場合 この明細書には記載しないで、別表五の二(一)付表一に前期から繰り越された「仮払税金」の「減②」にその消却した金額を△印を付して記載し、「納税充当金20」の「減②」に同額を記載します。
「損金経理をした附帯税(利子税を除く。)、加算金、延滞金(延納分を除く。)及び過怠税19」	別表五の二(二)付表の「加算税及び加算金24」から「過怠税27」までの「当期中の納付税額③～⑤」の各欄の金額の合計額を記載します。	(2) 別表五の二(二)付表の「損金経理による納付⑤」に外書の金額がある場合、この明細書の「加算」の空欄に「未収過誤納金」等と記載し、その金額を「総額①」及び「留保②」に記載します。
「収益として経理した連結法人税個別帰属額及び連結地方法人税個別帰属額21」	各連結法人が収益として経理した連結法人税個別帰属額及び連結地方法人税個別帰属額について、その金額を記載します。	
「収益として経理した附帯税(利子税を除く。)の受取額22」	各連結法人が収益として経理した連結法人税及び連結地方法人税に係る附帯税(利子税を除きます。)の減少額として受け取る金額を記載します。	
「納税充当金から支出した事業税等の金額23」	別表五の二(二)付表の「事業税及び特別法人事業税35」から「38」までの金額の合計額を記載します。	別表五の二(二)付表の「損金不算入のもの37」に金額の記載がある場合には、その税目等をこの明細書の「加算」に記載し、その金額を「総額①」及び「社外流出③」に記載します。
「法人税等の中間納付額及び過誤納に係る還付金額24」	連結法人税、連結地方法人税、法人税、地方法人税、道府県民税及び市町村民税の中間納付額並びにこれらの税の過誤納に係る還付金額について、連結法人がこれらを当期利益の額に含めている場合にその金額を記載します。	利子税相当額の還付金については、その納付した時に損金の額に算入されていますので、この欄で減算することはできません。
「所得税額等及び連結欠損」	次に掲げる還付金額で当期にその還付を受け	前期分の申告において

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
<p>金の繰戻しによる還付金額等25」</p>	<p>ることが確定したものについて、その額を当期利益の額に含めているかどうかにかかわらず記載します。この場合に、これらの確定した還付金額を当期利益の額に含めていないときは、「加算」の空欄に「未収の所得税額の還付金」等として「総額①」及び「留保②」に記載し、その後の連結事業年度でこれらの還付金を当期利益の額に含めた場合には、その金額を「減算」の空欄に「未収の所得税額の還付金」等と記載の上、還付金の額を「総額①」及び「留保②」に記載します。</p> <p>(1) 所得税額及び復興特別所得税額の還付金額並びに控除対象外国法人税額の還付金額</p> <p>(2) 連結欠損金の繰戻しによる還付金額</p> <p>(3) 国税通則法の規定による附帯税（利子税を除きます。）の還付金額</p> <p>(4) 地方税法の規定による各種加算金及び延滞金（同法第65条、第72条の45の2又は第327条の規定による納期限の延長を受けた期間に係るものを除きます。）の還付金額</p> <p>(5) (1)から(4)まで及び「法人税等の中間納付額及び過誤納に係る還付金額24」に記載されるもの以外の租税で損金の額に算入されないものの還付金額</p>	<p>所得税額の還付が生じ、その還付を受けていた場合において、その後前期分の連結法人税につき更正処分があり、その還付を受けた所得税額の全部又は一部に相当する金額の追徴があったときは、その追徴された金額に相当する還付所得税額はこの欄には記載しないでください。</p> <p>この場合、その還付を受けた所得税額が当期利益の額に含まれているときは、その追徴された所得税額に相当する金額は、「減算」の空欄に「追徴された所得税額」等として「総額①」及び「留保②」にそれぞれ記載します。</p>
<p>「被合併法人等の最終の事業年度の欠損金の損金算入額34」</p>	<p>令和2年旧法第81条の9第4項（連結欠損金の繰越し）の規定により当期の連結所得の金額の計算上、損金の額に算入される金額を記載します。</p>	
<p>「仮計42」</p>	<p>次の場合に応じ、それぞれ次により計算します。</p> <p>(1) 別表十四の「20」の記載がある場合 $(33) + (34) + (35) + (36) + (37) + (38) + (39) + (40) - (41)$</p> <p>(2) 別表十四の「21」又は「23」の記載がある場合 $(33) + (34) + (35) + (36) + (37) + (38) + (39) + (40) + (41)$</p>	
<p>「非適格合併又は残余財産の全部分配等による移転資産等の譲渡利益額又は譲渡損失額45」</p>	<p>(1) 連結親法人事業年度開始の日の合併（適格合併を除きます。）により合併法人に資産及び負債の移転をした場合に、資産及び負債のその移転による譲渡に係る譲渡利益額又は譲渡損失額を被合併法人の合併の日の前日の属する連結事業年度分のこの明細書に記載します。</p> <p>ただし、各連結法人が合併（適格合併を除きます。）により完全支配関係がある合併法人に譲渡損益調整資産（令和2年旧法第61条の13第1項（完全支配関係がある法人の間の取引の損益）に規定する譲渡損益調整資産をいいます。）の移転をした場合に、譲渡損益調整資産のその</p>	<p>譲渡損失額を記載する場合は、その金額を△印を付して記載します。</p>

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
	<p>移転による譲渡に係る譲渡利益額又は譲渡損失額について損金の額又は益金の額に算入される金額があるときは、その損金の額又は益金の額に算入される金額を譲渡利益額又は譲渡損失額から減算又は加算した金額を、被合併法人の合併の日の前日の属する連結事業年度分のこの明細書に記載します。</p> <p>(2) 残余財産の全部の分配又は引渡し（適格現物分配を除きます。）により被現物分配法人等に資産の移転をした場合に、資産のその移転による譲渡に係る譲渡利益額又は譲渡損失額を現物分配法人の残余財産の確定の日の属する連結事業年度分のこの明細書に記載します。</p>	
<p>「残余財産の確定の日の属する連結事業年度に係る事業税及び特別法人事業税の損金算入額54」</p>	<p>当期が残余財産の確定の日の属する連結事業年度である場合に、令和2年旧法第81条の3第1項（法第62条の5第5項に係る部分に限ります。）の規定により損金の額に算入される事業税及び特別法人事業税の額を記載します。</p>	<p>平成22年9月30日以前に解散が行われた場合には記載する必要はありません。</p>
<p>「個別所得金額又は個別欠損金額55」</p>		<p>「総額①」の金額は、「留保②」の金額に「社外流出③」の本書の金額を加算し、これから「※」の金額を加減算した額と符合することになります。</p>

別表五の二(一)

「連結利益積立金額の計算に関する明細書」

1 この明細書の用途

この明細書は、令和2年旧法第2条第18号の2(定義)及び令和2年旧令第9条の2(連結利益積立金額)に規定する連結利益積立金額を計算するために使用します。

2 各欄の記載要領

欄	記載要領	注意事項
「各連結法人の連結個別利益積立金額」の各欄	連結法人ごとにその法人名及び別表五の二(一)付表一「19」の金額をそれぞれ記載します。	
「未納連結法人税及び未納連結地方法人税(附帯税を除く。)16」	各連結法人の別表五の二(一)付表一の「未払連結法人税個別帰属額及び未払連結地方法人税個別帰属額21」を合計した金額を記載します。	この欄の③には、連結親法人に係る別表五の二(一)付表の「中間3」の②及び「確定4」の②の金額を移記しないでください。

3 根拠条文

令和2年旧法二十八の二、令和2年旧令9の2

別表五の二(一)付表一

「連結個別利益積立金額及び連結個別資本金等の額の計算に関する明細書」

1 連結個別利益積立金額の計算に関する明細書

(1) この明細書の用途

この明細書は、令和2年旧法第2条第18号の3(定義)及び令和2年旧令第9条の3(連結個別利益積立金額)に規定する連結個別利益積立金額を計算するために使用します。

(2) 各欄の記載要領

欄	記載要領	注意事項
「法人名」	連結親法人の法人名を記載するとともに、括弧の中に連結個別利益積立金額の計算を行う連結法人の法人名を記載します。	
「区分」の「積立金2」以下の空欄	<p>(1) 「利益準備金1」以外の連結個別利益積立金額(税務上の否認金額のうち留保した金額を含みます。)について、その名称を記載します。</p> <p>(2) 連結親法人が、自己の連結個別利益積立金額の計算を行う場合には、次によります。</p> <p>① 各連結法人の当期に係る連結法人税個別帰属支払額(令和2年旧法第81条の18第1項(連結法人税の個別帰属額の計算)の規定により計算される各連結法人が各連結事業年度の連結所得に対する法人税の負担額として帰せられる金額を支払うこととなる場合のその支払うこととなる金額をいいます。以下同じです。)及び連結地方法人税個別帰属支払額(令和2年旧地方法第15条第1項(連結法人の地方法人税の個別帰属額の計算)の規定により計算される各連結法人が各連結事業年度の地方法人税の負担額として帰せられる金額を支払うこととなる場合のその支払うこととなる金額をいいます。以下同じです。)を受け取ることとなる場合において、空欄に「未収連結法人税個別帰属支払額及び未収連結地方法人税個別帰属支払額」と記載し、その受け取ることとなる金額(各連結法人の「未払連結法人税個別帰属額及び未払連結地方法人税個別帰属額21」の「当期の増減」の「増③」の「中間」及び「確定」の金額のうち連結法人税個別帰属支払額及び連結地方法人税個別帰属支払額を合計した金額)を「当期の増減」の「増③」に△印を付さずに記載します。</p> <p>② 各連結法人の当期に係る連結法人税個別帰属受取額(令和2年旧法第81条の18第1項の規定により計算される各連結法人が各</p>	左記(2)①及び②の「各連結法人」には、連結親法人が含まれます。

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
	<p>連結事業年度の連結所得に対する法人税の減少額として帰せられる金額を受け取ることとなる場合のその受け取ることとなる金額をいいます。以下同じです。)及び連結地方法人税個別帰属受取額(令和2年旧地方法第15条第1項の規定により計算される各連結法人が各連結事業年度の地方法人税の減少額として帰せられる金額を受け取ることとなる場合のその受け取ることとなる金額をいいます。以下同じです。)を支払うこととなる場合において、空欄に「未払連結法人税個別帰属受取額及び未払連結地方法人税個別帰属受取額」と記載し、その支払うこととなる金額(各連結法人の「21」の「当期の増減」の「増③」の「中間」及び「確定」の金額のうち連結法人税個別帰属受取額及び連結地方法人税個別帰属受取額を合計した金額)を「当期の増減」の「増③」に△印を付して記載します。</p> <p>③ 連結親法人の別表五の二(二)付表の「確定4」の「期末現在未納税額⑥」の本書の金額につき、空欄に「未納連結法人税及び未納連結地方法人税」と記載し、その金額を「当期の増減」の「増③」に△印を付して記載します(本書に△印の付された金額がある場合(すなわち、連結法人税及び連結地方法人税の中間分に未納税額がある場合)には、△印を付さずに記載します。)</p> <p>なお、同付表の「確定4」の「期末現在未納税額⑥」に外書(△印)の金額がある場合(すなわち、中間納付額の還付金がある場合)には、空欄に「未収還付連結法人税」等と記載の上、「当期の増減」の「増③」にその金額(△印は付けません。)を記載します。</p>	
<p>「期首現在連結個別利益積立金額①」</p>	<p>原則として、前期分のこの明細書の「差引翌期首現在連結個別利益積立金額④」の各欄の金額(更正又は決定があった場合には、その更正又は決定に基づいて調整した後の金額)を移記します。</p> <p>なお、前期が単体法人である連結法人にあつては、前期の別表五(一)の「差引翌期首現在利益積立金額④」の各欄の金額(更正又は決定があった場合には、その更正又は決定に基づいて調整した後の金額)をこの明細書の該当する欄に記載します。</p>	<p>この申告が連結中間申告であるときは、この欄だけを記載し、「当期の増減」及び「差引翌期首現在連結個別利益積立金額④」の記載は必要ありません。</p>

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
<p>「当期の増減」</p>	<p>原則として、「減②」には別表四の二付表の「減算」の「留保②」の金額を、「増③」には同付表の「加算」の「留保②」の金額を、その内容に応じて記載します。この場合に同付表の「減算」に記載した「仮払税金（仮払連結法人税、仮払連結地方法人税、仮払法人税、仮払地方法人税、仮払道府県民税又は仮払市町村民税）」については「増③」に△印を付けて記載します。</p> <p>なお、次のような場合には、同付表と関係なく次によります。</p> <p>(1) 納税充当金を取り崩して、連結法人税（利子税及び延滞税を除きます。）、連結地方法人税（利子税及び延滞税を除きます。）、法人税（利子税及び延滞税を除きます。）、地方法人税（利子税及び延滞税を除きます。）、道府県民税又は市町村民税の額を納付した場合には、「納税充当金20」の「減②」にその合計額を記載するとともに、連結法人税及び連結地方法人税にあつては「3」から「17」までの空欄のいずれかに「未納連結法人税及び未納連結地方法人税」と記載した欄の「減②」にその金額を△印を付して、その他のものにあつては「未納法人税及び未納地方法人税22」、「未納道府県民税23」又は「未納市町村民税24」の「減②」にこれらの税額をそれぞれ記載します。</p> <p>(2) 当期の中間納付額として納付すべき連結法人税、連結地方法人税、道府県民税又は市町村民税の額がある場合には、納付の有無に関係なく、別表五の二(二)付表の「中間3」の「当期発生税額②」の金額を△印を付して「3」から「17」までのいずれかの空欄に「未納連結法人税及び未納連結地方法人税」と記載した欄の「増③」に、同付表の「中間8」及び「中間13」の「当期発生税額②」の金額を「未納道府県民税23」及び「未納市町村民税24」の「増③」の「中間」にそれぞれ記載します。</p> <p>(3) 中間配当積立金等を取り崩して剰余金の配当（資本剰余金の額の減少に伴うものを除きます。以下同じです。）若しくは利益の配当又はいわゆる中間配当（資本剰余金の額の減少に伴うものを除きます。以下同じです。）をした場合には、その積立金の取崩額を「減②」に記載します。</p> <p>なお、この金額は「繰越損益金18」の「増③」の金額に含まれることとなります。また、この場合に会社法第445条第4項の規定により積み立てた剰余金の配当に係る利益準備金の額は、「利益準備金1」の「増③」に記載しま</p>	<p>(1) 別表四の二付表の「加算」の「損金経理をした法人税及び地方法人税（附帯税を除く。）14」の「留保②」の金額のうち連結法人税及び連結地方法人税（未納のものを除きます。）にあつては△印を付して「未納連結法人税及び未納連結地方法人税」と記載した欄の「減②」に、法人税及び地方法人税にあつては「未納法人税及び未納地方法人税22」の「減②」に記載します。</p> <p>また、同付表の「損金経理をした連結法人税個別帰属額及び連結地方法人税個別帰属額15」の「留保②」の金額（未払のものを除きます。）については「未払連結法人税個別帰属額及び未払連結地方法人税個別帰属額21」の「減②」に△印を付して、同付表の「損金経理をした道府県民税及び市町村民税17」の「留保②」の金額については「未納道府県民税23」及び「未納市町村民税24」の「減②」にそれぞれ記載します。</p> <p>なお、連結法人税及び連結地方法人税並びに連結法人税個別帰属額及び連結地方法人税個別帰属額の当期発生額を損金の額又は益金の額に算入し、「未払金」又は「未収入金」等により経理した場合には、この明細書の「3」から「17」までの空欄のいずれかに「未払金」又は「未収入金」等と記載の上、その欄の「増③」にその経理した金額を記載し</p>

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
	<p>す。</p> <p>(4) 平成22年10月1日以後に適格合併に該当しない合併により完全支配関係がある他の内国法人から移転を受けた譲渡損益調整資産がある場合には、令和2年旧令第9条の2第1項第1号ヲ(連結利益積立金額)に規定する金額を「減②」又は「増③」に記載します。</p> <p>(5) 適格合併、適格分割型分割又は適格現物分配により被合併法人、分割法人又は現物分配法人から移転等を受けた資産等がある場合には、令和2年旧令第9条第1項第2号から第4号まで(利益積立金額)の規定に準じて計算した金額を「増③」に記載します。</p> <p>(6) 法人が有する完全支配関係がある法人の株式等について寄附修正事由が生ずる場合には、「区分」に「〇〇株式(寄附修正)」などと表示した上で、令和2年旧令第9条第1項第7号の規定に準じて計算した金額を「減②」又は「増③」に記載します。</p> <p>(7) 適格分割型分割により分割承継法人に移転をした資産等がある場合には、令和2年旧令第9条第1項第10号の規定に準じて計算した金額を「減②」に記載します。</p> <p>(8) 非適格株式分配により現物分配法人の株主等に交付した資産等がある場合には、令和2年旧令第9条第1項第11号の規定に準じて計算した金額を「減②」に記載します。</p> <p>(9) 資本の払戻し等及び出資等減少分配並びに自己株式の取得等により減算される連結個別利益積立金額がある場合には、令和2年旧令第9条第1項第12号から第14号までに規定する金額の合計額を「減②」に記載します。</p> <p>(10) 減価償却資産につき減価償却超過額(法第31条第4項(減価償却資産の償却費の計算及びその償却の方法)に規定する損金の額に算入されなかった金額をいいます。)がある場合において、その減価償却資産につき令和2年旧令第48条第5項第3号ハ(減価償却資産の償却の方法)に規定する評価損が生じたときには、その評価損はまずその減価償却超過額からなるものとして、その評価損の金額と減価償却超過額の金額(その減価償却資産に係る前期から繰り越された減価償却超過額と当期の償却超過額との合計額)とのいずれか少ない金額を、「区分」に「減価償却超過額」と記載した欄の「減②」に記載するとともに、その減価償却資産に係る評価損の金額を「減②」に記載した同欄の上段に△印を付して記載します。</p>	<p>ます(未収入金に相当する金額は△印を付します。)</p> <p>(2) 当期中に剰余金の処分により積み立てた準備金等の金額で損金の額に算入するものについては、その積立額を「当期の増減」の「増③」に記載し、別表四の二付表において「減算」の「11」又は「50」から「52」までの各欄に記載した金額を「当期の増減」の「増③」に△印を付して記載します。</p> <p>また、当期末後、当期の決算の確定の日までに剰余金の処分により積み立てた準備金等の金額で損金の額に算入するものについては、別表四の二付表において「減算」の「11」又は「50」から「52」までの各欄に記載した金額を「当期の増減」の「増③」に△印を付して記載します(その積立額は、翌期において「当期の増減」の「増③」に記載します。)</p> <p>(3) 剰余金の配当、利益の配当若しくは中間配当又はこれらに係る利益準備金の積立てのために取り崩した繰越利益金の額は、「繰越損益金18」の「減②」の金額に含まれることになりません。</p>

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
<p>「繰越損益金（損は赤）18」</p>	<p>「期首現在連結個別利益積立金額①」には、利益剰余金の当期首残高(マイナスの場合は△印を付してください。)を記載し、同一金額を「減②」に記載することによって「期首現在連結個別利益積立金額①」を0とし、改めて利益剰余金の当期末残高を「当期の増減」の「増③」に記載します。「増③」は、当期以前の各事業年度又は各連結事業年度(法第64条の4第1項((公益法人等が普通法人等に移行する場合の所得の金額の計算))又は平成31年改正前の法(以下「平成31年旧法」といいます。)第64条の4第1項((公益法人等が普通法人に移行する場合の所得の金額の計算))の規定の適用を受けた事業年度前の各事業年度又は各連結事業年度を除きます。)において次に掲げる事由が生じた場合には、それぞれ次に定める金額を同欄の上段に内書として記載します。この場合、「差引合計額25」は、その内書として記載した金額を「繰越損益金（損は赤）18」から減算して計算します。</p> <p>(1) 公益法人等のその収益事業以外の事業に属していた資産及び負債がその収益事業に属する資産及び負債となったこと その資産の価額としてその収益事業に関する帳簿に記載された金額からその負債の価額としてその収益事業に関する帳簿に記載された金額を減算した金額</p> <p>(2) 公益法人等が普通法人又は協同組合等に該当することとなったこと（法第64条の4第1項又は平成31年旧法第64条の4第1項の規定の適用があったものを除きます。） その該当することとなった時（(2)において「移行時」といいます。）において有する資産（その収益事業以外の事業に属していた資産に限ります。）の価額としてその移行時においてその帳簿に記載されていた金額からその移行時において有する負債（その収益事業以外の事業に属していた負債に限ります。）の価額としてその移行時においてその帳簿に記載されていた金額を減算した金額</p> <p>(3) その法人を合併法人とし、公益法人等を被合併法人とする適格合併（その法人がその適格合併の時において資本又は出資を有する法人であった場合には、その適格合併に係る被合併法人の全てが資本又は出資を有しない法人であったものに限ります。）により資産及び負債（その法人がその適格合併の時において公益法人等であった場合には、その収益事業に属する資産及び負債となったものに限ります。）</p>	

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
	<p>す。)の引継ぎを受けたこと(法第64条の4第2項又は平成31年旧法第64条の4第2項の規定の適用があったものを除きます。)その資産の令第123条の3第3項(適格合併及び適格分割型分割における合併法人等の資産及び負債の引継価額等)に規定する帳簿価額からその負債の同項に規定する帳簿価額及びその適格合併に係る令和2年旧令第9条第1項第2号に掲げる金額の合計額を減算した金額</p> <p>(4) 法第64条の4第1項若しくは第2項若しくは平成31年旧法第64条の4第1項若しくは第2項の規定の適用があったこと(令第131条の5第1項第3号又は第4号(累積所得金額から控除する金額等の計算))に掲げる場合に該当するものに限り、)又はその法人を合併法人とする合併につき令第131条の5第8項の規定の適用があったこと 当期末における同条第7項に規定する調整公益目的財産残額に相当する金額</p> <p>(5) 法第64条の4第1項若しくは平成31年旧法第64条の4第1項の規定の適用があったこと(令第131条の5第1項第5号に掲げる場合に該当するものに限り、)又はその法人を合併法人とする合併につき令第131条の5第13項の規定の適用があったこと 当期末における同条第10項に規定する救急医療等確保事業用資産取得未済残額に相当する金額</p>	
<p>「未払連結法人税個別帰属額及び未払連結地方法人税個別帰属額21」</p>	<p>各連結法人の当期に係る連結法人税個別帰属支払額又は連結法人税個別帰属受取額及び連結地方法人税個別帰属支払額又は連結地方法人税個別帰属受取額を「当期の増減」の「増③」の「確定」に記載します(連結法人税個別帰属支払額及び連結地方法人税個別帰属支払額については△印を付して記載します。)</p>	<p>連結法人税及び連結地方法人税の中間納付に係るものがある場合には、「当期の増減」の「増③」の「中間」に記載します。</p>
<p>「未納法人税及び未納地方法人税(附帯税を除く。)22」</p>	<p>所得に対する法人税(連結納税の承認の取消しに係る特別控除取戻税額、リース特別控除取戻税額、使途秘匿金の支出の額に対する法人税、土地譲渡利益金額に対する法人税及び連結特定同族会社の連結留保金額に対する法人税を含みます。)の本税及び地方法人税の本税の額を記載します。</p>	
<p>「未納道府県民税23」及び「未納市町村民税24」の「当期の増減」の「増③」の「確定」の各欄</p>	<p>別表五の二(二)付表の道府県民税又は市町村民税の額の「期末現在未納税額⑥」の「9」及び「14」の本書の金額をそれぞれ記載します。</p>	<p>別表五の二(二)付表の「期末現在未納税額⑥」の「9」及び「14」に外書(△印)の金額がある場合(すなわち、中間納付額の還付金がある場合)には、「3」から「17」までの空欄に「未</p>

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
		収還付道府県民税」等と記載の上、「当期の増減」の「増③」にその金額（△印は付けません。）を記載します。

(注) この明細書は、連結親法人を除き、通常の場合には次の算式により検算ができます（連結親法人にあっては、この明細書に記載する「未収連結法人税個別帰属支払額及び未収連結地方法人税個別帰属支払額」から「未払連結法人税個別帰属受取額及び未払連結地方法人税個別帰属受取額」を減算した額と「未納連結法人税及び未納連結地方法人税」との間に差額がある場合には、その差額に相当する金額が検算式と不符号となります。）。

なお、当期中の適格合併、適格分割型分割又は適格現物分配により被合併法人、分割法人又は現物分配法人から移転等を受けた資産等、法人が有する完全支配関係がある法人の株式等について寄附修正事由が生ずる場合及び適格分割型分割により分割承継法人に移転をした資産等がある場合には、これらの金額が検算式と不符号となります。

$$\begin{aligned}
 & \boxed{\text{差引合計額「25」①}} + \boxed{\text{別表四の二付表留保総計「55」②}} \\
 & \quad - \boxed{\text{中間分、確定分連結法人税個別帰属額・連結地方法人税個別帰属額・}} \\
 & \quad \quad \text{法人税・地方法人税・県市民税の合計額}} \\
 = & \boxed{\text{差引翌期首現在連結個別利益積立金額「25」④}}
 \end{aligned}$$

(3) 根拠条文

令和2年旧法28の3、令和2年旧令9の3

2 連結個別資本金等の額の計算に関する明細書

(1) この明細書の用途

この明細書は、各連結法人の令和2年旧法第2条第17号の2（定義）及び令和2年旧令第8条の2（連結個別資本金等の額）に規定する連結個別資本金等の額を計算するために使用します。

発行済株式又は出資のうちに2以上の種類の株式又は出資がある場合には、別表五(一)付表の記載が必要となります。

(2) 各欄の記載要領

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
「区分」の「28」及び「29」の空欄	「資本金又は出資金26」及び「資本準備金27」以外の連結個別資本金等の額について、その名称を記載します。	
「期首現在連結個別資本金等の額①」	<p>前期分のこの明細書の「差引翌期首現在連結個別資本金等の額④」の各欄の金額（更正又は決定があった場合には、その更正又は決定に基づいて調整した後の金額）を移記します。</p> <p>なお、前期が単体法人である連結法人にあつては、前期又は分割前事業年度の別表五(一)の「差引翌期首現在資本金等の額④」の各欄の金額（更正又は決定があった場合には、その更正又は決定に基づいて調整した後の金額）をこの明細書の該当する欄に記載します。</p>	この申告が仮決算による中間申告であるときは、この欄だけを記載し、「当期の増減」及び「差引翌期首現在連結個別資本金等の額④」の記載は必要ありません。
「当期の増減」	<p>(1) 令和2年旧令第8条第1項第1号から第12号まで（資本金等の額）の規定に準じて計算した金額を「資本準備金27」から「29」までの各欄の「増③」に記載します。</p> <p>(2) 令和2年旧令第8条第1項第13号から第18号まで及び第20号から第22号までの規定に準じて計算した金額を△印を付して「資本準備金27」から「29」までの各欄の「増③」に記載します。</p>	

(3) 根拠条文

令和2年旧法二十七の二、令和2年旧令第8の2

別表五の二(一)付表二

「連結子法人の株主等における帳簿価額修正額のうちその連結子法人に係る部分の金額の計算に関する明細書」

1 この明細書の用途

この明細書は、各連結子法人の当期末における連結個別利益積立金額又は利益積立金額のうち、令和2年旧令第9条第1項第6号(利益積立金額)に定めるいわゆる投資簿価修正の対象とされていないもの(修正未済額)を計算するために使用します。

(注) この明細書は、連結子法人に係るもののみを作成します。したがって、連結親法人に係るこの明細書の作成は要しません。

2 各欄の記載要領

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
「法人名」	連結親法人の法人名を記載するとともに、括弧の中にこの明細書を記載する連結子法人の法人名を記載します。 また、令和2年旧法第4条の5第1項又は第2項(連結納税の承認の取消し等)(同項第4号及び第5号に係る部分に限ります。)の規定により令和2年旧法第4条の2(連結納税義務者)の承認を取り消された場合(令和2年旧法第15条の2第1項(連結事業年度の意義)に規定する連結親法人事業年度開始の日にその承認を取り消された場合を除きます。)のその取り消された日の前日の属する事業年度の確定申告をする場合には、その連結子法人の法人名を記載します。	
「最終利益積立金額2」	令和2年旧令第9条第4項第1号ロに規定する最終利益積立金額を記載します。	
「当期の修正額6」	その連結子法人の株主等である連結法人(その株主等であった連結法人を含みます。)において、その連結子法人の令和2年旧令第9条第3項第1号に掲げる金額につき同項の規定の適用を受けた金額を記載します。	

欄		記 載 要 領	注 意 事 項
「適格合併又は適格分割型分割による調整額の計算」の各欄	各欄共通	次に掲げる場合に記載します。 (1) 当期以前に自己を合併法人とする適格合併を行った場合 (2) 当期以前に自己を分割法人又は分割承継法人とする適格分割型分割が行われている場合	
	「当期の適格合併又は適格分割型分割により引継ぎを受けた最終利益積立金額15」	次の区分に応じ、それぞれ次の金額を記載します。 (1) 当期において、連結グループ内で自己を合併法人とする適格合併を行った場合 被合併法人の最後事業年度において作成するこの明細書の「4」の金額 (2) 当期において、連結グループ内で自己を分割承継法人とする適格分割型分割が行われた場合 分割法人が作成するこの明細書の「16」の金額	
	「当期の適格合併又は適格分割型分割により引継ぎを受けた既修正額20」	次の区分に応じ、それぞれ次の金額を記載します。 (1) 当期において、連結グループ内で自己を合併法人とする適格合併を行った場合 被合併法人の最後事業年度において作成するこの明細書の「9」の金額 (2) 当期において、連結グループ内で自己を分割承継法人とする適格分割型分割が行われた場合 分割法人が作成するこの明細書の「21」の金額	

3 根拠条文

令和2年旧法28、令和2年旧令9

別表五の二(二)

「連結法人の租税公課の納付状況等に関する明細書」

1 この明細書の用途

この明細書は、連結利益積立金額の計算上控除する連結法人税等の税額の発生及び納付の状況並びに納税充当金の積立て又は取崩しの状況を明らかにするために使用します。

2 各欄の記載要領

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
「連結法人税及び連結地方法人税」の各欄	連結親法人の別表五の二(二)付表の「法人税及び地方法人税」に記載された金額のうち連結法人税の額及び連結地方法人税の額について連結事業年度別に該当する欄に記載します。	
「法人税及び地方法人税」の各欄	各連結法人の別表五の二(二)付表の「法人税及び地方法人税」に記載された金額を連結事業年度別に該当する欄ごとに合計して記載します。	
「道府県民税」、「市町村民税」及び「事業税及び特別法人事業税」の各欄	各連結法人の別表五の二(二)付表の「道府県民税」、「市町村民税」及び「事業税及び特別法人事業税」に記載された金額を連結事業年度別に該当する欄ごとに合計して記載します。	
「その他」の各欄	各連結法人の別表五の二(二)付表の「その他」に記載された金額を該当する欄ごとに合計して記載します。	
「納税充当金の計算」の各欄	「期首納税充当金35」	各連結法人の別表五の二(二)付表の「期首納税充当金30」の金額を合計して記載します。
	「36」から「46」までの各欄	各連結法人の別表五の二(二)付表の「31」から「41」までの各欄に記載された金額をこの明細書の「36」から「46」までの該当する欄ごとに合計して記載します。

別表五の二(二)付表

「各連結法人の租税公課の納付状況等に関する明細書」

1 この明細書の用途

この明細書は、各連結法人の連結個別利益積立金額の計算上控除する租税公課の発生及び納付の状況、納税充当金の積立て又は取崩しの状況並びに連結法人税個別帰属額及び連結地方法人税個別帰属額又は附帯税の負担額の発生及び決済の状況を明らかにするために使用します。

2 各欄の記載要領

欄		記 載 要 領	注 意 事 項
「法人名」		連結親法人の法人名を記載するとともに、括弧の中にこの明細書を記載する連結法人の法人名を記載します。	
法人税及び地方法人税の各欄	各欄共通	<p>次の区分に応じてそれぞれ次の金額を、連結事業年度別に該当する欄ごとに記載します。</p> <p>(1) 連結親法人……①及び②の合計額</p> <p>① 各連結事業年度の連結所得に対する法人税の額及び当該法人税に係る地方法人税の額の合計額</p> <p>② 各事業年度の所得に対する法人税の額及び当該法人税に係る地方法人税の額の合計額</p> <p>(2) 連結子法人……各事業年度の所得に対する法人税の額及び当該法人税に係る地方法人税の額の合計額</p> <p>なお、連結法人税若しくは連結地方法人税又は法人税若しくは地方法人税に係る利子税、延滞税、過少申告加算税、無申告加算税及び重加算税の額については、この欄には記載しないで、「その他」の「利子税20」、「加算税及び加算金24」及び「延滞税25」の該当欄に記載します。</p>	
	「期首現在未納税額①」の「1」及び「2」	<p>「1」及び「2」には、前期分のこの明細書（前期が単体法人である連結法人にあっては、前期の別表五(二)の「期末現在未納税額⑥」の金額を記載します。</p> <p>なお、連結親法人の直前期分に係る「期首現在未納税額①」は、直前期分のこの明細書の「期末現在未納税額⑥」の「中間3」の金額と「確定4」の金額との合計額を記載します。</p>	<p>(1) 前期分の申告後に既往年度について更正等があった場合には、更正等の後の連結法人税及び連結地方法人税の額又は法人税及び地方法人税の額を基礎として記載します。</p> <p>(2) 連結法人の直前期分が単体申告の場合には、直前期分に係る「期首現在未納税額①」は、直前期分の別表五(二)の「⑥」の「中間3」の金額と「確定4」の金額との合計額</p>

欄		記 載 要 領	注 意 事 項
一 法 人 税 及 び 地 方 法 人 税 の 各 欄			を記載します。
	「当期発生税額②」の「中間3」及び「確定4」	(1) 「中間3」には、別表一の二の「連結中間申告分の法人税額15」及び「中間申告分の地方法人税額43」の金額の合計額を記載します。 (2) 「確定4」には、別表一の二の「差引確定法人税額16」及び「差引確定地方法人税額44」の金額の合計額を記載します。	中間分の連結法人税の額及び連結地方法人税の額の合計額が確定分の連結法人税の額及び連結地方法人税の額の合計額を超える場合には、「確定4」には、その超える金額を△印を付して記載します。
	「当期中の納付税額」の各欄	連結親法人にあっては「期首現在未納税額①」又は「当期発生税額②」に記載した連結法人税額及び連結地方法人税額又は法人税額及び地方法人税額を、連結子法人にあっては「期首現在未納税額①」に記載した法人税額及び地方法人税額を当期中に納付した場合に、その納付税額を納税充当金を取り崩して納付したか、仮払金として納付したか、又は損金経理により納付したかにより、それぞれ該当欄に区分して記載します。この場合に、過誤納があるときは、各欄にそれぞれ外書きしてください。 この外書金額は、「期末現在未納税額⑥」に移記する必要はありません。	外書金額は、法人の確定した決算において未収金又は仮払金として計上していない場合には、別表五の二(-)付表一の空欄に「未収過誤納金」等と記載の上、その合計額を「増③」に記載します。 この場合、「⑤」の外書金額は、別表四の二付表の「加算」の空欄にも記載することになります。
	「期末現在未納税額⑥」	「確定4」に記載することとなる連結法人税額及び連結地方法人税額がマイナスになる場合にあってはその金額は外書き(△印を付けます)します。 ただし、「中間3」に未納税額の記載がある場合にあってはその未納税額に相当する金額に達するまでの金額は本書きし(△印を付けます。)、 「確定4」の「当期発生税額②」の金額と本書きした金額との差額を外書き(△印を付けます)します。	
	「計5」	「当期中の納付税額」の各欄の金額のうち連結法人税額及び連結地方法人税額を合計した金額は、連結親法人の別表五の二(-)付表一の「3」から「17」までの空欄のいずれかに記載した「未納連結法人税及び未納連結地方法人税」の「減②」の金額と符合し、連結法人税及び連結地方法人税を除いた金額を合計した金額は、各連結法人の同付表の「未納法人税及び未納地方法人税22」の「減②」の金額と符合することになります。	

欄		記 載 要 領	注 意 事 項
「道府県民税」の各欄	各欄共通	原則として「法人税及び地方法人税」の各欄の記載要領に準じて記載します。	基本税額(均等割額を含みます。)のみについて記載し、加算金及び延滞金についてはこの欄には記載しません。
	「期首現在未納税額①」の「6」及び「7」	「6」及び「7」には、前期分のこの明細書(前期が単体法人である連結法人にあつては、前期の別表五(二)の「期末現在未納税額⑥」の金額を記載しますが、その金額が、支店等の税率が異なっていることなどにより標準税率を基として算出されたものであるときは、当期において申告等により具体的に確定した金額を記載します。	
	「当期発生税額②」の、「中間8」及び「確定9」	「中間8」及び「確定9」には、当期の連結法人税個別帰属額を基礎として地方税法の規定により算出した道府県民税額を記載します。ただし、支店等が他の都道府県にある場合には、標準税率により算出した税額を記載しても差し支えありません。	
「市町村民税」の各欄		「法人税及び地方法人税」及び「道府県民税」の各欄の記載要領に準じて記載します。	
「事業税及び特別法人事業税」の各欄	「16」から「18」までの各欄	「道府県民税」の「6」から「8」までの記載要領に準じて記載します。この場合、前期の確定分の税額は「17」の「当期発生税額②」に記載します。	「当期中の納付税額」の各欄に記載した金額のうち前連結事業年度又は前事業年度までに既に損金の額に算入された事業税及び特別法人事業税の額がある場合には、その既に損金の額に算入された事業税及び特別法人事業税の額に相当する金額については、別表四の二付表の「加算」の空欄に「事業税認定損」等として「総額①」及び「留保②」に記載します。
	「仮払経理による納付④」	別表四の二付表の「減算」の空欄に「仮払事業税認定損」等として「総額①」及び「留保②」に記載します。	
	「損金経理による納付⑤」	未払金として経理した金額を含めて記載します。	当期分の事業税及び特別法人事業税は、当期の損金の額に算入されませんから、別表四の二付表で加算することになります。

欄		記 載 要 領	注 意 事 項
「その他」の各欄	「当期中の納付税額」の各欄	「法人税及び地方法人税」の「当期中の納付税額」の各欄の記載要領に準じて記載します。 なお、「20」以下の各欄の「損金経理による納付⑤」には、未払金として経理した金額を含めて記載します。したがって、この経理をした金額は、その後は期首及び期末の未納税額に記載しません。	
	「延滞金（延納に係るもの）21」	地方税法第72条の45の2、令和2年改正前の地方税法第65条及び第327条の規定による納期限の延長を受けた期間に係る延滞金について記載し、その他の期間に係る延滞金については「損金不算入のもの」の「延滞金（延納分を除く。）26」に記載します。	
「納税充当金の計算」の各欄	「期首納税充当金30」	各連結法人の前期のこの明細書（前期が単体法人である連結法人にあつては、前期の別表五(二)の「期末納税充当金41」）を記載します。	
	「32」	還付を受けた法人税等の金額で納税充当金へ繰り入れた金額等各連結法人が損金経理により繰り入れた金額以外の繰入額を記載します。 なお、空欄には、例えば「還付法人税等」と記載します。	「32」に記載した金額が、例えば、前期以前において生じた還付金を当期に納税充当金として受け入れた場合には、別表五の二(一)付表一の「納税充当金20」の「増③」に記載するとともに、該当欄の「減②」に同額を記載し、別表四の二付表には関係させません。
	「損金算入のもの36」	「利子税20」から「23」までの「充当金取崩しによる納付③」の金額の合計額を記載します。	
	「損金不算入のもの37」	「加算税及び加算金24」から「29」までの「充当金取崩しによる納付③」の金額の合計額を記載します。	
	「38」	納税充当金の取崩額のうち「法人税額等34」から「損金不算入のもの37」まで及び「仮払税金消却39」以外により取り崩した金額を記載します。	
	「仮払税金消却39」	前期以前に納付した税金を仮払金等として経理していた金額について当期において納税充当金を取り崩して消却した金額を記載します。	この場合には、別表五の二(一)付表一において、前期から繰り越された「仮払税金」の「減②」にその消却した金額を△印を付して記載するとともに、「納税充当金20」の「減②」に記載します。

欄	記 載 要 領	注 意 事 項	
「各連結法人の連結法人税個別帰属額及び連結地方法人税個別帰属額の発生状況等の明細」の各欄	「期首現在未決済額①」	前期分のこの明細書の「期末現在未決済額⑤」の金額を連結事業年度別に記載します。	
	「当期発生額②」の「当期分44」	<p>当期の連結法人税個別帰属支払額（当期の連結法人税の負担額として帰せられる金額として令和2年旧法第81条の18第1項（連結法人税の個別帰属額の計算）の規定により計算される金額をいいます。）又は連結法人税個別帰属受取額（当期の連結法人税の減少額として帰せられる金額として同項の規定により計算される金額をいいます。以下同じです。）及び連結地方法人税個別帰属支払額（当期の連結地方法人税の負担額として帰せられる金額として令和2年旧地方法第15条第1項の規定により計算される金額をいいます。）又は連結地方法人税個別帰属受取額（当期の連結地方法人税の減少額として帰せられる金額として同項の規定により計算される金額をいいます。以下同じです。）を記載します。</p> <p>なお、当期において附帯税（利子税を除きます。）を納付することとなった場合には、その納付する金額のうちこの明細書を記載する連結法人に帰せられる部分の金額を外書として記載します。</p>	連結法人税個別帰属受取額及び連結地方法人税個別帰属受取額については△印を付して記載します。
	「当期中の決済額」の各欄	「期首現在未決済額①」又は「当期発生額②」の金額のうち当期中に決済された金額をその額が発生した連結事業年度別にそれぞれ記載します。	

別表六の二(一)

「連結事業年度における所得税額の控除に関する明細書」

1 この明細書の用途

この明細書は、連結法人が当期中に支払を受ける利子及び配当等並びに懸賞金等及び償還差益につき課された所得税の額について、令和2年旧法第81条の14(連結事業年度における所得税額の控除)の規定により当期の連結所得に対する法人税の額からその所得税の額の控除を受ける場合(令和2年改正法附則第143条の規定による改正前の復興財源確保法第33条第2項(復興特別所得税に係る所得税法の適用の特例等)の規定により復興特別所得税の額を所得税の額とみなして適用する場合があります。)に使用します。

なお、集団投資信託の収益の分配に係る源泉所得税の額から控除された令和2年旧法第81条の15の2第1項(連結事業年度における分配時調整外国税相当額の控除)に規定する分配時調整外国税相当額について法人税の額から控除しようとする場合には、この明細書ではなく、別表六の二(二の二)(連結事業年度における分配時調整外国税相当額の控除及び各連結法人の地方法人税の額から控除する分配時調整外国税相当額の個別帰属額の計算に関する明細書)を使用します。

2 記載の手順

この明細書は、まず、中段の「剰余金の配当(特定公社債等運用投資信託の受益権及び特定目的信託の社債的受益権に係るものを除く。)、利益の配当、剰余金の分配及び金銭の分配(みなし配当等を除く。)、集団投資信託(合同運用信託、公社債投資信託及び公社債等運用投資信託(特定公社債等運用投資信託を除く。))を除く。)の収益の分配又は割引債の償還差益に係る控除を受ける所得税額の計算」及び「その他に係る控除を受ける所得税額の明細」の各欄(「7」から「21」まで)を記載し、次に上段の各欄(「1」から「6」まで)を記載します。

下段の「個別帰属額の計算」の各欄には、令和2年旧令第155条の44(連結法人税額から控除する所得税額の個別帰属額の計算)の規定により各連結法人に帰せられる金額について、各連結法人ごとに別葉に記載します。

3 各欄の記載要領

欄	記載要領	注意事項
「集団投資信託(合同運用信託、公社債投資信託及び公社債等運用投資信託(特定公社債等運用投資信託を除く。))を除く。)の収益の分配3」	証券投資信託の収益の分配の額のうち、令和2年旧措置法第68条の103第1項(特定株式投資信託の収益の分配に係る受取配当等の益金不算入の特例)に規定する特定株式投資信託の収益の分配の額がある場合には、その額を上段に内書として記載します。	
「その他5」	所得税法第174条第3号から第10号まで(内国法人に係る所得税の課税標準)に規定する給付補填金、利息、利益、差益、利益の分配及び賞金の支払を受けた場合並びに懸賞金等の額及びみなし配当等の額がある場合に、それらの金額を記載します。	中段の「その他に係る控除を受ける所得税額の明細」がこの内訳となります。

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
「収入金額①」の各欄	<p>当期中に支払を受ける金額(所得税及び復興特別所得税込みの金額をいい、利子等については当期末までにその利払期の到来しているものに、配当等についてはその支払のために通常要する期間内に支払を受けることが見込まれるものに限りま す。以下同じです。)を記載します。</p>	
「①について課される所得税額②」の各欄	<p>(1) 当期中に支払を受ける金額について課される所得税及び復興特別所得税の額を記載します。 (2) 「公社債及び預貯金の利子、合同運用信託、公社債投資信託及び公社債等運用投資信託(特定公社債等運用投資信託を除く。)の収益の分配並びに特定公社債等運用投資信託の受益権及び特定目的信託の社債的受益権に係る剰余金の配当1」から「集団投資信託(合同運用信託、公社債投資信託及び公社債等運用投資信託(特定公社債等運用投資信託を除く。))を除く。)の収益の分配3」まで及び「その他5」は、別表六の二(二の二)「1の②」から「4の②」までに金額の記載がある場合には、それぞれその金額を控除して記載します。</p>	
「②のうち控除を受ける所得税額③」の各欄	<p>(1) 「公社債及び預貯金の利子、合同運用信託、公社債投資信託及び公社債等運用投資信託(特定公社債等運用投資信託を除く。)の収益の分配並びに特定公社債等運用投資信託の受益権及び特定目的信託の社債的受益権に係る剰余金の配当1」及び「その他5」には、「①について課される所得税額②」の金額をそのまま記載します。 (2) 「剰余金の配当(特定公社債等運用投資信託の受益権及び特定目的信託の社債的受益権に係るものを除く。)、利益の配当、剰余金の分配及び金銭の分配(みなし配当等を除く。))2」、「集団投資信託(合同運用信託、公社債投資信託及び公社債等運用投資信託(特定公社債等運用投資信託を除く。))を除く。)の収益の分配3」及び「割引債の償還差益4」には、中段の「剰余金の配当(特定公社債等運用投資信託の受益権及び特定目的信託の社債的受益権に係るものを除く。)、利益の配当、剰余金の分配及び金銭の分配(みなし配当等を除く。))、集団投資信託(合同運用信託、公社債投資信託及び公社債等運用投資信託(特定公社債等運用投資信託を除く。))を除く。)の収益の分配又は割引債の償還差益に係る控除を受ける所得税額の計算」の「個別法による場合」又は「銘柄別簡便法による場合」のいずれかの方法により計算した配当等の計算期間のうち元本を所有してい</p>	<p>仮決算による連結中間申告により令和2年旧法第81条の29第1項((所得税額の還付))又は第133条第1項((更正等による所得税額等の還付))の規定による還付金がある場合において、その仮決算による連結中間申告に係る連結事業年度の連結確定申告をするときは、これらの還付金の額に相当する金額を「計6」の「②のうち控除を受ける所得税額③」の上段に内書として記載します。この場合において、令和2年旧法第81条の14第2項((連結事業年度における所得税額の控除))に規定する連結子法人があるときの連結親法人にあっては、連結離脱還付金額(その還付金の額にその仮決算による連結中間申告における別表六の二(一)「6」の「③」の金額のうちに</p>

欄	記載要領	注意事項
	<p>た期間に対応する部分の額のそれぞれの合計額を記載します。</p> <p>(3) 「公社債及び預貯金の利子、合同運用信託、公社債投資信託及び公社債等運用投資信託（特定公社債等運用投資信託を除く。）の収益の分配並びに特定公社債等運用投資信託の受益権及び特定目的信託の社債的受益権に係る剰余金の配当1」から「集団投資信託（合同運用信託、公社債投資信託及び公社債等運用投資信託（特定公社債等運用投資信託を除く。）を除く。）の収益の分配3」まで及び「その他5」は、別表六の二（二の二）「1の②」から「4の②」までに金額の記載がある場合には、「①について課される所得税額②」において当該金額を控除した後の金額を基礎として計算した金額を記載します。</p>	<p>その仮決算による連結中間申告における同項に規定する連結子法人の同表「②」の金額の合計額の占める割合を乗じて計算した金額をいいます。）を「個別帰属額22」欄の上段に外書として記載します。</p>
<p>「剰余金の配当（特定公社債等運用投資信託の受益権及び特定目的信託の社債的受益権に係るものを除く。）、利益の配当、剰余金の分配及び金銭の分配（みなし配当等を除く。）、集団投資信託（合同運用信託、公社債投資信託及び公社債等運用投資信託（特定公社債等運用投資信託を除く。）を除く。）の収益の分配又は割引債の償還差益に係る控除を受ける所得税額の計算」の各欄</p>	<p>配当等の計算期間のうち元本を所有していた期間に対応する部分の額の計算について、令和2年旧令第155条の26第2項（種類、銘柄及び元本の所有期間の異なるものごとに、個別に計算する方法）の規定の適用を受ける場合には「個別法による場合」の各欄を、同条第3項（元本の増加分について所得税額の2分の1を控除する簡便計算法）の規定の適用を受ける場合には「銘柄別簡便法による場合」の各欄を、それぞれ記載します。</p>	<p>銘柄別簡便法による場合には、①株式及び出資（特定公社債等運用投資信託の受益権及び社債的受益権を除きます。）と②集団投資信託（合同運用信託、公社債投資信託及び公社債等運用投資信託（特定公社債等運用投資信託を除きます。）の受益権の2グループに区分し、さらにその元本をその配当等の計算の基礎となった期間が1年を超えるものと1年以下のものに区分し、その区分に属する元本の全てについて、その銘柄ごとに、令和2年旧令第155条の26第3項に規定する方法により計算することになります。</p> <p>なお、国内追加型投資信託とそれ以外の投資信託は別のグループに区分することができます。</p>
<p>「所得税額8」、「各連結法人の所得税額の合計額14」及び「控除を受ける所得税額21」の各欄</p>	<p>(1) 当期中に支払を受ける金額について課される所得税及び復興特別所得税の額を記載します。</p> <p>(2) 別表六の二（二の二）「10」、「16」及び「23」に金額の記載がある場合には、それぞれその金額を控除して記載します。</p>	

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
<p>「配当等の計算期間9」及び「(9)のうち元本所有期間10」</p>	<p>配当等が令第140条の2第1項第1号(法人税額から控除する所得税額の計算)に規定する剰余金の配当若しくは利益の配当若しくは剰余金の分配又は金銭の分配(以下「剰余金配当等」といいます。)である場合には、その剰余金配当等(以下「判定対象配当等」といいます。)の直前にその判定対象配当等を支払う法人から受けた剰余金配当等の支払に係る基準日の翌日からその判定対象配当等の支払に係る基準日までの期間を「配当等の計算期間9」に記載します。</p> <p>月数は、暦に従って計算し、1月未満の端数は切り上げます。</p> <p>なお、設定により取得した国内追加型投資信託については、これらの欄の記載を省略し、「所有期間割合11」に、「1.000」と記載して控除を受ける所得税額を計算してください。</p>	
<p>「各連結法人の配当等の計算期末の所有元本数等の合計15」及び「各連結法人の配当等の計算期首の所有元本数等の合計16」</p>	<p>口数の定めがない出資については所有元本の金額により、その他のものについては所有元本の数により記載します。</p>	
<p>「$\frac{(15)-(16)}{2}$又は12」17」</p>	<p>次の場合に応じ、それぞれ次により記載します。</p> <p>(1) 配当等の計算期間が1年以下であるものの元本の場合……$\frac{(15)-(16)}{2}$又は12</p> <p>(2) 配当等の計算期間が1年を超えるものの元本の場合……$\frac{(15)-(16)}{2}$又は12</p>	
<p>「その他に係る控除を受ける所得税額の明細」の各欄</p>	<p>所得税法第174条第3号から第10号までに規定する給付補填金、利息、利益、差益、利益の分配及び賞金の支払を受けた場合並びに懸賞金等の額及びみなし配当等の額がある場合に、それらの金額の内訳を記載します。この場合、「参考」には、賞金、給付補填金、利息、利益、差益、利益の分配、懸賞金付預貯金等の懸賞金等、みなし配当等の別、源泉徴収された所得税額を証明する書類の有無その他控除税額の計算について参考となる事項を記載します。</p>	<p>この欄に記載しきれないときは、その明細をこの内訳の様式により別紙に記載して添付してください。</p>
<p>「個別帰属額の計算」の各欄</p>	<p>当期の連結所得に対する法人税の額から控除される所得税の額(令和2年改正法附則第143条の規定による改正前の復興財源確保法第33条第2項の規定により所得税の額とみなされる復興特別所得税の額を含みます。)のうち、各連結法人に帰せられる金額について、連結法人ごとに記載します。この場合、「配当等以外に係る控除を受ける所得税額のうち当該連結法人に帰せられる所得税額26」</p>	<p>この欄に記載しきれないときは、その明細をこの内訳の様式により別紙に記載して添付してください。</p>

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
	<p>は、「公社債及び預貯金の利子、合同運用信託、公社債投資信託及び公社債等運用投資信託（特定公社債等運用投資信託を除く。）の収益の分配並びに特定公社債等運用投資信託の受益権及び特定目的信託の社債的受益権に係る剰余金の配当1」及び「その他5」の「②のうち控除を受ける所得税額③」の金額のうち、各連結法人に帰せられる金額を銘柄等ごとに記載します。</p>	

4 根拠条文

令和2年旧法81の14、令和2年旧令155の26、令和2年旧措置法3の3⑤、6③、8の3⑤、9の2④、41の9④、41の12④、41の12の2⑦、措置法令26の10③、令和2年旧措置法令26の11、措置法規則19の4②～④、令和2年改正法附則第143条の規定による改正前の復興財源確保法33②、復興特別所得税令13②

別表七の二

「連結欠損金等の損金算入に関する明細書」

1 この明細書の用途

この明細書は、次に掲げる場合に使用します。

- (1) 連結法人が、当期に連結欠損金額が生じた場合に、その連結欠損金額につき翌期以後に令和2年旧法第81条の9（第4項を除きます。）（連結欠損金の繰越し）の規定の適用を受ける場合
- (2) 連結法人が、当期首前9年以内に開始した連結事業年度において生じた連結欠損金額（平成30年4月1日以前に開始した連結事業年度において生じたものに限ります。）又は当期首前10年以内に開始した連結事業年度において生じた連結欠損金額（平成30年4月1日以後に開始した連結事業年度において生じたものに限ります。）について、平成27年改正前の法第81条の9（第4項を除きます。）（連結欠損金の繰越し）又は令和2年旧法第81条の9（第4項を除きます。）の規定の適用を受ける場合

2 各欄の記載要領

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
「控除未済連結欠損金額1」	<p>当期首前9年以内に開始した連結事業年度において生じた連結欠損金額（平成30年4月1日以前に開始した連結事業年度において生じたもの限り、連結欠損金額とみなされた金額を含みます。）又は当期首前10年以内に開始した連結事業年度において生じた連結欠損金額（平成30年4月1日以後に開始した連結事業年度において生じたもの限り、連結欠損金額とみなされた金額を含みます。）で、過去に繰越控除又は繰戻しを受けなかった金額を古い連結事業年度の分から順次記載します。</p> <p>この場合、次の区分に応じ、それぞれ次の金額を記載します。</p> <p>(1) 調整連結事業年度（令和2年旧法第81条の9第2項各号に掲げる場合に該当することとなった連結事業年度並びに同条第5項第1号から第3号まで、第5号又は第6号に規定する場合に該当することとなった連結事業年度及び同項第4号に規定する適用連結事業年度をいいます。以下同じです。）の場合……「控除未済連結欠損金額11」の金額</p> <p>(2) 調整連結事業年度以外の連結事業年度の場合……前期の「翌期繰越額5」の金額</p>	<p>平成30年4月1日以後に開始した連結事業年度において生じた連結欠損金額の繰越期間は<u>10年間</u>となりますが、同日以前に開始した連結事業年度において生じた連結欠損金額の繰越期間は、<u>9年間</u>となりますので御注意ください。</p> <p>（3月決算法人の例）</p> <p>平成31年3月期（自平成30年4月1日至平成31年3月31日）に生じた連結欠損金額の繰越期間は、令和2年3月期（自平成31年4月1日至令和2年3月31日）から令和11年3月期（自令和10年4月1日至令和11年3月31日）までの10年間です。</p> <p>平成30年3月期（自平成29年4月1日至平成30年3月31日）に生じた連結欠損金額の繰越期間は、令和9年3月期（自令和8年4月1日至令和9年3月31日）までの9</p>

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
		年間です。
「(1)のうち特定連結欠損金額2」	<p>次の場合に応じ、それぞれ次の金額を記載します。</p> <p>(1) 調整連結事業年度の場合……「11」の内書の金額</p> <p>(2) 調整連結事業年度以外の連結事業年度の場合……前期の「(5)のうち特定連結欠損金額6」の金額</p>	
「当期分」の「連結欠損金額」	<p>当期の別表四の二「連結所得金額又は連結欠損金額55」の「総額①」に連結欠損金額の記載がある場合に、その連結欠損金額を「当期分」の「連結欠損金額」に記載します。</p>	
「連結欠損金の繰戻し額」	<p>連結欠損金のうち令和2年旧法第81条の31(連結欠損金の繰戻しによる還付)の規定の適用を受ける場合にその適用を受ける金額を記載します。</p>	<p>令和2年旧措置法第68条の97各号(中小連結法人の欠損金等以外の欠損金の繰戻しによる還付の不適用)に掲げる連結親法人以外の連結親法人にあっては、当期が平成14年4月1日から令和6年3月31日までの間に終了する各連結事業年度である場合には、令和2年旧法第81条の31第4項(連結欠損金の繰戻しによる還付)の規定に該当する場合の同項に規定する連結事業年度において生じた連結欠損金額、同条第5項に規定する災害損失欠損金額及び令和2年改正法第15条の規定による改正前の措置法第68条の98第1項(中小連結法人の欠損金等以外の欠損金の繰戻しによる還付の不適用)に規定する設備廃棄等欠損金額があるときを除き、令和2年旧法第81条の31の規定の適用を受けることができませんので御注意ください。</p> <p>なお、普通法人である連結親法人のうち、期末の資本金の額若しくは出資金の額が1億円以下</p>

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
		<p>であるもの又は資本若しくは出資を有しないもの（相互会社を除きます。）（当期末において資本金の額又は出資金の額が5億円以上である法人等による完全支配関係がある法人など令和2年旧法第66条第6項第2号又は第3号（各事業年度の所得に対する法人税の税率）に掲げる法人に該当するものを除きます。）など、令和2年旧措置法第68条の97各号に掲げる連結親法人の各連結事業年度において生じた連結欠損金額については、令和2年旧法第81条の31の規定の適用を受けることができます。</p>
<p>「翌期繰越額5」及び「(5)のうち特定連結欠損金額6」</p>	<p>「5」及び「6」の各欄は、「15」の欄に金額の記載がある場合には、それぞれ「翌期繰越額(1)－(3)＋各連結法人の別表七の二付表五「18」の合計)5」及び「(5)のうち特定連結欠損金額(2)－(4)＋各連結法人の別表七の二付表五「15」の合計)6」として記載します。</p>	
<p>「控除未済連結欠損金額の調整計算」の各欄</p>	<p>当期が調整連結事業年度に該当する場合に、古い連結事業年度の分から順次記載します。</p>	
<p>「7」から「11」までの各欄の内書</p>	<p>令和2年旧法第81条の9第3項に規定する特定連結欠損金額を記載します。</p>	
<p>「連結納税の開始に伴うみなし連結欠損金額8」</p>	<p>「13」又は「14」に金額の記載がある場合、最初の連結親法人事業年度においては、「連結納税の開始に伴うみなし連結欠損金額（別表七の二付表二「3の計」－各連結法人の別表七の二付表四「30」の合計)8」として記載します。</p>	
<p>「減算額10」</p>	<p>「13」又は「14」に金額の記載がある場合、最初の連結親法人事業年度以外の調整連結事業年度においては、「減算額（別表七の二付表二「19の計」＋各連結法人の別表七の二付表四「30」の合計)10」として記載します。</p>	
<p>「控除未済連結欠損金額11」</p>	<p>次の場合に応じ、それぞれ次により記載します。</p> <p>(1) 最初の連結親法人事業年度である場合 ＝(7)＋(9)－(10)又は(8)</p> <p>(2) 最初の連結親法人事業年度以外の調整連結事業年度である場合</p>	

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
	((7)+(9)-(10)) 又は(8)	
<p>「更生欠損金等の当期控除額がある場合の連結欠損金等の当期控除額の合計額の計算」の各欄</p>	<p>連結法人が令和2年旧法第81条の3第1項（個別益金額又は個別損金額）（令和2年旧法第59条（会社更生等による債務免除等があった場合の欠損金の損金算入）の規定により令和2年旧法第81条の3第1項に規定する個別損金額を計算する場合に限ります。）の規定の適用を受ける場合に記載します。</p>	

3 根拠条文

令和2年旧法81の9、令和2年旧令155の19～155の21、令和2年旧措置法68の97

別表七の二付表一

「連結欠損金当期控除額及び連結欠損金個別帰属額の計算に関する明細書」

1 この明細書の用途

この明細書は、連結法人が令和2年旧法第81条の9第1項((連結欠損金の繰越し))若しくは平成27年改正前の法第81条の9第1項((連結欠損金の繰越し))の規定により連結所得の金額の計算上損金の額に算入される金額を計算する場合、令和2年旧法第81条の9第6項に規定する連結欠損金個別帰属額(以下「連結欠損金個別帰属額」といいます。)を計算する場合(連結確定申告をする場合に限り)又は仮決算による連結中間申告をする場合(令和2年旧法第81条の31第5項((連結欠損金の繰戻しによる還付))において準用する同条第1項の規定により還付の請求をする場合に限り)に使用します。

2 各欄の記載要領

欄	記載要領	注意事項
「控除前連結所得金額1」	別表七の二付表四「9」又は「21」に金額の記載がある場合には、「控除前連結所得金額(別表四の二「46の①」－(別表七の二「13」＋「14」))1」として記載します。	
「連結所得金額控除限度額 (1) × $\frac{50又は100}{100}$ 2」	次の場合に応じ、それぞれ次により記載します。 (1) 当期が中小連結親法人等連結事業年度に該当しない連結事業年度である場合 $(1) \times \frac{50又は100}{100}$ (注) 中小連結親法人等連結事業年度とは、令和2年旧法第81条の9第8項各号に掲げる連結親法人の当該各号に定める各連結事業年度をいいます。以下同じです。 (2) (1)以外の連結事業年度である場合 $(1) \times \frac{50又は100}{100}$	中小連結親法人等の判定については、104ページを参照してください。
「当期控除額(当該発生連結事業年度の(1)と(2)－当該発生連結事業年度前の(8)の合計額)のうち少ない金額5」	別表七の二付表六「3」に金額の記載がある場合には、次によります。 (1) 「(2)－当該発生連結事業年度前の(8)の合計額」の金額が0に満たない場合には、その金額を0として計算します。 (2) 令和2年旧措置法第68条の96の2第1項第1号に規定する特例事業年度に該当する各連結事業年度ごとに別表七の二付表六「3」の金額を含めて記載します。	
「当期控除額(当該発生連結事業年度の(6)と(2)－当該発生連結事業年度前の(8)の合計額－当該発生連結事業年度の(5)のうち少ない金額」	別表七の二付表六「4」に金額の記載がある場合には、次によります。 (1) 「(2)－当該発生連結事業年度前の(8)の合計額－当該発生連結事業年度の(5)」の金額が0に満たない場合には、その金額を0として計算	

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
額) 7」	<p>します。</p> <p>(2) 令和2年旧措置法第68条の96の2第1項第1号に規定する特例事業年度に該当する各連結事業年度ごとに別表七の二付表六「4」の金額を含めて記載します。</p>	
「控除未済連結欠損金個別帰属額9」	<p>別表七の二付表四「12」又は「24」に金額の記載がある場合には、「控除未済連結欠損金個別帰属額((前期の(20)又は(28))又は別表七の二付表二「21」)－別表七の二付表四「30」)9」として記載します。</p>	
「(9)のうち特定連結欠損金に係る控除未済額の個別帰属額10」	<p>別表七の二付表四「12」又は「24」に金額の記載がある場合には、「(9)のうち特定連結欠損金に係る控除未済額の個別帰属額((前期の(14))又は別表七の二付表二「21の内書」)－別表七の二付表四「27」)10」として記載します。</p>	
「調整前当期控除額11」	<p>別表七の二付表四「9」又は「21」に金額の記載がある場合には、「調整前当期控除額(当該発生連結事業年度の(10)と(別表四の二付表「46の①」－(別表七の二付表四「9」＋「21」)－当該発生連結事業年度前の(19)の合計額)のうち少ない金額)11」として記載します。</p>	
「特定連結欠損金当期控除額の個別帰属額 (5) × $\frac{(11)}{(12)}$ 13」	<p>別表七の二付表六「3」に金額の記載がある場合(令和2年旧措置法第68条の96の2第1項第1号に規定する特例事業年度に該当する各連結事業年度に係る部分に限ります。)は、「特定連結欠損金当期控除額の個別帰属額(別表七の二付表六「12」＋「19」)13」として計算した金額を記載します。</p>	
「特定連結欠損金個別帰属額の翌期繰越額14」	<p>別表七の二付表五「12」に金額の記載がある場合には、「特定連結欠損金個別帰属額の翌期繰越額(10)－(13)＋別表七の二付表五「15」)14」として記載します。</p>	
「非特定連結欠損金個別帰属額の翌期繰越額18」	<p>別表七の二付表五「12」に金額の記載がある場合には、「非特定連結欠損金個別帰属額の翌期繰越額(15)－(17)＋別表七の二付表五「17」)18」として記載します。</p>	

欄		記 載 要 領	注 意 事 項
「連結欠損金当期発生額に係る個別帰属額の計算」の各欄	各欄共通	連結親法人が令和2年改正法附則第105条第2項（中小連結法人の欠損金等以外の欠損金の繰戻しによる還付の不適用に関する経過措置）に規定する特定設備廃棄等欠損金額がある場合において、その特定設備廃棄等欠損金額につき令和2年旧法第81条の31（連結欠損金の繰戻しによる還付）の規定の適用を受けるときは、次の「連結欠損金額21」から「連結欠損金の繰戻し額の個別帰属額27」までのとおり記載します。	
	「連結欠損金額21」	その特定設備廃棄等欠損金額をこの欄の上段に内書として記載します。	
	「連結欠損金当期発生額に係る個別帰属額24」	次の金額のうちいずれか少ない金額をこの欄の上段に内書として記載します。 (1) その連結法人に係る令和2年改正前の措置法令第39条の122第1項（中小連結法人の欠損金等以外の欠損金の繰戻しによる還付の不適用）に規定する証明がされた金額 (2) 「24」の金額から、別表七の二付表三「3」の金額のうち令和2年旧法第81条の31第5項において準用する同条第1項の規定により還付を受ける金額の計算の基礎とする金額を「各連結法人の連結欠損金当期発生額に係る個別帰属額の合計額26」の金額で除し、これに「24」の金額を乗じて計算した金額を控除した金額	
	「連結欠損金の繰戻し額25」	令和2年旧法第81条の31の規定により還付を受けるべき金額の計算の基礎となった特定設備廃棄等欠損金額をこの欄の上段に内書として記載します。	
	「連結欠損金の繰戻し額の個別帰属額27」	「 $(25) \times \frac{(24)}{(26)}$ 」とあるのは、「 $((25) - (25の内書)) \times \frac{(24)}{(26)} + (25の内書) \times \frac{(24の内書)}{(21の内書)}$ 」として記載します。	

3 根拠条文

令和2年旧法81の9、81の31、平成27年改正法附則30②、令和2年改正法附則105②

別表七の二付表二

「連結欠損金当期控除前の連結欠損金個別帰属額の調整計算に関する明細書」

1 この明細書の用途

この明細書は、連結法人が令和2年旧法第81条の9第2項各号((連結欠損金の繰越し))に掲げる場合若しくは同条第5項第1号から第3号まで、第5号若しくは第6号に規定する場合に該当する場合又は令和2年旧法第81条の10第1項((特定株主等によって支配された欠損等連結法人の連結欠損金の繰越しの不適用))に規定する欠損等連結法人(以下「欠損等連結法人」といいます。)である連結法人が同項に規定する政令で定める事由に該当する場合に使用します。

なお、この明細書は、令和2年旧法第81条の9第6項に規定する連結欠損金個別帰属額に係る連結欠損金額が生じた連結事業年度ごとに記載してください。

2 各欄の記載要領

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
「1」から「8」まで、「10」から「15」まで及び「17」から「21」までの各欄の内書	令和2年旧法第81条の9第3項に規定する特定連結欠損金個別帰属額を記載します。	
「連結親法人又は特定連結子法人の欠損金額等で連結欠損金額とみなされるもの1」及び「特定連結子法人の欠損金額等で連結欠損金額とみなされるもの4」の各欄	令和2年旧法第81条の9第2項第1号に定める欠損金額又は連結欠損金個別帰属額(同項の連結親法人又は同号に規定する特定連結子法人が令和2年旧法第81条の10第4項に規定する場合に該当する場合における同項に規定する欠損金額又は連結欠損金個別帰属額を除きます。)を記載します。	
「連結親法人又は連結子法人の適格合併等による未処理欠損金額等の引継額2」、「連結子法人の適格合併等による未処理欠損金額等の引継額5」及び「連結親法人又は連結子法人の適格合併等による未処理欠損金額等の引継額8」の各欄	令和2年旧法第81条の9第2項第2号に定める欠損金額又は連結欠損金個別帰属額(欠損等連結法人である連結親法人又は連結子法人の令和2年旧法第81条の10第2項第1号に掲げる未処理欠損金額又は連結欠損金個別帰属額、欠損等連結法人が発行済株式又は出資の全部又は一部を有する同条第3項に規定する内国法人の残余財産が確定する場合における同項に規定する未処理欠損金額又は連結欠損金個別帰属額及び令和2年旧法第81条の9第2項の連結親法人又は連結子法人が令和2年旧法第81条の10第5項に規定する場合に該当する場合における同項に規定する未処理欠損金額又は連結欠損金個別帰属額を除きます。)を記載します。	この欠損金額又は連結欠損金個別帰属額の計算に関する明細を別表七(一)付表一から別表七(一)付表三までに所要の調整を加えたものに記載して添付します。
「連結内適格合併等による引継額」の各欄	連結法人を合併法人とする適格合併でその連結法人との間に連結完全支配関係がある他の連結子法人を被合併法人とするものが行われた場合又はその連結法人との間に連結完全支配関係がある他の連結子法人でその連結法人が発行済株式若しくは出資の全部若しくは一部を有する	

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
	ものの残余財産が確定した場合に記載します。	
「連結欠損金個別帰属額の加算額14」	残余財産が確定した他の連結子法人に株主等が二以上ある場合には、この欄中「13」とあるのは、「(13)をその残余財産が確定した他の連結子法人の発行済株式又は出資（当該他の連結子法人が有する自己の株式又は出資を除きます。）の総数又は総額で除し、これにその連結法人の有する当該他の連結子法人の株式又は出資の数又は金額を乗じて計算した金額」として記載します。	
「離脱をした連結子法人の前期の連結欠損金個別帰属額の翌期繰越額15」	令和2年旧法第4条の5第1項又は第2項（連結納税の承認の取消し）（第4号及び第5号に係る部分に限ります。）の規定により令和2年旧法第4条の2（連結納税義務者）の承認を取り消された連結子法人の連結欠損金個別帰属額を記載します。	
「連結欠損金の繰戻し還付の特例の基礎となった連結欠損金額の個別帰属額16」	その連結事業年度において令和2年旧法第81条の31第4項（連結欠損金の繰戻しによる還付）において準用する同条第1項の規定の適用を受けた場合にその基礎となった連結欠損金額に係る各連結法人の令和2年旧令第155条の21第2項第4号（連結欠損金個別帰属額等）に定める金額を記載します。	
「共同事業要件に該当する場合又は5年継続支配関係がある場合のいずれにも該当しないことによりないものとされる連結欠損金額17」	令和2年旧法第81条の9第5項第3号に定める金額を記載します。	その金額に関する明細を別表七(-)付表一から別表七(-)付表四までに所要の調整を加えたものに記載して添付します。
「欠損等連結法人の適用連結事業年度前の連結欠損金額のうち当該欠損等連結法人に帰せられる金額18」	欠損等連結法人の令和2年旧令第155条の22第9項各号（特定株主等によって支配された欠損等連結法人の連結欠損金の繰越しの不適用）に定める金額のうちその欠損等連結法人に帰せられる金額を記載します。	
「連結欠損金当期控除前の調整後の連結欠損金個別帰属額21」	次の区分に応じ、それぞれ次の金額を記載します。 (1) 最初の連結事業年度の場合……「3」又は「6」の金額 (2) その他の連結事業年度の場合……「20」の金額	

3 根拠条文

令和2年旧法81の9、81の10

別表八の二

「連結事業年度における受取配当等の益金不算入に関する明細書」

1 この明細書の用途

この明細書は、連結法人が令和2年旧法第81条の4（受取配当等）（令和2年旧措置法第68条の103第1項（特定株式投資信託の収益の分配に係る受取配当等の益金不算入の特例）の規定により読み替えて適用する場合を含みます。）の規定の適用を受ける場合に使用します。

2 記載の手順

この明細書の記載の順序は、まず、中段の「総資産価額等の計算」及び下段の「受取配当等の額の明細」の各欄（「15」から「34」まで）を記載し、次に上段の各欄（「1」から「14」まで）を記載します。

3 各欄の記載要領

欄	記載要領	注意事項
「当期中に支払う負債利子等の額3」	当期中に支払う負債利子のほか、令和2年旧令第21条（負債の利子に準ずるもの）に掲げるものも含め、各連結法人の合計額を記載します。	
「連結法人に支払う負債利子等の額4」	「3」に記載した金額のうち、連結法人が他の連結法人（当該連結法人との間に連結完全支配関係があるものに限り）に支払う金額の合計額を記載します。	
「総資産の帳簿価額15」	各連結法人の確定決算に基づく貸借対照表に計上している総資産の帳簿価額の合計額（両建勘定、返品債権特別勘定など資産の帳簿価額に含まれないものは控除したところにより）を記載します。	税効果会計を採用している場合に計上される繰延税金資産勘定の金額は、総資産の帳簿価額の合計額に含まれます。
	「連結法人に支払う負債利子等の元本の負債の額等16」	次の(1)から(4)までに掲げる金額の合計額を記載します。 (1) 固定資産の帳簿価額を損金経理により減額することに代えて積立金として積み立てている金額 (2) 特別償却準備金として積み立てている金額 (3) 土地の再評価に関する法律第3条第1項の規定により再評価が行われた土地に係る同法第7条第2項に規定する再評価差額金が貸借対照表に計上されている場合のその土地に係る再評価差額に相当する金額 (4) その連結法人との間に連結完全支配関係がある他の連結法人に支払う負債の利子の元本である負債の額に相当する金額

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
一 総 資 産 価 額 等 の 計 算 上 の 各 欄	<p>「期末関連法人株式等の帳簿価額18」</p> <p>各期末における期末関連法人株式等について、税務計算上の帳簿価額を記載します。</p> <p>なお、この場合の期末関連法人株式等とは、連結法人（その連結法人との間に連結完全支配関係がある他の連結法人を含みます。）が他の内国法人（公益法人等及び人格のない社団等を除きます。）の発行済株式又は出資（当該他の内国法人が有する自己の株式等を除きます。）の総数又は総額の3分の1を超える数又は金額の当該他の内国法人の株式等を、当期末の6月前の日の翌日（当該他の内国法人がその翌日後に設立された法人である場合には、当該他の内国法人の設立の日）から当期末まで引き続き有している場合における当該他の内国法人の株式等（期末完全子法人株式等を除きます。）をいいます。</p>	<p>(1) 「前期末現在額」には、期末関連法人株式等とこれ以外の株式等の区分が前期と当期とで異なる場合であっても、前期のこの明細書の「当期末現在額」の金額をそのまま記載します。</p> <p>(2) 「期末完全子法人株式等」とは、連結法人が他の内国法人（公益法人等及び人格のない社団等を除きます。）との間に当期首（当該他の内国法人が当期の中途において設立された法人である場合にあっては、当該他の内国法人の設立の日）から当期末まで継続して完全支配関係があった場合（その連結法人が当期の中途において当該他の内国法人との間に完全支配関係を有することとなった場合において、当期首からその完全支配関係を有することとなった日まで継続して当該他の内国法人と他の者との間に当該他の者による完全支配関係があり、かつ、同日から当期末まで継続してその連結法人と当該他の者との間及び当該他の内国法人と当該他の者との間に当該他の者による完全支配関係があったときを含みます。）の当該他の内国法人の株式等をいいます。</p>

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
<p style="text-align: center;">一 受 取 配 当 等 の 額 の 明 細 一 の 各 欄</p>	<p>完全子法人株式等に係る配当等について記載します。</p> <p>この場合の、完全子法人株式等とは、その配当等の額の計算期間の初日からその計算期間の末日まで継続してその連結法人とその配当等の額を支払う他の内国法人（公益法人等及び人格のない社団等を除きます。）との間に完全支配関係があった場合（その連結法人がその計算期間の中途において当該他の内国法人との間に完全支配関係を有することとなった場合において、その計算期間の初日からその完全支配関係を有することとなった場合において、その計算期間の初日からその完全支配関係を有することとなった日まで継続して当該他の内国法人と他の者との間に当該他の者による完全支配関係があり、かつ、同日からその計算期間の末日まで継続してその連結法人と当該他の者との間及び当該他の内国法人と当該他の者との間に当該他の者による完全支配関係があったときを含みます。）の当該他の内国法人の株式等（その支払を受ける配当等の額が令和2年旧法第81条の3第1項（個別益金額又は個別損金額）に規定する個別益金額を計算する場合に令和2年旧法第24条第1項（配当等の額とみなす金額）の規定により配当等の額とみなされる金額であるときは、その金額の支払に係る効力が生ずる日の前日においてその連結法人と当該他の内国法人との間に完全支配関係があった場合の当該他の内国法人の株式等）をいいます。</p>	<p>左記の「計算期間」とは、その配当等の額の支払を受ける直前にその配当等の額を支払う他の内国法人により支払われた配当等の額（適格現物分配に係るものを含みます。）の支払に係る基準日の翌日（令和2年旧令第155条の9第2項各号（完全子法人株式等の範囲）に掲げる場合には、当該各号に定める日）からその支払を受ける配当等の額の支払に係る基準日までの期間をいいます。</p>
<p style="text-align: center;">「関連法人株式等」の各欄</p>	<p>関連法人株式等に係る配当等について記載します。</p> <p>この場合の関連法人株式等とは、連結法人（その連結法人との間に連結完全支配関係がある他の連結法人を含みます。）が他の内国法人（公益法人等及び人格のない社団等を除きます。）の発行済株式又は出資（当該他の内国法人が有する自己の株式等を除きます。）の総数又は総額の3分の1を超える数又は金額の当該他の内国法人の株式等を、その連結法人が当該他の内国法人から受ける配当等の額の計算期間の初日からその計算期間の末日まで引き続き有している場合における当該他の内国法人の株式等（完全子法人株式等を除きます。）をいいます。</p>	<p>左記の「計算期間」とは、その配当等の額の支払を受ける直前にその配当等の額を支払う他の内国法人により支払われた配当等の額（適格現物分配又は適格株式分配に係るものを含みます。）の支払に係る基準日の翌日（令和2年旧令第155条の10第2項各号（関連法人株式等の範囲）に掲げる場合には、当該各号に定める日）からその支払を受ける配当等の額の支払に係る基準日（その配当等の額が令和2年旧法第24条第1項（同項第2号に掲げる分割型分割、同項第3号に掲げる株式</p>

欄		記 載 要 領	注 意 事 項
一 受 取 配 当 等 の 額 の 明 細 「 の 各 欄			分配又は同項第4号に規定する資本の払戻しに係る部分を除きます。)の規定により配当等の額とみなされる金額である場合には、その支払に係る効力が生ずる日の前日)までの期間をいいます。
	「その他株式等」の各欄	「完全子法人株式等」、「関連法人株式等」及び「非支配目的株式等」のいずれにも該当しない株式等に係る配当等について記載します。	これらの欄に「非支配目的株式等」に該当するものを記載する誤りが見受けられますので、これらの欄を記載する前に「完全子法人株式等」、「関連法人株式等」及び「非支配目的株式等」を記載し、これらいずれにも該当しないもののみ「その他株式等」の各欄に記載してください。
	「非支配目的株式等」の各欄	非支配目的株式等に係る配当等について記載します。 この場合の非支配目的株式等とは、連結法人(その連結法人との間に連結完全支配関係がある他の連結法人を含みます。)が他の内国法人(公益法人等及び人格のない社団等を除きます。)の発行済株式又は出資(当該他の内国法人が有する自己の株式等を除きます。)の総数又は総額の5%以下に相当する数又は金額の当該他の内国法人の株式等を、その連結法人が当該他の内国法人から受ける配当等の額の支払に係る基準日(その配当等の額が令和2年旧法第81条の3第1項に規定する個別益金額を計算する場合に令和2年旧法第24条第1項(同項第2号に掲げる分割型分割、同項第3号に掲げる株式分配又は同項第4号に規定する資本の払戻しに係る部分を除きます。)の規定により配当等の額とみなされる金額であるときは、その支払に係る効力が生ずる日の前日)において有する場合における当該他の内国法人の株式等(完全子法人株式等を除きます。)をいいます。	令和2年旧措置法第68条の103第1項に規定する特定株式投資信託の収益の分配の額がある場合のその特定株式投資信託については「非支配目的株式等」に該当することになりますが、各欄の記載に当たって、「本店の所在地26」に「特定株式投信」と記載し、「基準日27」及び「保有割合28」は記載する必要はありません。

欄		記 載 要 領	注 意 事 項
一 受 取 配 当 等 の 明 細 各 欄	「受取配当等の額19」、 「受取配当等の額20」、 「受取配当等の額23」、 「特例非支配目的株式 等に係る配当等の額 29」及び「左記以外の 株式等に係る配当等の 額30」	当期に受ける令和2年旧法第81条の4第1項 (令和2年旧措置法第68条の103第1項の規定に より読み替えて適用する場合があります。)及び 令和2年旧措置法第68条の104(保険会社の連結 事業年度における受取配当等の益金不算入の特 例)に規定する配当等の額又は令和2年旧法第24 条の規定により配当等の額とみなされる金額を記 載します。	(1) 外国法人若しくは公 益法人等又は人格のない 社団等から受ける配 当等の額及び適格現物 分配に係る配当等の額 は受取配当等の額から 除かれます。 (2) 令和2年旧法第81条 の3第1項に規定する 個別益金額を計算する 場合に、令和2年旧法第 24条の規定により、配 当等の額とみなされる金 額については、別欄とし て記載し、その発生理由 を付記してください。
	「左のうち益金の額に 算入される金額21」、 「左のうち益金の額に 算入される金額24」、 「特例非支配目的株式 等に係る配当等の額 31」及び「左記以外の 株式等に係る配当等の 額32」	令和2年旧法第81条の4第2項(令和2年旧措 置法第68条の103第1項の規定により読み替えて 適用する場合があります。)並びに令和2年旧措 置法令第39条の124の4第1項及び第2項(保険 会社の連結事業年度における受取配当等の益金 不算入の特例)並びに第39条の124の5第1項及 び第2項(協同組合等有する普通出資に係る受 取配当等の益金不算入の特例)又は令和2年旧法 第81条の4第3項の規定により計算した金額を記 載します。	令和2年旧法第81条の 4第2項並びに令和2年 旧措置法令第39条の124の 4第1項及び第2項並び に第39条の124の5第1項 及び第2項の規定により 計算した金額については、 その金額の計算に関する 明細を別紙に記載して添 付してください。
	「保有割合28」	令和2年旧法第81条の4第7項に規定する他 の内国法人から受ける同条第1項に規定する配 当等の額の支払に係る基準日において有する当該 他内国法人の株式又は出資のうち令和2年旧 令第155条の10の2第2項(非支配目的株式等 の範囲)に規定する短期保有株式等がある場合 には、その短期保有株式等を有していないもの として記載します。	
	「特例非支配目的株式 等に係る配当等の額 29」、「特例非支配目的 株式等に係る配当等の 額31」及び「特例非支 配目的株式等に係る配 当等の額 ⁽²⁹⁾ － ⁽³¹⁾ 33」の 各欄	令和2年旧措置法第68条の104(保険会社の連 結事業年度における受取配当等の益金不算入の 特例)の規定の適用を受ける配当等について記 載します。	

4 根拠条文

令和2年旧法81の4、平成19年改正前の法81の4、平成19年改正法附則34、令和2年旧令155の7～155の11、規則8の4、令和2年旧規則8の5の2、令和2年旧措置法68の103、68の104、令和2年旧措置法令39の124の3～39の124の5

別表八の二付表

「連結事業年度における受取配当等の益金不算入の個別帰属額の計算に関する明細書」

1 この明細書の用途

この明細書は、連結法人が令和2年旧法第81条の4（受取配当等）（令和2年旧措置法第68条の103第1項（特定株式投資信託の収益の分配に係る受取配当等の益金不算入の特例）の規定により読み替えて適用する場合を含みます。）の規定の適用を受ける場合に、各連結法人ごとに作成し、連結事業年度における受取配当等の益金不算入額のうち各連結法人に帰せられる部分の金額を計算するために使用します。

2 記載の手順

この明細書は、まず、下段の「各連結法人の受取配当等の額の明細」の各欄（「13」から「18」まで）を記載し、次に上段の各欄（「1」から「12」まで）を記載します。

3 各欄の記載要領

欄	記載要領	注意事項
「法人名」	連結親法人の法人名を記載するとともに、括弧の中に連結法人の法人名を記載します。	
「(11) × $\frac{((17\text{の計}) \times 2) \text{又は} (18\text{の計})}{((\text{別表八の二}「29\text{の計}」) \times 2) + (\text{別表八の二}「30\text{の計}」)}$ 12」	次の場合に応じ、それぞれ次により計算した金額を記載します。 (1) 令和2年旧措置法第68条の104第1項（保険会社の連結事業年度における受取配当等の益金不算入の特例）の規定の適用を受ける場合 $(11) \times \frac{((17\text{の計}) \times 2) \text{又は} (18\text{の計})}{((\text{別表八の二}「29\text{の計}」) \times 2) + (\text{別表八の二}「30\text{の計}」)}$ (2) (1)以外の場合 $(11) \times \frac{((17\text{の計}) \times 2) \text{又は} (18\text{の計})}{((\text{別表八の二}「29\text{の計}」) \times 2) + (\text{別表八の二}「30\text{の計}」)}$	
「各連結法人の受取配当等の額の明細」の各欄	別表八の二「連結事業年度における受取配当等の益金不算入に関する明細書」の「受取配当等の額の明細」の各欄の記載要領（68ページ以下参照）に準じて記載します。	
「本店の所在地16」	措置法第67条の6第1項（特定株式投資信託の収益の分配に係る受取配当等の益金不算入の特例）に規定する特定株式投資信託の収益の分配の額がある場合のその特定株式投資信託については、この欄に「特定株式投信」と記載します。	

4 根拠条文

令和2年旧法81の4、平成19年改正前の法81の4、平成19年改正法附則34、令和2年旧令155の

7～155の11、規則8の4、令和2年旧規則8の5の2、令和2年旧措置法68の103、68の104、令和2年旧措置法令39の124の3～39の124の5

別表十四の二

「連結事業年度における寄附金の損金算入に関する明細書」

1 この明細書の用途

この明細書は、連結法人が令和2年旧法第81条の6（連結事業年度における寄附金の損金不算入）（令和2年旧措置法第68条の96第1項（認定特定非営利活動法人等に対する寄附金の損金算入の特例）の規定により読み替えて適用する場合を含みます。）又は令和2年旧措置法第68条の88第3項（連結法人の国外関連者との取引に係る課税の特例）の規定の適用を受ける場合に使用します。

2 記載の手順

この明細書は、指定寄附金等、公益の増進に著しく寄与する法人（以下「特定公益増進法人」といいます。）若しくは認定特定非営利活動法人等に対する寄附金又は特定公益信託の信託財産とするために支出した金銭がある場合には、まず、中段の「指定寄附金等に関する明細」、「特定公益増進法人若しくは認定特定非営利活動法人等に対する寄附金又は認定特定公益信託に対する支出金の明細」又は「その他の寄附金のうち特定公益信託（認定特定公益信託を除く。）に対する支出金の明細」の各欄を記載し、次に上段の欄を用いて損金不算入額の計算を行います。

下段の「個別帰属額の計算」の各欄には、令和2年旧令第155条の16（寄附金の損金不算入額の個別帰属額の計算）の規定により各連結法人に帰せられる金額について各連結法人ごとに別葉に記載します。

3 各欄の記載要領

欄	記載要領	注意事項
「法人名」	連結親法人の法人名を記載します。	
「完全支配関係がある法人に対する寄附金額5」、「完全支配関係がある法人に対する寄附金額23」	各連結法人がその連結法人との間に完全支配関係（法人による完全支配関係があるものに限ります。）がある他の内国法人に対して支出した寄附金の額を合計して記載します。	
「同上の $\frac{2.5 \text{又は} 1.25}{100}$ 相当額9」	次に掲げる法人の区分に応じ、それぞれ次により記載します。 (1) その連結親法人が当期末において資本又は出資を有しない法人である連結法人 同上の $\frac{2.5 \text{又は} 1.25}{100}$ 相当額 (2) (1)以外の連結法人 同上の $\frac{2.5 \text{又は} 1.25}{100}$ 相当額	
「連結親法人の期末の連結個別資本金等の額10」	連結親法人の当期末における連結個別資本金等の額を記載します。	連結親法人が資本又は出資を有しない法人である場合には、記載する必要はありません。
「同上の月数換算額(10) $\times \frac{1}{12}$ 11」	分子の空欄には、連結事業年度の月数（暦に従って計算し、1月未満の端数は切り捨てます。）を記載します。	

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
「特定公益増進法人等に対する寄附金の損金算入額(2)と(14)又は(16)のうち少ない金額17」	次に掲げる法人の区分に応じ、それぞれ次により記載します。 (1) その連結親法人が当期末において資本又は出資を有しない法人である連結法人 「2」と「14」とのうち少ない金額 (2) (1)以外の連結法人 「2」と「16」とのうち少ない金額	
「国外関連者に対する寄附金額19」	各連結法人が支出した令和2年旧措置法第68条の88第3項(連結法人の国外関連者との取引に係る課税の特例)の規定により損金の額に算入されない国外関連者に対する寄附金の額を合計して記載します。	
「同上のうち損金の額に算入されない金額(20)－(9)又は(13)－(17)－(18)21」	次に掲げる法人の区分に応じ、それぞれ次により記載します。 (1) その連結親法人が当期末において資本又は出資を有しない法人である連結法人 「20」－「9」－「17」－「18」の金額 (2) (1)以外の連結法人 「20」－「13」－「17」－「18」の金額	
「指定寄附金等に関する明細」の各欄	各連結法人が支出した寄附金のうち法第37条第3項第1号又は第2号(寄附金の損金不算入)に規定する国若しくは地方公共団体(港湾法の規定による港湾局を含みます。)に対する寄附金又は財務大臣の指定を受けた寄附金に該当するものがある場合に、これらの寄附金について令和2年旧法第81条の6第3項の適用を受けるときに記載します。	国又は地方公共団体に対する寄附金については、「告示番号」は記載する必要はありません。
「特定公益増進法人若しくは認定特定非営利活動法人等に対する寄附金又は認定特定公益信託に対する支出金の明細」の各欄	各連結法人が支出した令和2年旧法第37条第4項に規定する寄附金について令和2年旧法第81条の6第4項の適用を受ける場合(令和2年旧措置法第68条の96第1項の規定又は令和2年旧法第81条の6第5項の規定により読み替えて適用する場合を含みます。)に記載します。	令第77条各号(公益の増進に著しく寄与する法人の範囲)に掲げる特定公益増進法人に対する寄附金等がある場合には、規則第24条(公益の増進に著しく寄与する法人の証明書類等)の規定による証明書を保存してください。
「その他の寄附金のうち特定公益信託(認定特定公益信託を除く。)に対する支出金の明細」の各欄	令和2年旧法第81条の6第5項の規定により、寄附金の額とみなされる特定公益信託(認定特定公益信託は除きます。)の信託財産とするために支出した金銭について同条第1項の規定の適用を受ける場合に記載します。	

欄		記 載 要 領	注 意 事 項
「個別帰属額の計算」の各欄	各欄共通	寄附金の損金不算入額に係る個別帰属額の計算を行う連結法人ごとに記載します。	
	「連結法人名」	寄附金の損金不算入額に係る個別帰属額の計算を行う連結法人の法人名を記載します。	
	「指定寄附金等の金額27」	「1」のうち「連結法人名」に記載した連結法人が支出した金額を記載します。	
	「特定公益増進法人等に対する寄附金額28」	「2」のうち「連結法人名」に記載した連結法人が支出した金額を記載します。	
	「国外関連者に対する寄附金額31」	「連結法人名」に記載した連結法人が支出した令和2年旧措置法第68条の88第3項の規定により損金の額に算入されない国外関連者に対する寄附金の額を記載します。	

4 添付書類

公益信託の信託財産とするために支出した金銭について、令和2年旧法第81条の6の規定の適用を受ける場合には、令和2年旧令第155条の14((特定公益信託の要件等))の規定により、この明細書にその公益信託が法第37条第6項に規定する特定公益信託に該当することを証明するための書類として令第77条の4第2項に規定する主務大臣等の発行する証明書類の写しを添付する必要があります。

5 根拠条文

令和2年旧法81の6、令和2年旧令第155の13～155の16、規則22の4～24、令和2年旧規則37の2、令和2年旧措置法68の88③、68の96①、令和2年旧措置法令39の23①、令和2年旧措置法規則22の76の3

別表十五の二

「交際費等の損金算入に関する明細書」

1 この明細書の用途

この明細書は、連結法人が令和2年旧措置法第68条の66（交際費等の損金不算入）の規定の適用を受ける場合に使用します。

④ 令和2年旧措置法第68条の66第1項に規定する接待飲食費とは、交際費等のうち飲食その他これに類する行為のために要する費用（専らその連結法人の役員若しくは従業員又はこれらの親族に対する接待等のために支出するものを除きます。以下「飲食費」といいます。）であって、法人税法上で整理・保存が義務付けられている帳簿書類に次に掲げる事項（③に掲げる事項を除きます。）を記載することにより飲食費であることが明らかにされているものをいい、また、1人当たり5,000円以下の飲食費が交際費等に該当しないこととされるためには、次に掲げる事項を記載した書類を保存する必要がありますので、御注意ください。

- ① その飲食費に係る飲食等（飲食その他これに類する行為をいいます。以下同じです。）のあった年月日
- ② その飲食費に係る飲食等に参加した得意先、仕入先その他事業に関係のある者等の氏名又は名称及びその関係
- ③ その飲食費に係る飲食等に参加した者の数
- ④ その飲食費の額並びにその飲食店、料理店等の名称及びその所在地（店舗を有しないことその他の理由によりその名称又は所在地が明らかでないときは、領収書等に記載された支払先の氏名若しくは名称、住所若しくは居所又は本店若しくは主たる事務所の所在地）
- ⑤ その他飲食費であることを明らかにするために必要な事項

2 記載の手順

この明細書は、まず各連結法人ごとに「6」から「21」までの各欄を記載し、次に「1」から「5」までの各欄を記載します（個別帰属額の計算を行う場合には、「22」又は「23」を最後に記載します。）。

3 各欄の記載要領

税抜経理方式を選択適用している連結法人は、交際費等に係る消費税等の額のうち控除対象外消費税額等に相当する金額を交際費等の額に含めて損金不算入額を計算する必要がありますので、御注意ください。

欄	記載要領	注意事項						
「中小連結法人の定額控除限度額3」	<p>連結親法人の当期末における資本金の額又は出資金の額（以下「資本金額等」といいます。）の区分に応じ、それぞれ次の定額控除限度額を記載します。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>資本金額等の区分</th> <th>定額控除限度額</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1億円以下の法人（非中小法人を除きます。）</td> <td>(1)と $800\text{万円} \times \frac{\quad}{12}$のうち少ない金額</td> </tr> <tr> <td>上記以外の法人</td> <td>0円</td> </tr> </tbody> </table> <p>④ 「$\frac{\quad}{12}$」の分子の空欄には、連結親法人事業年度の月数（暦に従って計算し、1月未満の端数は切り上げます。）を記載します。</p>	資本金額等の区分	定額控除限度額	1億円以下の法人（非中小法人を除きます。）	(1)と $800\text{万円} \times \frac{\quad}{12}$ のうち少ない金額	上記以外の法人	0円	<p>資本金額等を有しない連結親法人については、令和2年旧措置法令第39条の93（資本金の額又は出資金の額に準ずるものの範囲等）の規定により計算した金額を資本金額等とします。</p> <p>非中小法人の判定については106ページを参照してください。</p>
資本金額等の区分	定額控除限度額							
1億円以下の法人（非中小法人を除きます。）	(1)と $800\text{万円} \times \frac{\quad}{12}$ のうち少ない金額							
上記以外の法人	0円							

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
「法人名①～④」	交際費等を支出した連結法人の法人名を記載します。	
「6」から「17」までの各欄	連結法人別に、当期に支出した交際費等の額について、その科目の異なるごとに別欄に記載します。	当期に支出した交際費等の額には、損金経理による交際費等の金額のほか、固定資産や棚卸資産の取得価額又は繰延資産等の額に含まれた交際費等に該当する金額も含めて記載します。
「同上のうち接待飲食費の額21」	連結親法人の当期末における資本金額等が100億円を超える場合には、記載しないでください。	<p>交際費等に含まれる控除対象外消費税額等に相当する金額のうち飲食費に係る金額がある場合には、その金額を含めて記載してください。</p> <p>なお、その控除対象外消費税額等に相当する金額のうち飲食費に係る金額について接待飲食費として50%損金算入の適用を受けるためには、連結法人の帳簿書類に前ページの「1 この明細書の用途」の(注)に掲げる事項を記載する必要があります。これらの事項のうち⑤を記載した書類には、例えば、連結法人が合理的な方法によりその控除対象外消費税額等に相当する金額から飲食費に係る金額を算出した場合のその計算書類がこれに該当します。</p>
「個別帰属損金不算入額」の各欄	各連結法人の交際費等の損金不算入額に係る個別帰属額を計算する場合に記載します。	

4 根拠条文

令和2年旧措置法68の66、令和2年旧措置法令39の93～39の95、令和2年旧措置法規則22の61の4

別表十九の二

「旧法人税法第八十一条の十九第一項の規定による連結予定申告書・旧地方法人税法第十六条第一項の規定による予定申告書」

1 この表の用途

この表は、連結親法人（普通法人に限ります。）が法人税及び地方法人税について、連結中間申告又は連結中間申告に係る修正申告をする場合に使用します。

2 各欄の記載要領

欄		記 載 要 領	注 意 事 項
「税務署処理欄」			記載しないでください。
法人 税 額 の 計 算	「修正・更正・決定の 年月日」	当期首以後6月を経過した日の前日までに最後に法人税について修正申告書を提出した日又は更正若しくは決定の通知のあった日を記載します。	
	「前連結事業年度の法人 税額」の「同上のう ち土地譲渡税額等に 係る金額」	前期に令和2年旧措置法第68条の67第1項（連結法人に用途秘匿金の支出がある場合の課税の特例）に規定する用途秘匿金の支出がある場合には、前期の別表一の二「10」の外書の金額を加えた金額を記載します。	
	「月数換算」	「同上の税額× $\frac{6}{}$ 」の分母の空欄には、前期の月数（暦に従って計算し、1月未満の端数は切り上げます。）を記載します。	
地 方 法 人 税 額 の 計 算	「修正・更正・決定の 年月日」	当期首以後6月を経過した日の前日までに最後に地方法人税について修正申告書を提出した日又は更正若しくは決定の通知のあった日を記載します。	
	「前課税事業年度の地 方法人税額」の「同上 のうち土地譲渡税額等 に係る金額」	前期に令和2年旧措置法第68条の67第1項に規定する用途秘匿金の支出がある場合には、前期の別表一の二「10」の外書の金額の10.3%に相当する金額を加えた金額を記載します。	
	「月数換算」	「同上の税額× $\frac{6}{}$ 」の分母の空欄には、前期の月数（暦に従って計算し、1月未満の端数は切り上げます。）を記載します。	

3 根拠条文

令和2年旧法81の19、令和2年旧規則37の8、令和2年旧地方法16、地方規則2

Ⅳ 「法人税申告書・地方法人税申告書の記載の手引」に準じて記載するもの

次に掲げる明細書については、「令和4年版法人税申告書・地方法人税申告書の記載の手引」に準じて記載してください。

なお、各明細書の用途及び留意点等は、それぞれ次に掲げるとおりです。

別表二

「同族会社等の判定に関する明細書」

1 この明細書の用途

連結親法人が法第2条第10号(定義)に規定する同族会社に該当するかどうか及び令和2年旧法第81条の13(連結特定同族会社の特別税率)の規定の適用がある特定同族会社に該当するかどうかを判定するために使用します。したがって、連結親法人のみについてこの明細書を作成することとなります。

2 留意点等

この明細書による判定は、当期末の現況により行います。

別表五(一)付表

「種類資本金額の計算に関する明細書」

1 この明細書の用途

2以上の種類の株式を発行している連結法人が令第8条第2項(資本金等の額)に規定する種類資本金額を計算するために使用します。

2 留意点等

この明細書は、連結法人ごとに作成し、「法人名」に連結親法人の法人名を記載するとともに、括弧の中に連結法人の法人名を記載します。

別表十一(一)

「個別評価金銭債権に係る貸倒引当金の損金算入に関する明細書」

1 この明細書の用途

連結法人が令和2年旧法第81条の3第1項(個別益金額又は個別損金額)(令和2年旧法第52条第1項又は第5項(貸倒引当金)の規定により令和2年旧法第81条の3第1項に規定する個別損金額を計算する場合に限ります。)の適用を受ける場合に使用します。

2 留意点等

この明細書は、適用を受ける連結法人ごとに作成し、「法人名」に連結親法人の法人名を記載するとともに、括弧の中に適用を受ける連結法人の法人名を記載します。

別表十一(一の二)

「一括評価金銭債権に係る貸倒引当金の損金算入に関する明細書」

1 この明細書の用途

連結法人が次に掲げる規定の適用を受ける場合に使用します。

- (1) 令和2年旧法第81条の3第1項((個別益金額又は個別損金額))(令和2年旧法第52条第2項又は第6項の規定により令和2年旧法第81条の3第1項に規定する個別損金額を計算する場合に限りです。)
- (2) 令和2年旧措置法第68条の59((中小連結法人等の貸倒引当金の特例)又は平成31年改正法附則第71条((中小連結法人等の貸倒引当金の特例に関する経過措置))の規定によりなおその効力を有するものとされる平成31年改正前の措置法第68条の59第3項((中小連結法人等の貸倒引当金の特例))

2 留意点等

この明細書は、適用を受ける連結法人ごとに作成し、「法人名」に連結親法人の法人名を記載するとともに、括弧の中に適用を受ける連結法人の法人名を記載します。

別表十六(一)

「旧定額法又は定額法による減価償却資産の償却額の計算に関する明細書」

1 この明細書の用途

- (1) 連結法人が減価償却資産について、旧定額法又は定額法によりその減価償却資産の償却限度額等を計算する場合に使用します。
- (2) 措置法又は震災特例法による特別償却を行うものについても、この明細書によります。この場合、所定の証明書等が必要とされます。
- (3) 減価償却に関する明細書の提出について、この明細書に代えて令和2年旧法第81条の3第1項の規定により同項の個別損金額を計算する場合の令第63条第2項((減価償却に関する明細書の添付))の規定による合計表又は規則第27条の14後段((期中損金経理額の損金算入等に関する届出書の記載事項に係る書式))(令和2年旧規則第37条第3項((個別益金額又は個別損金額の計算における届出等の規定の適用))において準用する場合を含みます。)の規定による合計表を添付する場合にも、この明細書の書式により記載します。
(注) 特別償却の対象になった減価償却資産については、合計表によることはできませんので、御注意ください。

2 留意点等

この明細書は、適用を受ける連結法人ごとに作成し、「法人名」に連結親法人の法人名を記載するとともに、括弧の中に適用を受ける連結法人の法人名を記載します。

なお、1(3)の合計表を添付する場合にあっては、「構造2」から「耐用年数6」まで、「償却額計算の対象となる期末現在の帳簿記載金額10」から「積立金の期中取崩額12」まで、「損金に計上した当期償却額14」、「前期から繰り越した償却超過額15」、「残存価額17」、「差引取得価額×5%18」、「旧定額法の償却率20」、「定額法の償却率26」、「翌期への繰越額の内訳」の「45」及び「46」の各欄の記載は必要ありません。

また、措置法による特別償却の規定の適用を受ける場合には、特別償却等の償却限度額の計算に

関する付表の添付が必要です。

別表十六(二)

「旧定率法又は定率法による減価償却資産の償却額の計算に関する明細書」

1 この明細書の用途

- (1) 連結法人が減価償却資産について、旧定率法又は定率法によりその減価償却資産の償却限度額等を計算する場合に使用します。
- (2) 別表十六(一)の1(2)及び(3)と同様です。

2 留意点等

この明細書は、適用を受ける連結法人ごとに作成し、「法人名」に連結親法人の法人名を記載するとともに、括弧の中に適用を受ける連結法人の法人名を記載します。

なお、別表十六(一)の1(3)の合計表を添付する場合にあっては、「構造2」から「耐用年数6」まで、「償却額計算の対象となる期末現在の帳簿記載金額10」から「積立金の期中取崩額12」まで、「損金に計上した当期償却額14」、「前期から繰り越した償却超過額15」、「前期から繰り越した特別償却不足額又は合併等特別償却不足額17」、「差引取得価額×5%19」、「旧定率法の償却率20」、「定率法の償却率25」、「保証率27」、「改定償却率30」、「翌期への繰越額の内訳」の「49」及び「50」の各欄の記載は必要ありません。

また、措置法による特別償却の規定の適用を受ける場合には、特別償却等の償却限度額の計算に関する付表の添付が必要です。

別表十六(六)

「繰延資産の償却額の計算に関する明細書」

1 この明細書の用途

- (1) 均等償却を行う繰延資産の償却額の計算に関する明細書
連結法人が令和2年旧法第81条の3第1項((個別益金額又は個別損金額))の規定により同項の個別損金額を計算する場合の令第64条第1項第2号((繰延資産の償却限度額))の規定により均等償却を行うこととされている繰延資産について、当期の償却費として損金経理をした金額がある場合に使用します。
- (2) 一時償却が認められる繰延資産の償却額の計算に関する明細書
連結法人が令和2年旧法第81条の3第1項の規定により同項の個別損金額を計算する場合の令和2年旧令第64条第1項第1号の規定により一時に償却ができることとされている繰延資産について、当期の償却費として損金経理をした金額がある場合に使用します。
- (3) 措置法による特別償却を行うものについても、この明細書によります。この場合、所定の証明書が必要とされます。
④ 特別償却の対象になった繰延資産については、合計表によることはできませんので、御注意ください。

2 留意点等

この明細書は、適用を受ける連結法人ごとに作成し、「法人名」に連結親法人の法人名を記載する

とともに、括弧の中に適用を受ける連結法人の法人名を記載します。

なお、1(1)の繰延資産の償却に関する明細書の提出について、令和2年旧法第81条の3第1項の規定により同項の個別損金額を計算する場合の令第67条第2項(繰延資産の償却に関する明細書の添付)の規定による合計表又は規則第27条の14後段(期中損金経理額の損金算入等に関する届出書の記載事項に係る書式)(令和2年旧規則第37条第3項(個別益金額又は個別損金額の計算における届出等の規定の適用))において準用する場合を含みます。)の規定による合計表を添付する場合にも、この明細書の書式により記載しますが、その記載に当たっては、「支出した年月2」、「償却期間の月数4」、「当期の期間のうちに含まれる償却期間の月数5」並びに「翌期への繰越額の内訳」の「20」及び「21」の各欄の記載は必要ありません。

また、措置法による特別償却の規定の適用を受ける場合には、特別償却等の償却限度額の計算に関する付表の添付が必要です。

別表十六(八)

「一括償却資産の損金算入に関する明細書」

1 この明細書の用途

連結法人が令和2年旧法第81条の3第1項(個別益金額又は個別損金額)の規定により同項の個別損金額を計算する場合において、令和2年改正前令(令和2年6月改正令附則第2条第2項(法人税法施行令等の一部改正に伴う経過措置の原則))の規定によりなおその効力を有するものとされる令和2年旧令をいいます。以下同じ。)第133条の2(一括償却資産の損金算入)若しくは令和4年改正前の令和2年改正前令第133条の2(一括償却資産の損金算入)の規定により損金算入額等の計算を行うときに使用します。

2 留意点等

この明細書は、適用を受ける連結法人ごとに作成し、「法人名」に連結親法人の法人名を記載するとともに、括弧の中に適用を受ける連結法人の法人名を記載します。

別表十六(九)

「特別償却準備金の損金算入に関する明細書」

1 この明細書の用途

連結法人が令和2年旧措置法第68条の41(準備金方式による特別償却)(令和2年旧震災特例法第26条の6第1項前段(連結法人の準備金方式による特別償却))の規定により令和2年旧震災特例法の特別償却若しくは割増償却の規定を含むものとみなして適用する場合若しくは平成29年改正法附則第82条第4項(連結法人の減価償却に関する経過措置)に規定する特例被災代替資産等につき同項第3号若しくは第4号の規定によりみなして適用する場合又は次に掲げる規定によりみなして適用する場合を含みます。)の規定の適用を受ける場合に使用します。

- (1) 平成28年改正前の措置法第68条の11第6項(中小連結法人が機械等を取得した場合の特別償却又は法人税額の特別控除)の規定
- (2) 平成28年改正前の措置法第68条の15の6第6項(生産性向上設備等を取得した場合の特別償却又は法人税額の特別控除)の規定

2 留意点等

この明細書は、適用を受ける連結法人ごとに作成し、「法人名」に連結親法人の法人名を記載するとともに、括弧の中に適用を受ける連結法人の法人名を記載します。

なお、この明細書を記載する場合には、その記載に先立って別表十六(一)から別表十六(六)までを記載し、特別償却限度額を計算する必要があります。

V 個別帰属額の届出書等の記載の仕方

個別帰属額等の一覧表

1 この一覧表の用途

この一覧表は、連結親法人が連結確定申告書及び地方法人税確定申告書を提出する場合において、この連結確定申告書及び地方法人税確定申告書の添付書類である「連結法人税の個別帰属額、連結地方法人税の個別帰属額及びこれらの計算の基礎を記載した書類」として使用します。具体的には、連結法人ごとに作成した連結法人税の個別帰属額、連結地方法人税の個別帰属額及びこれらの計算の基礎を記載した書類をとりまとめ、その表紙として使用してください。

これについては、「I 6 連結確定申告書及び地方法人税確定申告書の添付書類の編てつ順について」を参照してください。

2 各欄の記載要領

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
「納税地等」	連結親法人にあつては納税地を記載し、連結子法人にあつては本店又は主たる事務所の所在地を記載してください。	
「売上金額」	連結親法人及び連結子法人の「各連結事業年度の連結法人税の個別帰属額の届出書」の「※ 税務署処理欄」における「売上金額」の金額を連結法人ごとに記載してください。	売上金額は、消費税の事業者免税点の参考となり、また税務署における事務の効率化にもつながることから、記載をお願いしています。
「個別所得金額又は個別欠損金額」	「各連結事業年度の連結法人税の個別帰属額の届出書」の「個別所得金額又は個別欠損金額1」の金額を記載してください。	
「個別帰属額」	(1) この欄の本書には、「各連結事業年度の連結法人税の個別帰属額の届出書」の「連結法人税個別帰属額14」の金額を記載します。 (2) この欄の外書には、「各連結事業年度の連結法人税の個別帰属額の届出書付表」の「連結地方法人税個別帰属額4」の金額を記載します。	
「期中加入」	期中において連結親法人との間に当該連結親法人による完全支配関係を有することとなったことにより、「完全支配関係を有することとなった旨等を記載した書類（加入）」を提出した子法人について○を付してください。	
「連結子法人数 法人」	連結子法人数の合計を記載してください。	
「連結親法人及び連結子法人の個別帰属額等の合計額」	連結親法人及び全ての連結子法人に係る個別帰属額等の合計額を記載してください。	

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
「参考」	<p>連結子法人の異動状況を記載してください。</p> <p>なお、「加入した連結子法人数」は、期中において連結親法人との間に当該連結親法人による完全支配関係を有することとなった子法人数を記載し、「離脱した連結子法人数」は、期中において連結親法人との間に連結完全支配関係を有しなくなった子法人数を記載してください。</p>	<p>「期首の連結子法人数」 + 「加入した連結子法人数」 - 「離脱した連結子法人数」 = 「期末の連結子法人数」となります。</p>

各連結事業年度の連結法人税の個別帰属額の届出書

1 この届出書の用途

- (1) この届出書は、連結子法人が、令和2年旧法第81条の25(個別帰属額等の届出)の規定により、その連結子法人の本店又は主たる事務所の所在地の所轄税務署長に個別帰属額等を記載した書類(連結法人税の個別帰属額、連結地方法人税の個別帰属額及びこれらの計算の基礎を記載した書類)を提出する場合の「連結法人税の個別帰属額及び連結地方法人税の個別帰属額を記載した書類」として使用します。
- (2) この届出書は、連結親法人が、連結確定申告書に添付する連結親法人分及びその連結親法人に係る連結子法人分の連結法人税の個別帰属額、連結地方法人税の個別帰属額及びこれらの計算の基礎を記載した書類を作成する場合の「連結法人税の個別帰属額及び連結地方法人税の個別帰属額を記載した書類」として使用します。この場合において、連結子法人分については、(1)により作成したものの写しを使用することとして差し支えありません。

なお、連結子法人分の個別帰属額の計算の基礎を記載した書類については、連結確定申告書及び地方法人税確定申告書への添付を省略することができます。

(注) 個別帰属額の計算の基礎を記載した書類の作成に当たっては、別表三(ロ)～別表十七の二(ロ)付表二及びこの届出書の付表を使用してください。

なお、連結確定申告書の別表の写しを使用することとして差し支えありません。

2 各欄の記載要領

欄	記載要領	注意事項
「法人区分」	別表一の二の「法人区分」に表示する連結親法人の区分を○で囲んで表示します。	この欄は、各連結法人の「法人区分」を表示するものではなく、連結親法人の「法人区分」を表示するものです。
	別表一の二の「同非区分」に表示する連結親法人の区分を○で囲んで表示します。	この欄は、各連結法人の「同非区分」を表示するものではなく、連結親法人の「同非区分」を表示するものです。
「旧所在地及び旧法人名」	当期中に連結親法人の納税地若しくは連結子法人の所在地又は法人名に変更があった場合には、旧納税地若しくは旧所在地又は旧法人名を記載します。	
「※税務署処理欄」	原則として記載する必要はありません。 ただし、「売上金額」については、損益計算書の売上(収入)金額の合計額(雑収入、営業外収益及び特別利益を除きます。)を100万円単位(100万円未満の端数は切り上げます。)で記載してください。	売上金額は、消費税の事業者免税点の参考となり、また税務署における事務の効率化にもつながることから、記載をお願いしています。
	税理士法第30条(税務代理の権限の明示)に規定する書面を届出書に添付する場合には、○で囲んで表示します。	

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
<p>「連結事業年度分の申告に係る届出書」</p>	<p>空欄には、次の区分に応じ、それぞれ次により記載します。</p> <p>(1) 連結確定申告に係るもの……………「連結確定」</p> <p>(2) 連結確定申告の修正申告に係るもの…「修正連結確定」</p> <p>(3) 期限後申告に係るもの……………「期限後連結確定」</p>	
<p>「個別所得金額又は個別欠損金額 1」</p>	<p>次の連結法人の区分に応じ、それぞれ次により記載します。</p> <p>(1) 別表七の二付表一「24」に金額の記載のある連結法人</p> <p>別表四の二付表「55の①」の金額を中段の(イ)に記載し、別表七の二付表一「24」の金額を下段の(ロ)に記載し、(イ)の金額と(ロ)の金額を合計した金額を上段に記載します。</p> <p>(2) (1)以外の連結法人</p> <p>別表四の二付表「55の①」の金額を中段の(イ)に記載し、同額を上段に記載します。</p>	
<p>「法人税額の特別控除額の個別帰属額 3」</p>	<p>別表六の二(五)付表「18」＋別表六の二(六)付表「17」＋別表六の二(九)付表「11」＋別表六の二(十)「10」＋別表六の二(十一)「19」＋別表六の二(十二)「20」＋別表六の二(十三)「18」＋別表六の二(十四)「18」＋別表六の二(十五)「12」＋別表六の二(十六)「11」＋(別表六の二(十七)付表三「17」＋「20」)＋別表六の二(十八)「20」＋別表六の二(十九)「9」＋別表六の二(二十)「20」＋別表六の二(二十一)付表「8」＋別表六の二(二十二)付表「7」＋別表六の二(二十四)「15」＋別表六の二(二十五)「32」＋別表六の二(二十六)「25」＋別表六の二(二十七)「13」により計算した金額を記載します。</p>	
<p>「連結納税の承認を取り消された場合等における既に控除された連結法人税額の特別控除額の加算額の個別帰属額 5」</p>	<p>次に掲げる場合の区分に応じ、それぞれ次により記載します ((1)及び(2)のいずれにも該当する場合には、これらの合計額を記載します。)</p> <p>(1) 別表六(三十六)「31」に金額の記載がある場合、その金額の個別帰属額を記載します。</p> <p>(2) 令和2年旧法第4条の5第1項(連結納税の承認の取消し等)の規定により令和2年旧法第4条の2(連結納税義務者)の承認を取り消された日の前日の属する連結事業年度で、次に掲げる規定の適用がある場合、これらの規定により当期の法人税額に加算される金額に係る個別帰属額を記載します。</p> <p>① 令和3年改正前の措置法第68条の15の4第5項(特定中小連結法人が経営改善設備を取得した場合の特別償却又は法人税額の特別控除)</p> <p>② 令和2年旧措置法第68条の11第5項(中小</p>	

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
	<p>連結法人が機械等を取得した場合の特別償却又は法人税額の特別控除)</p> <p>③ 令和2年旧措置法第68条の13第4項((沖縄の特定地域において工業用機械等を取得した場合の法人税額の特別控除))</p> <p>④ 令和2年旧措置法第68条の15の5第5項((中小連結法人が特定経営力向上設備等を取得した場合の特別償却又は法人税額の特別控除))</p> <p>⑤ 平成30年改正前の措置法第68条の10第5項((エネルギー環境負荷低減推進設備等を取得した場合の特別償却又は法人税額の特別控除))</p>	
<p>「連結法人税個別帰属額計10」</p>	<p>その連結法人につき令和2年旧措置法第68条の67第1項(連結法人に用途秘匿金の支出がある場合の課税の特例)に規定する用途秘匿金の支出がある場合には、その用途秘匿金の支出額の40%相当額をこの欄の上段に外書として記載します。</p>	<p>この場合、「差引連結所得に対する連結法人税個別帰属額12」には、この外書として記載した金額を「10」に含めて計算します。</p>
<p>「連結欠損金の繰戻しによる還付金の個別帰属額13」、「連結法人税個別帰属額14」及び「この届出の基因となった申告等により増加又は減少する連結法人税個別帰属額19」の外書</p>	<p>令和2年旧法第81条の31(連結欠損金の繰戻しによる還付)の規定により還付の請求をした法人税の額(その連結法人に帰せられるものに限ります。)で還付されていないものがあるときに、その金額を記載します。</p>	
<p>「連結欠損金の繰戻しによる還付金の個別帰属額13」</p>	<p>修正申告をする場合において、令和2年旧法第81条の31第6項において準用する令和2年旧法第80条第6項(欠損金の繰戻しによる還付)の規定により還付を受ける金額に係る還付加算金があるときは、その還付加算金の額(その連結法人に帰せられるものに限ります。)を含めて記載します。</p>	
<p>「この届出の基因となった申告等により増加又は減少する連結法人税個別帰属額(14)-(18)19」</p>	<p>「14」の金額から「18」の金額を減算した金額がマイナスとなる場合には、そのマイナスの金額(△印を付けます。)を記載します。</p>	
<p>「連結親法人が中小法人等の場合」の各欄</p>	<p>連結親法人が令和2年旧法第81条の12第2項(中小法人の各連結事業年度の連結所得に対する法人税の税率)の規定の適用を受ける場合又は令和2年旧措置法第68条の8第1項(同項の表の第2号及び第3号に係る部分に限る。)(中小企業者等である連結法人の法人税率の特例)の規定の適用がある場合に記載します。</p>	<p>令和2年旧措置法第68条の100第1項の承認を受けている同項に規定する医療法人である連結親法人が適用除外事業者該当する場合には、令和2年旧措置法第68条の8の規定の適用はないため、この欄へは記載</p>

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
		<p>せず、「26」欄に記載することとなりますので御注意ください。</p> <p>(注) 適用除外事業者とは、その連結事業年度開始の日前3年以内に終了した各連結事業年度の連結所得の金額の平均が15億円を超える法人などをいいます(109ページを参照してください)。</p>
<p>「算出連結法人税個別帰属額(25)×$\frac{(27)}{(24)}$)又は(25)の15%、16%又は19%相当額) 28」</p>	<p>「28」は、次に掲げる場合の区分に応じそれぞれ次により記載します。</p> <p>(1) 「連結所得金額24」が0である場合</p> <p>① 普通法人である連結親法人で令和2年旧措置法第68条の8の規定の適用があるもの $(25) \times \frac{(27)}{(24)}$ 又は (25) の 15%、16% 又は 19% 相当額</p> <p>② 協同組合等である連結親法人及び令和2年旧措置法第68条の100第1項(特定の医療法人である連結親法人の法人税率の特例)の承認を受けている同項に規定する医療法人である連結親法人で、令和2年旧措置法第68条の8の規定の適用があるもの $(25) \times \frac{(27)}{(24)}$ 又は (25) の 15%、16% 又は 19% 相当額</p> <p>③ 普通法人である連結親法人で令和2年旧措置法第68条の8の規定の適用がないもの $(25) \times \frac{(27)}{(24)}$ 又は (25) の 15%、16% 又は 19% 相当額</p> <p>(2) (1)以外の場合 $(25) \times \frac{(27)}{(24)}$ 又は (25) の 15%、16% 又は 19% 相当額</p>	<p>(1)③は、普通法人である連結親法人が適用除外事業者に該当するときに該当することとなります。</p>
<p>「算出連結法人税個別帰属額(26)の20%又は23.2%相当額) 29」</p>	<p>「29」は、連結親法人の次に掲げる区分に応じそれぞれ次により記載します。</p> <p>(1) 協同組合等である連結親法人及び令和2年旧措置法第68条の100第1項の承認を受けている同項に規定する医療法人である連結親法人 (26)の20%又は23.2%相当額</p> <p>(2) (1)以外の連結親法人 (26)の20%又は23.2%相当額</p>	

各連結事業年度の連結地方法人税の個別帰属額の計算に関する明細書

1 この明細書の用途

- (1) この明細書は、連結子法人が、令和2年旧法第81条の25(個別帰属額等の届出)の規定により、各連結事業年度に係る令和2年旧地方法第15条第1項(連結法人の地方法人税の個別帰属額の計算)の規定により計算される地方法人税の負担額として帰せられる金額又は地方法人税の減少額として帰せられる金額(以下「連結地方法人税個別帰属額」といいます。)の計算の基礎を記載した書類を提出する場合に使用し、各連結事業年度の連結法人税の個別帰属額の届出書に添付して提出します。
- (2) この明細書は、連結親法人が、令和2年旧地方法第19条第4項(確定申告)及び令和2年旧地方規則第6条(連結法人の地方法人税確定申告書の添付書類)の規定により、令和2年旧地方法第19条第1項の規定による申告書に各課税事業年度に係る連結地方法人税個別帰属額の計算の基礎を記載した書類を添付する場合にも使用します。

2 各欄の記載要領

欄	記載要領	注意事項
「算出連結法人税個別帰属額に係る連結地方法人税個別帰属額1」	連結法人税個別帰属額届出書の「2」の金額がマイナスである場合には、この算式により計算した金額に△を付して記載します。	
「加算調整額2」		「加算調整額8」の外書に記載した金額を含めて記載します。
「連結留保税額の個別帰属額に係る連結地方法人税個別帰属額5」	連結親法人が普通法人(令和2年旧措置法第68条の100第1項(特定の医療法人である連結親法人の法人税率の特例)の規定により承認を受けた医療法人(以下「特定の医療法人」といいます。))を除きます。)である連結法人が記載します。	連結親法人が協同組合等又は特定の医療法人である連結法人は、この欄を記載する必要はありません。
「加算調整額8」の外書	令和2年旧措置法第68条の67第1項(連結法人に用途秘匿金の支出がある場合の課税の特例)に規定する用途秘匿金の支出がある場合には、連結法人税個別帰属額届出書「10」の上段に外書として記載した金額の10.3%に相当する金額を記載します。この場合において、「加算調整額2」は、この外書として記載した金額を含めて計算します。	
「連結欠損金の繰戻しによる還付金の個別帰属額に係る連結地方法人税個別帰属額12」	(1) 修正申告をする場合において、令和2年旧地方法第23条第1項(欠損金の繰戻しによる法人税の還付があった場合の還付)の規定により還付を受ける金額に係る還付加算金があるときは、その還付加算金の額(その連結法人に帰せられるものに限り)を含めて記載します。 (2) 還付所得連結事業年度に該当する課税事業年度の区分に応じ、それぞれ次の金額を記載します。 ① 令和元年10月1日以前に開始した課税事業年度 連結法人税個別帰属額届出書「13」の金額の4.4%	

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
	<p>に相当する金額</p> <p>② 令和元年10月1日以後に開始する課税事業年度 連結法人税個別帰属額届出書「13」の金額の10.3% に相当する金額</p>	
<p>「連結欠損金の繰戻し による還付金の個別帰 属額に係る連結地方法 人税個別帰属額12」の 外書</p>	<p>還付所得連結事業年度に該当する課税事業年度の区分 に応じ、それぞれ次の金額を記載します。</p> <p>(1) 令和元年10月1日前に開始した課税事業年度 連結法人税個別帰属額届出書「13」の上段に外書とし て記載した金額の4.4%に相当する金額</p> <p>(2) 令和元年10月1日以後に開始する課税事業年度 連結法人税個別帰属額届出書「13」の上段に外書とし て記載した金額の10.3%に相当する金額</p> <p>(注) 法人税額の計算における「連結欠損金の繰戻しによる 還付請求税額」欄（別表一の二の「27」）の外書の金額の 4.4%又は10.3%に相当する金額が、地方法人税額の計算 における「この申告による還付金額」欄（別表一の二の 「45」）の外書の金額を超える場合には、次により計算 した金額を記載します。</p> <p>(別表一の二の「45」)の外書 × $\frac{\text{別表七の二付表一の「24」}}{\text{別表七の二付表一の「26」}}$</p>	

VI 参 考

連結確定申告書及び地方法人税確定申告書の添付書類として納税地の所轄税務署長に提出する個別帰属額に関する書類については、その書類のうち連結子法人分は連結確定申告書及び地方法人税確定申告書別表により作成したものに限り添付を省略することができます。

また、連結子法人の本店又は主たる事務所の所在地の所轄税務署長に提出する個別帰属額等の届出書は、その連結子法人に係る各別表の付表だけでなく、その連結子法人の個別帰属額を算出するために必要な別表も提出する必要があります。

その提出する書類及び連結法人の区分ごとに、提出を要するもの（○）、省略できるもの（△）又は提出を要しないもの（×）に整理すると、次表のとおりとなります。

(注) 次表は令和4年4月1日以後に終了する連結事業年度等分の法人税及び地方法人税の申告書別表に対応しています。

別表番号等	別表の名称	連結確定申告書	連結確定申告書の添付書類		個別帰属額等の届出書
			親	子	子
1の2及び1の2次葉	各連結事業年度の連結所得に係る申告書	○	×	×	×
	個別帰属額等の一覧表	×	○ (全体で1枚)		×
個別帰属額の届出書	各連結事業年度の連結法人税の個別帰属額の届出書	×	○	○	○
個別帰属額の届出書付表	各連結事業年度の連結地方法人税の個別帰属額の計算に関する明細書	×	○	○	○
2	同族会社等の判定に関する明細書	○	×	×	×
3(2)	土地の譲渡等に係る譲渡利益金額に対する税額の計算に関する明細書	○	○	△	○
3(2の2)	優良住宅地等のための譲渡に該当しないこととなった土地等の譲渡に係る譲渡利益金額に対する税額の計算に関する明細書	○	○	△	○
3(2の3)	確定優良住宅地等予定地のための譲渡に該当する土地等及び優良住宅地等のための譲渡に該当することとなった土地等に関する明細書	○	○	△	○
3(2の3)付表	確定優良住宅地等予定地のための譲渡に係る直接又は間接に要した経費の額等の計算に関する明細書	○	○	△	○
3(3)	短期所有に係る土地の譲渡等に係る譲渡利益金額に対する税額の計算に関する明細書	○	○	△	○
3(4)	課税除外とされる短期所有に係る土地等（面積1,000平方メートル以上のもの）の譲渡に係る対価の額等に関する明細書	○	○	△	○
3(5)	課税除外とされる短期所有に係る土地（面積1,000平方メートル未満のもの）の譲渡に係る対価の額等に関する明細書	○	○	△	○
3(6)	課税除外とされる買取仲介に係る短期所有に係る土地等の譲渡益に関する明細書	○	○	△	○

別表番号等	別表の名称	連結確定申告書	連結確定申告書の添付書類		個別帰属額等の届出書
			親	子	子
3(7)	課税除外とされる不動産特定共同事業契約に係る事業参加者から取得した短期所有に係る土地等の譲渡益に関する明細書	○	○	△	○
3の2	連結特定同族会社の連結留保金額に対する税額の計算に関する明細書	○	○	△	○
3の2付表1	連結特定同族会社の連結留保金額から控除する連結留保控除額の計算に関する明細書	○	○	△	○
3の2付表2	連結特定同族会社の連結留保金額に対する税額の個別帰属額の計算に関する明細書	○	○	△	○
3の2付表3	連結特定同族会社の留保金個別帰属額から控除する留保控除個別帰属額の計算に関する明細書	○	○	△	○
4の2	連結所得の金額の計算に関する明細書	○	×	×	×
4の2付表	個別所得の金額の計算に関する明細書	○	○	△	○
5(1)付表	種類資本金額の計算に関する明細書	○	○	△	○
5の2(1)	連結利益積立金額の計算に関する明細書	○	×	×	×
5の2(1)付表1	連結個別利益積立金額及び連結個別資本金等の額の計算に関する明細書	○	○	△	○
5の2(1)付表2	連結子法人の株主等における帳簿価額修正額のうちその連結子法人に係る部分の金額の計算に関する明細書	○ (子法人分のみ)	×	△	○
5の2(2)	連結法人の租税公課の納付状況等に関する明細書	○	×	×	×
5の2(2)付表	各連結法人の租税公課の納付状況等に関する明細書	○	○	△	○
6(2)付表1	国外事業所等帰属所得に係る所得の金額の計算に関する明細書	○	○	△	○
6(2)付表2	国外事業所等に帰せられるべき資本に対応する負債の利子の損金不算入額の計算及び銀行等の資本に係る負債の利子の損金算入額の計算に関する明細書	○	○	△	○
6(2)付表3	国外事業所等帰属資本相当額の計算に関する明細書	○	○	△	○
6(2)付表4	保険会社の投資資産超過額に係る投資収益の益金不算入に関する明細書	○	○	△	○
6(2)の2)	当期の控除対象外国法人税額又は個別控除対象外国法人税額に関する明細書	○	○	△	○
6(3)	外国税額の繰越控除余裕額又は繰越控除限度超過額等の計算に関する明細書	○	○	△	○
6(3)付表1	地方税の控除限度額の計算の特例に関する明細書	○	○	△	○
6(3)付表2	適格合併等に係る合併法人等の調整後の繰越控除余裕額又は繰越控除限度超過額等の計算に関する明細書	○	○	△	○
6(3)付表3	適格分割等に係る分割法人等の調整後の繰越控除余裕額又は繰越控除限度超過額等の計算に関する明細書	○	○	△	○

別表番号等	別表の名称	連結確定申告書	連結確定申告書の添付書類		個別帰属額等の届出書
			親	子	子
6(4)	控除対象外国法人税額又は個別控除対象外国法人税額に関する明細書	○	○	△	○
6(4の2)	外国子会社配当益金不算入の対象とならない剰余金の配当等の額のうち特定課税対象金額等を超える金額等に対応する控除対象外国法人税額又は個別控除対象外国法人税額に関する明細書	○	○	△	○
6(5)	利子等に係る控除対象外国法人税額又は個別控除対象外国法人税額等に関する明細書	○	○	△	○
6(36)	リース特別控除取戻税額に関する明細書	○	○	△	○
6(37)	リース資産の使用状況等に関する明細書	○	○	△	○
6の2(1)	連結事業年度における所得税額の控除に関する明細書	○	○	△	○
6の2(2)	連結事業年度における外国税額の控除に関する明細書	○	○	△	○
6の2(2)付表	各連結法人の外国税額の控除に関する明細書	○	○	△	○
6の2(2の2)	連結事業年度における分配時調整外国税相当額の控除及び各連結法人の地方法人税の額から控除する分配時調整外国税相当額の個別帰属額の計算に関する明細書	○	○	△	○
6の2(3)	法人税の額から控除される特別控除額に関する明細書	○	○	△	○
6の2(3)付表	前期繰越分に係る当期税額控除可能額及び調整前連結税額超過構成額に関する明細書	○	○	△	○
6の2(4)	特定税額控除規定の適用可否の判定に関する明細書	○	○	△	○
6の2(5)	一般試験研究費に係る法人税額の特別控除に関する明細書	○	○	△	○
6の2(5)付表	各連結法人の当期控除額の個別帰属額に関する明細書	○	○	△	○
6の2(6)	中小連結法人の試験研究費に係る法人税額の特別控除に関する明細書	○	○	△	○
6の2(6)付表	各連結法人の当期控除額の個別帰属額に関する明細書	○	○	△	○
6の2(7)	試験研究を行った場合の法人税額の特別控除における各連結法人の比較試験研究費の額及び平均売上金額の計算に関する明細書	○	○	△	○
6の2(8)	試験研究を行った場合の法人税額の特別控除における基準年度比売上金額減少割合及び基準年度試験研究費の額の計算に関する明細書	○	○	△	○
6の2(9)	特別試験研究費に係る法人税額の特別控除に関する明細書	○	○	△	○
6の2(9)付表	各連結法人の当期控除額の個別帰属額に関する明細書	○	○	△	○
6の2(10)	高度省エネルギー増進設備等を取付した場合の法人税額の特別控除に関する明細書	○	○	△	○
6の2(10)付表	高度省エネルギー増進設備等の取得価額に関する明細書	○	○	△	○

別表番号等	別表の名称	連結確定申告書	連結確定申告書の添付書類		個別帰属額等の届出書
			親	子	子
6の2(11)	中小連結法人が機械等を取得した場合の法人税額の特別控除に関する明細書	○	○	△	○
6の2(11)付表	機械等の取得価額に関する明細書	○	○	△	○
6の2(12)	沖縄の特定地域において工業用機械等を取得した場合の法人税額の特別控除に関する明細書	○	○	△	○
6の2(12)付表	認定事業者及び工業用機械等の取得価額に関する明細書	○	○	△	○
6の2(13)	国家戦略特別区域において機械等を取得した場合の法人税額の特別控除に関する明細書	○	○	△	○
6の2(13)付表	機械等の取得価額に関する明細書	○	○	△	○
6の2(14)	国際戦略総合特別区域において機械等を取得した場合の法人税額の特別控除に関する明細書	○	○	△	○
6の2(14)付表	機械等の取得価額に関する明細書	○	○	△	○
6の2(15)	地域経済牽引事業の促進区域内において特定事業用機械等を取得した場合の法人税額の特別控除に関する明細書	○	○	△	○
6の2(15)付表	特定事業用機械等の取得価額に関する明細書	○	○	△	○
6の2(16)	地方活力向上地域等において特定建物等を取得した場合の法人税額の特別控除に関する明細書	○	○	△	○
6の2(16)付表	特定建物等の取得価額に関する明細書	○	○	△	○
6の2(17)	地方活力向上地域等において雇用者の数が増加した場合の法人税額の特別控除に関する明細書	○	○	△	○
6の2(17)付表1	各連結法人の基準雇用者数等、給与等支給額及び比較給与等支給額の計算に関する明細書	○	○	△	○
6の2(17)付表2	地方事業所特別税額控除限度額に係る加算対象税額控除限度額の計算に関する明細書	○	○	△	○
6の2(17)付表3	各連結法人の当期控除額の個別帰属額に関する明細書	○	○	△	○
6の2(18)	認定地方公共団体の寄附活用事業に関連する寄附をした場合の法人税額の特別控除に関する明細書	○	○	△	○
6の2(18)付表	調整前個別帰属法人税額の計算に関する明細書	○	○	△	○
6の2(19)	特定中小連結法人が経営改善設備を取得した場合の法人税額の特別控除に関する明細書	○	○	△	○
6の2(20)	中小連結法人が特定経営力向上設備等を取得した場合の法人税額の特別控除に関する明細書	○	○	△	○
6の2(20)付表	特定経営力向上設備等の取得価額に関する明細書	○	○	△	○
6の2(21)	国内新規雇用者に対する給与等の支給額が増加した場合の法人税額の特別控除に関する明細書	○	○	△	○
6の2(21)付表	各連結法人の当期控除額の個別帰属額に関する明細書	○	○	△	○
6の2(22)	中小連結法人の給与等の支給額が増加した場合の法人税額の特別控除に関する明細書	○	○	△	○

別表番号等	別表の名称	連結確定申告書	連結確定申告書の添付書類		個別帰属額等の届出書
			親	子	子
6の2(22)付表	各連結法人の当期控除額の個別帰属額に関する明細書	○	○	△	○
6の2(23)	給与等の支給額が増加した場合の法人税額の特別控除における各連結法人の個別給与控除額の計算に関する明細書	○	○	△	○
6の2(24)	認定特定高度情報通信技術活用設備を取得した場合の法人税額の特別控除に関する明細書	○	○	△	○
6の2(24)付表	認定特定高度情報通信技術活用設備の取得価額に関する明細書	○	○	△	○
6の2(25)	事業適応設備を取得した場合等の法人税額の特別控除に関する明細書	○	○	△	○
6の2(25)付表	事業適応設備の取得価額等に関する明細書	○	○	△	○
6の2(26)	特定復興産業集積区域若しくは復興産業集積区域等において機械等を取得した場合の法人税額の特別控除、企業立地促進区域等において機械等を取得した場合の法人税額の特別控除又は避難解除区域等において機械等を取得した場合の法人税額の特別控除に関する明細書	○	○	△	○
6の2(26)付表	機械等の取得価額に関する明細書	○	○	△	○
6の2(27)	特定復興産業集積区域において被災雇用者等を雇用した場合の法人税額の特別控除、企業立地促進区域等において避難対象雇用者等を雇用した場合の法人税額の特別控除又は避難解除区域等において避難対象雇用者等を雇用した場合の法人税額の特別控除に関する明細書	○	○	△	○
7の2	連結欠損金等の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
7の2付表1	連結欠損金当期控除額及び連結欠損金個別帰属額の計算に関する明細書	○	○	△	○
7の2付表2	連結欠損金当期控除前の連結欠損金個別帰属額の調整計算に関する明細書	○	○	△	○
7の2付表3	連結法人の災害により生じた損失の額等の計算に関する明細書	○	○	△	○
7の2付表4	更生欠損金の損金算入及び民事再生等評価換えが行われる場合の再生等欠損金の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
7の2付表5	民事再生等評価換えが行われる場合以外の再生等欠損金の損金算入及び解散の場合の欠損金の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
7の2付表6	認定事業適応連結法人の連結欠損金の損金算入の特例に関する明細書	○	○	△	○
8(2)	外国子会社から受ける配当等の益金不算入等に関する明細書	○	○	△	○
8(3)	特定支配関係がある他の法人から受ける対象配当等の額等に関する明細書	○	○	△	○
8(3)付表	特定支配後増加利益剰余金額超過額等の計算に関する明細書	○	○	△	○
8の2	連結事業年度における受取配当等の益金不算入に関する明細書	○	○	△	○

別表番号等	別表の名称	連結確定申告書	連結確定申告書の添付書類		個別帰属額等の届出書
			親	子	子
8の2付表	連結事業年度における受取配当等の益金不算入の個別帰属額の計算に関する明細書	○	○	△	○
9(1)	保険会社の契約者配当の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
9(2)	組合事業等による組合等損失額の損金不算入又は組合等損失超過合計額の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
10(2)	国家戦略特別区域における指定法人の所得又は連結所得の特別控除及び要加算調整額の益金算入に関する明細書	○	○	△	○
10(3)	探鉱準備金又は海外探鉱準備金の損金算入及び新鉱床探鉱費又は海外新鉱床探鉱費の特別控除に関する明細書	○	○	△	○
10(4)	対外船舶運航事業者の日本船舶による収入金額に係る所得又は連結所得の金額の損金算入又は益金算入に関する明細書	○	○	△	○
10(4)付表1	日本船舶外航事業に係る所得又は連結所得の金額の計算に関する明細書	○	○	△	○
10(4)付表2	日本船舶外航事業に係る当期利益の額又は当期欠損の額の計算に関する明細書	○	○	△	○
10(7)	社会保険診療報酬に係る損金算入、農地所有適格法人の肉用牛の売却に係る所得又は連結所得の特別控除、特定の基金に対する負担金等の損金算入及び特定業績連動給与の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
10の2(1)	沖縄の認定法人の連結所得の特別控除に関する明細書	○	○	△	○
10の2(2)	収用換地等及び特定事業の用地買収等の場合の連結所得の特別控除等並びに資産の譲渡に係る特別控除額の損金不算入に関する明細書	○	○	△	○
10の2(3)	特別新事業開拓事業者に対し特定事業活動として出資をした場合の特別勘定の金額の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
10の2(3)付表	各特定株式の特別勘定の金額に関する明細書	○	○	△	○
11(1)	個別評価金銭債権に係る貸倒引当金の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
11(1)の2)	一括評価金銭債権に係る貸倒引当金の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
11(2)	返品調整引当金の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
12(1)	海外投資等損失準備金の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
12(2)	中小企業事業再編投資損失準備金の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
12(3)	新事業開拓事業者投資損失準備金の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
12(4)	金属鉱業等鉱害防止準備金の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
12(5)	廃棄物最終処分場に係る特定災害防止準備金の損金算入に関する明細書	○	○	△	○

別表番号等	別表の名称	連結確定申告書	連結確定申告書の添付書類		個別帰属額等の届出書
			親	子	子
12(6)	特定廃棄物最終処分場に係る特定災害防止準備金の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
12(7)	新幹線鉄道大規模改修準備金の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
12(8)	原子力発電施設解体準備金の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
12(9)	特定原子力施設炉心等除去準備金の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
12(10)	保険会社等の異常危険準備金の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
12(11)	関西国際空港用地整備準備金の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
12(12)	中部国際空港整備準備金の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
12(13)	特別修繕準備金の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
12(14)	農業経営基盤強化準備金の損金算入及び認定計画等に定めるところに従い取得した農用地等の圧縮額の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
12(15)	再投資等準備金の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
12(16)	福島再開投資等準備金の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
12(17)	特定事業再編投資損失準備金の益金算入に関する明細書	○	○	△	○
12(18)	岩石採取場及び露天石炭採掘場に係る特定災害防止準備金の益金算入に関する明細書	○	○	△	○
12(19)	特定都市鉄道整備準備金の益金算入に関する明細書	○	○	△	○
13(1)	国庫補助金等、工事負担金及び賦課金で取得した固定資産等の圧縮額等の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
13(2)	保険金等で取得した固定資産等の圧縮額等の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
13(3)	交換により取得した資産の圧縮額の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
13(4)	収用換地等に伴い取得した資産の圧縮額等の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
13(5)	特定の資産の買換えにより取得した資産の圧縮額等の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
13(6)	特定の交換分合により取得した土地等の圧縮額の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
13(7)	特定普通財産とその隣接する土地等の交換に伴い取得した特定普通財産の圧縮額の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
13(8)	平成21年及び平成22年に先行取得をした土地等の圧縮額の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
13(9)	賦課金で取得した試験研究用資産の圧縮額の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
13(10)	転廃業助成金等で取得した固定資産等の圧縮額等の損金算入に関する明細書	○	○	△	○

別表番号等	別表の名称	連結確定申告書	連結確定申告書の添付書類		個別帰属額等の届出書
			親	子	子
14(1)	民事再生等評価換えによる資産の評価損益に関する明細書	○	○	△	○
14(3)	譲渡制限付株式に関する明細書	○	○	△	○
14(4)	新株予約権に関する明細書	○	○	△	○
14(6)	完全支配関係がある法人の間の取引の損益の調整に関する明細書	○	○	△	○
14(7)	特定資産譲渡等損失額の損金不算入に関する明細書	○	○	△	○
14(7)付表1	支配関係事業年度開始日における時価が帳簿価額を下回っていない資産並びに時価純資産価額及び簿価純資産価額等に関する明細書	○	○	△	○
14(7)付表2	前特定適格組織再編成等による移転資産の特例計算をした場合の特定資産譲渡等損失額の損金不算入に関する明細書	○	○	△	○
14(7)付表3	関連法人支配関係事業年度開始日における時価が帳簿価額を下回っていない資産並びに時価純資産価額及び簿価純資産価額等に関する明細書	○	○	△	○
14(8)	リース譲渡に係る収益及び費用の益金及び損金算入に関する明細書	○	○	△	○
14(9)	公益法人等が普通法人等に移行する場合等の累積所得金額又は累積欠損金額の益金又は損金算入等に関する明細書	○	○	△	○
14の2	連結事業年度における寄附金の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
15の2	交際費等の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
16(1)	旧定額法又は定額法による減価償却資産の償却額の計算に関する明細書	○	○	△	○
16(2)	旧定率法又は定率法による減価償却資産の償却額の計算に関する明細書	○	○	△	○
16(3)	旧生産高比例法又は生産高比例法による鉱業用減価償却資産の償却額の計算に関する明細書	○	○	△	○
16(4)	旧国外リース期間定額法若しくは旧リース期間定額法又はリース期間定額法による償却額の計算に関する明細書	○	○	△	○
16(5)	取替法による取替資産の償却額の計算に関する明細書	○	○	△	○
16(6)	繰延資産の償却額の計算に関する明細書	○	○	△	○
16(8)	一括償却資産の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
16(9)	特別償却準備金の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
16(10)	資産に係る控除対象外消費税額等の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
16(11)	非適格合併等に係る調整勘定の計算の明細書	○	○	△	○
17(1)	国外支配株主等に係る負債の利子等の損金算入に関する明細書	○	○	△	○

別表番号等	別表の名称	連結確定申告書	連結確定申告書の添付書類		個別帰属額等の届出書
			親	子	子
17(1)付表	国外支配株主等及び特定債券現先取引等に関する明細書	○	○	△	○
17(2)	対象純支払利子等の額の損金不算入の適用除外に関する明細書	○	×	×	×
17(3)	添付対象外国関係会社の名称等に関する明細書	○	○	△	○
17(3)付表1	添付対象外国関係会社に係る株式等の保有割合等に関する明細書	○	○	△	○
17(3)付表2	添付対象外国関係会社に係る外国関係会社の区分及び所得に対する租税の負担割合の計算に関する明細書	○	○	△	○
17(3の2)	特定外国関係会社又は対象外国関係会社の適用対象金額等の計算に関する明細書	○	○	△	○
17(3の3)	外国金融子会社等以外の部分対象外国関係会社に係る部分適用対象金額及び特定所得の金額等の計算に関する明細書	○	○	△	○
17(3の3)付表	外国金融子会社等以外の部分対象外国関係会社に係る特定所得の金額の計算等に関する明細書	○	○	△	○
17(3の4)	外国金融子会社等に係る金融子会社等部分適用対象金額及び特定所得の金額等の計算に関する明細書	○	○	△	○
17(3の4)付表	外国金融子会社等に係る特定所得の金額の計算等に関する明細書	○	○	△	○
17(3の5)	外国関係会社の課税対象金額等に係る控除対象外国法人税額等の計算に関する明細書	○	○	△	○
17(3の6)	外国関係会社に係る控除対象所得税額等相当額及び個別控除対象所得税額等相当額の控除並びに各連結法人の地方法人税の額から控除する個別控除対象所得税額等相当額の個別帰属額の計算に関する明細書	○	○	△	○
17(3の6)付表	外国関係会社の課税対象金額等に係る控除対象所得税額等相当額等の計算に関する明細書	○	○	△	○
17(3の7)	特定課税対象金額又は特定個別課税対象金額等がある場合の外国法人から受ける配当等の益金不算入額等の計算に関する明細書	○	○	△	○
17(3の7)付表1	適格組織再編成に係る合併法人等の調整後の課税済金額等の計算に関する明細書	○	○	△	○
17(3の7)付表2	適格分割等に係る分割法人等の調整後の課税済金額等の計算に関する明細書	○	○	△	○
17(3の8)	間接特定課税対象金額又は間接特定個別課税対象金額の計算に関する明細書	○	○	△	○
17(3の9)	特殊関係内国法人及び添付対象外国関係法人の状況等に関する明細書	○	○	△	○
17(4)	国外関連者に関する明細書	○	○	△	○
17の2(1)	連結法人の対象純支払利子等の額の損金不算入に関する明細書	○	×	×	×
17の2(1)付表1	各連結法人の対象支払利子等の額の計算に関する明細書	○	○	△	○

別表番号等	別表の名称	連結確定申告書	連結確定申告書の添付書類		個別帰属額等の届出書
			親	子	子
17の2(1)付表2	各連結法人の控除対象受取利子等合計額の計算に関する明細書	○	○	△	○
17の2(1)付表3	調整対象金額に係る調整額の計算に関する明細書	○	○	△	○
17の2(2)	連結超過利子額の損金算入に関する明細書	○	○	△	○
17の2(2)付表1	連結超過利子個別帰属額の計算に関する明細書	○	○	△	○
17の2(2)付表2	連結超過利子額当期損金算入前の連結超過利子個別帰属額の調整計算に関する明細書	○	○	△	○

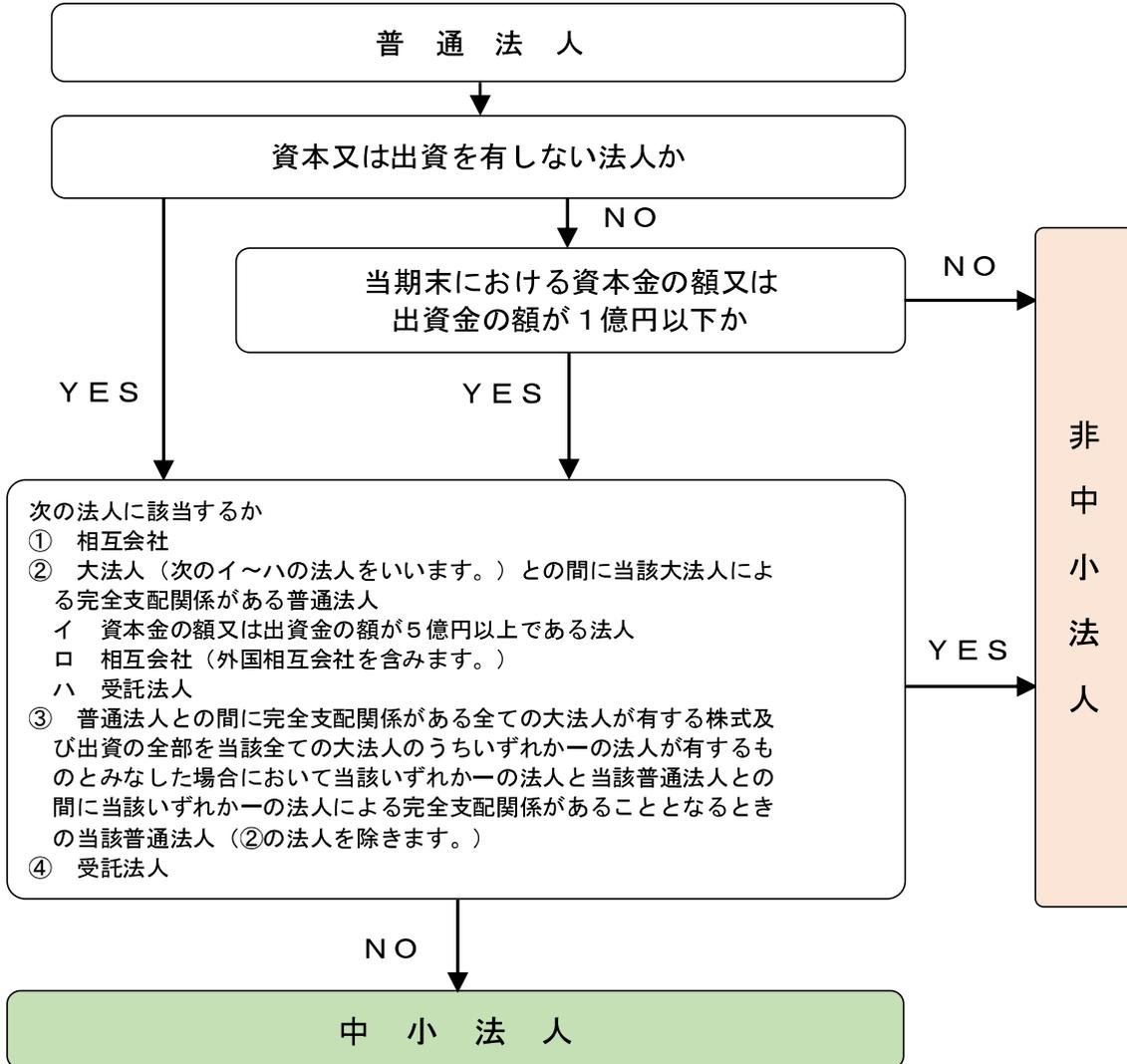
(注) 連結確定申告書及び地方法人税確定申告書別表の用紙は、国税庁のホームページ (<https://www.nta.go.jp/taxes/tetsuzuki/shinsei/annai/hojin/shinkoku/01.htm>) の所定の場所(「税の情報・手続・用紙」→「申告手続・用紙」→「確定申告等情報」→「法人税」→「法人税及び地方法人税の申告(法人税申告書別表等)」)に掲載しておりますので、印刷して御使用ください。

Ⅶ 中小連結法人の判定等

(1) 別表一の二における中小法人の判定

① 法人税率の軽減措置

法人税額を計算するに当たり、連結親法人が中小法人等（普通法人のうち中小法人に該当するもの又は協同組合等）に該当する場合には軽減税率が適用されます（令和2年旧法81の12②③⑥）。普通法人である連結親法人が中小法人に該当するかどうかは、次により判定することができます。

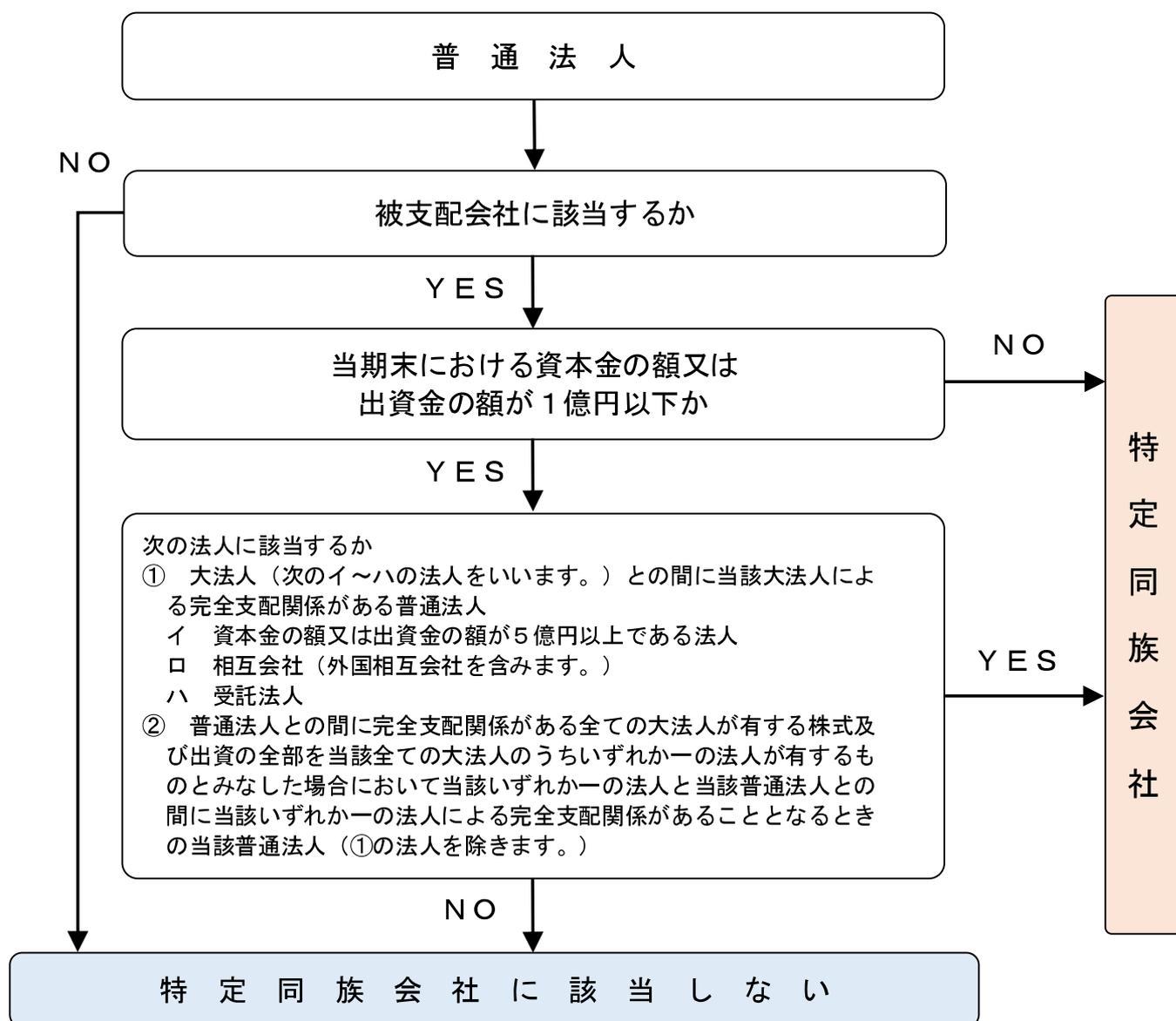


② 軽減税率の特例措置

中小法人等である連結親法人（普通法人である連結親法人のうち適用除外事業者に該当するものを除きます。）に対しては軽減税率の特例措置（一定の普通法人である連結親法人の連結所得金額のうち年800万円以下の金額に対する税率：19%→15%、協同組合等又は特定の医療法人である連結親法人の連結所得金額のうち年800万円以下の金額に対する税率：20%→16%）が適用されます（令和2年旧措置法68の8）。適用除外事業者の判定については、109ページを参照してください。

(2) 別表二及び三の二における特定同族会社の判定

連結親法人が特定同族会社に該当するかどうかは、次により判定することができます（令和2年旧法67①②、法81の13①）。



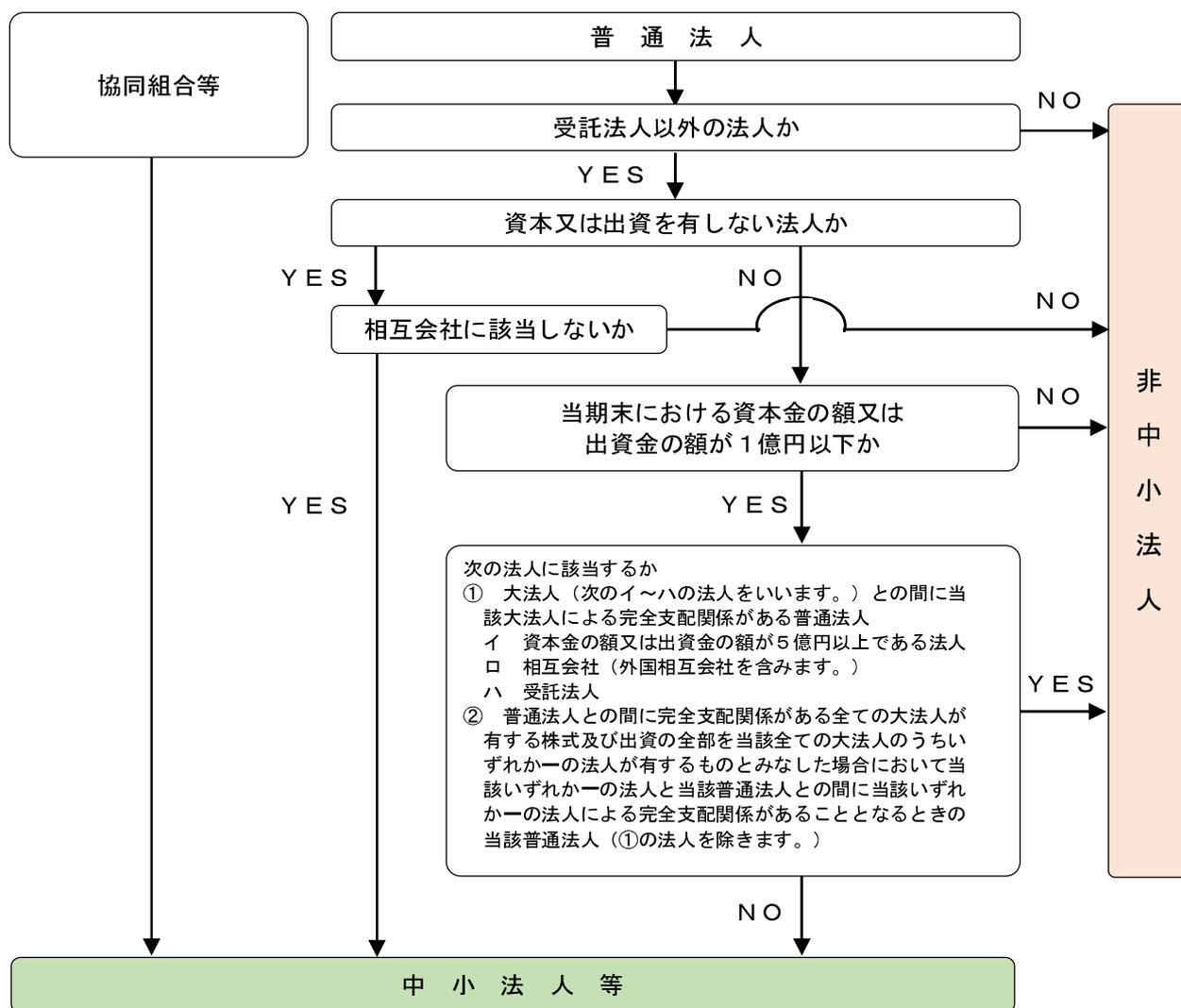
(注) 1 適用除外事業者の判定は必要ありません。

2 被支配会社とは、会社（投資法人を含みます。）の株主等（その会社が自己の株式又は出資を有する場合のその会社を除きます。）の1人並びにこれと特殊の関係のある個人及び法人がその会社の発行済株式又は出資（その会社が有する自己の株式又は出資を除きます。）の総数又は総額の100分の50を超える数又は金額の株式又は出資を有する場合等におけるその会社をいいます（法67②、令139の7）。

なお、被支配会社で、被支配会社であることについての判定の基礎となった株主等のうちに被支配会社でない法人がある場合には、その法人をその判定の基礎となる株主等から除外して判定することになります（令和2年旧法67①）。

(3) 別表七の二における中小法人等の判定

連結親法人が中小法人等に該当する場合、連結欠損金額の控除限度額は控除前連結所得金額となります（令和2年旧法81の9⑧）。連結親法人が中小法人等に該当するかどうかは、次により判定することができます。

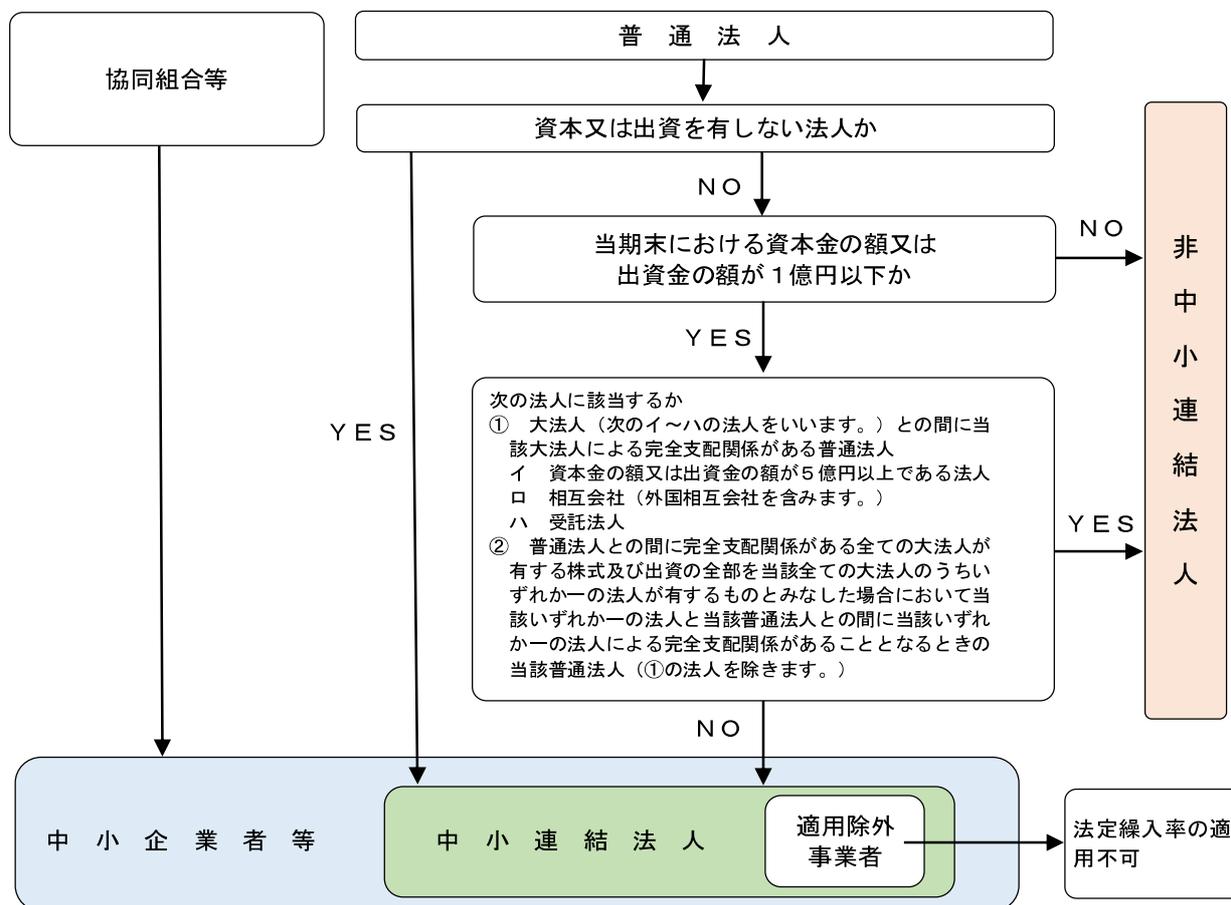


（注）適用除外事業者の判定は必要ありません。

(4) 別表十一(一)及び(一の二)における中小企業者等の判定

① 貸倒引当金の損金算入

連結親法人が中小企業者等に該当する場合の連結親法人及び当該連結親法人の連結子法人（中小企業者等に該当するものに限り、並びに銀行、保険会社を含む一定の金融業を営む連結法人等は、一定の額を限度として貸倒引当金勘定に繰り入れた金額を損金算入することができます（令和2年旧法52①②）。このうち中小企業者等に該当するかどうかは、次により判定することができます。



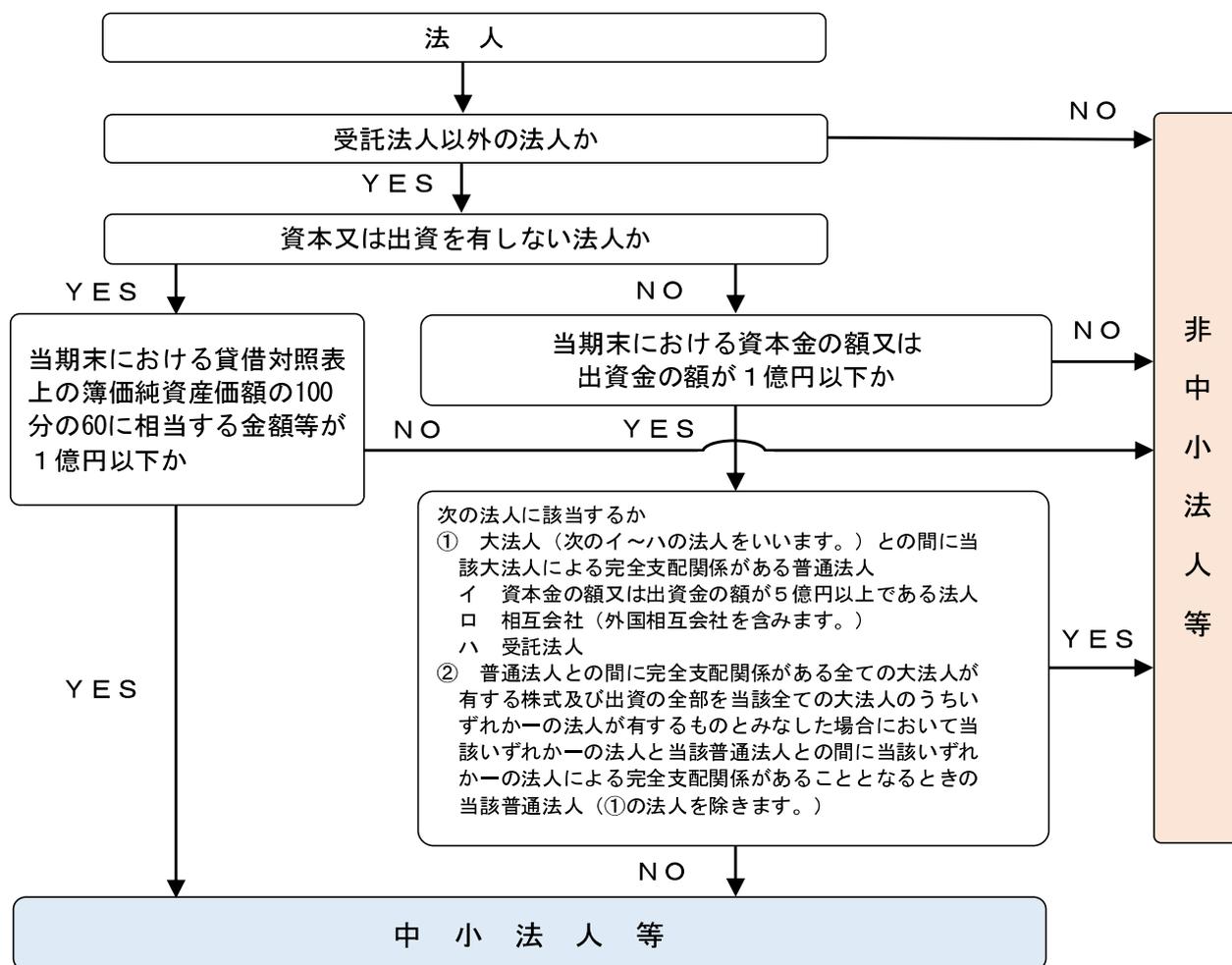
(注) 協同組合等は適用除外事業者の判定は必要ありません。

② 法定繰入率を適用することができる場合

中小企業者等（相互会社を除きます。）に該当する連結親法人（中小連結法人にあつては、適用除外事業者に該当するものを除きます。）又は当該連結親法人と連結完全支配関係にある連結子法人（資本金の額又は出資金の額が1億円超のものを除きます。）は、一括評価金銭債権に係る貸倒引当金の繰入限度額の計算において法定繰入率を適用することができます（令和2年旧措置法68の59、令和2年旧措置法令39の86③）。適用除外事業者の判定については、109ページを参照してください。

(5) 別表十五の二における中小法人等の判定

連結親法人が中小法人等に該当する場合、交際費等の損金算入限度額の計算上、定額控除限度額を適用することができます（令和2年旧措置法68の66②）。連結親法人が中小法人等に該当するかどうかは、次により判定することができます。



（注） 適用除外事業者の判定は必要ありません。

(6) 中小連結法人向け租税特別措置等の適用を受ける場合の判定

「中小連結法人の試験研究費に係る法人税額の特別控除に関する明細書」(別表六の二(六))などのように中小連結法人のみが適用を受けることができる租税特別措置(税額控除や特別償却等)や一定の取扱いが設けられています(上記(1)・(4)を除きます。)。各租税特別措置に対応する別表は次のとおりです。

No.	別表番号	別表名
①	六の二(五)	一般試験研究費に係る法人税額の特別控除に関する明細書
②	六の二(六)	中小連結法人の試験研究費に係る法人税額の特別控除に関する明細書
③	六の二(九)	特別試験研究費に係る法人税額の特別控除に関する明細書
④	六の二(十)	高度省エネルギー増進設備等を取得した場合の法人税額の特別控除に関する明細書
⑤	六の二(十一)	中小連結法人が機械等を取得した場合の法人税額の特別控除に関する明細書
⑥	六の二(十五)	地域経済牽引事業の促進区域内において特定事業用機械等を取得した場合の法人税額の特別控除に関する明細書
⑦	六の二(十六)	地方活力向上地域等において特定建物等を取得した場合の法人税額の特別控除に関する明細書
⑧	六の二(十八)	認定地方公共団体の寄附活用事業に関連する寄附をした場合の法人税額の特別控除に関する明細書
⑨	六の二(十九)	特定中小連結法人が経営改善設備を取得した場合の法人税額の特別控除に関する明細書
⑩	六の二(二十)	中小連結法人が特定経営力向上設備等を取得した場合の法人税額の特別控除に関する明細書
⑪	六の二(二十二)	中小連結法人の給与等の支給額が増加した場合の法人税額の特別控除に関する明細書
⑫	六の二(二十四)	認定特定高度情報通信技術活用設備を取得した場合の法人税額の特別控除に関する明細書
⑬	六の二(二十五)	事業適応設備を取得した場合等の法人税額の特別控除に関する明細書

上記別表は、国税庁ホームページ(令和4年4月以降に提供した法人税等各種別表関係(令和4年4月1日以後終了事業年度等又は連結事業年度等分))に掲載しています。

上記の各租税特別措置を適用する上で「中小連結法人」に該当するかどうかは、次の「中小連結法人の判定表」により判定することができます。

(注) 適用除外事業者に該当する法人は、中小連結法人向け租税特別措置の適用を受けることができませんので御注意ください。適用除外事業者の判定については、109ページを参照してください。

中小連結法人の判定表									
連結親法人の状況	発行済株式又は出資の総数又は総額		a		大規模法人等の保有する細	順位	大規模法人名	株式数又は出資金の額	
	aのうちその有する自己の株式又は出資の総数又は総額		b			1	i		
	差引 (a)-(b)		c				j		
	常時使用する従業員の数		d	人			k		
	大規模の法人保有割合	第1順位の株式数又は出資金の額 (i)		e				l	
		保有割合 (e)/(c)		f		%		m	
		大規模法人の保有する株式数等の計 (o)		g				n	
		保有割合 (g)/(c)		h		%	計 (i)+(j)+(k)+(l)+(m)+(n)		o
連結親法人の判定	資本金の額又は出資金の額が1億円以下の法人		「f」が1/2以上又は「h」が2/3以上の場合				⇒「中小連結法人」非該当		
	資本又は出資を有しない法人		「d」が1,000人を超える場合						
連結子法人の判定	資本金の額又は出資金の額が1億円以下の法人		連結親法人が「中小連結法人」非該当の場合				⇒「中小連結法人」非該当		

「大規模法人の保有する株式数等の明細 i～n」の各欄は、その法人の株主等のうち大規模法人について、その所有する株式数又は出資金の額の最も多いものから順次記載します。

(注) 大規模法人とは、次のイ～ハの法人をいい、中小企業投資育成株式会社を除きます。

イ 資本金の額又は出資金の額が1億円を超える法人

ロ 資本又は出資を有しない法人のうち常時使用する従業員の数が1,000人を超える法人

ハ 次の(イ)又は(ロ)の法人

(イ) 大法人(次のA～Cの法人をいいます。)との間にその大法人による完全支配関係がある普通法人

A 資本金の額又は出資金の額が5億円以上である法人

B 相互会社及び外国相互会社のうち常時使用する従業員の数が1,000人を超える法人

C 受託法人

(ロ) 普通法人との間に完全支配関係がある全ての大法人が有する株式及び出資の全部をその全ての大法人のうちいずれか一の法人が有するものとみなした場合において、そのいずれか一の法人とその普通法人との間にそのいずれか一の法人による完全支配関係があることとなるときのその普通法人((イ)の法人を除きます。)

(7) 適用除外事業者の判定

適用除外事業者とは、中小連結法人向け租税特別措置の適用を受けようとする連結親法人（以下「判定連結親法人」といいます。）及び当該判定連結親法人の連結子法人のうち、その連結事業年度（以下「判定対象年度」といいます。）開始の日前3年以内に終了した各連結事業年度（以下「基準年度」といいます。）の連結所得金額の合計額を各基準年度の月数の合計数で除し、これに12を乗じて計算した金額（次の①～③に掲げる事由がある場合には、その計算した金額に一定の調整を加えた金額）が15億円を超える法人をいいます（令和2年旧措置法68の9⑧七、令和2年旧措置法令39の39⑳～㉓）。

したがって、次の①～③に掲げる事由に該当することがなければ、単純に、合計で36月以上となる各基準年度の連結所得金額の合計額をその合計月数で除し、12を乗じて計算した金額が15億円を超えるかどうかで判定することとなります。

- ① 判定連結親法人又はその連結子法人（判定連結親法人による連結完全支配関係にあった法人を含みます。以下「連結子法人等」といいます。）が特定合併等に係る合併法人等に該当すること【2号】
（注） 特定合併等とは、合併等（合併、分割、現物出資、事業の譲受け又は特別の法律に基づく承継）のうち、判定対象年度開始の日から起算して3年前の日（以下「基準日」といいます。）から判定対象年度開始の日の前日までの間に行われた法人を設立する合併等で事業を移転するものなどをいいます（令和2年旧措置法令39の39㉓一）。
- ② 判定連結親法人が基準日の翌日から判定対象年度開始の日までの期間内に連結納税の承認を受けたこと又は連結子法人等がその期間内において判定連結親法人による連結完全支配関係を有することとなったこと【3号】
- ③ 判定連結親法人の各基準年度のうちにおいてその判定連結親法人の連結子法人が連結納税の承認を取り消されたこと【4号】

適用除外事業者に該当するかどうかは、次表により判定することができます。

適用除外事業者の判定表			
判定連結親法人及び各連結法人等の全てがその設立の日の翌日以後3年を経過していない場合			非該当
調整計算の要否		不要・要（令和2年旧措置法令第39条の39第21項第（ ）号）	
連結事業年度		各基準年度の連結所得金額 （別表一の二「1」等） （マイナスの場合は0）	（1）に対する法人税の額に係る連結 欠損金の繰戻し還付の金額の計算の 基礎となった連結欠損金相当額
		1	2
基準 年度	・	円	円
	・		
	・		
	・		
	・		
	・		
計			
基準年度の平均連結所得金額 （（（1の計）－（2の計））／（3の計））×12		4	円
調整 計算 が「 要 」 で ある 場合	（1の計）－（2の計） （（3の計）＞36の場合には、 （（（1の計）－（2の計））／（3の計））×36の金額）	5	
	合併等調整額	6	
	連結開始等調整額	7	
	連結離脱調整額	8	
	計 （5）＋（6）＋（7）＋（8）	9	
	平均連結所得金額 （9）／3	10	
適用除外事業者の判定 （（4）又は（10）＞15億円は該当）		11	該当・非該当

イ 判定連結親法人及び各連結法人等の全てが設立の日の翌日以後3年を経過していない場合には、適用除外事業者には該当しません。ただし、特定合併等が行われた場合には設立の日に一定の調整をして判定を行うこととなりますので御注意ください。

ロ 上記①～③の事由に該当する場合には、「調整計算の要否」の「要（令和2年旧措置法令第39条の39第21項第（ ）号）」欄に該当する号（上記①～③の【 】の号）を記載します（複数の号に該当する場合は全て記載します。）。この場合、基準年度の平均連結所得金額に一定の調整を加えて計算した金額（「5」から「10」までの各欄）により適用除外事業者の判定を行うこととなりますので御注意ください。

ハ 「合併等調整額6」には、令和2年旧措置法令第39条の39第22項第2号に規定する合併等調整額を記載します。

ニ 「連結開始等調整額7」には、令和2年旧措置法令第39条の39第22項第3号に規定する連結開始等調整額を記載します。

ホ 「連結離脱調整額8」には、令和2年旧措置法令第39条の39第22項第4号に規定する連結離脱調整額を記載します。